

サムライミ版のピーターに憑依した男っ！！

紅乃 晴@小説アカ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

目が覚めたらサム・ライミ版のスパイダーマンこと、ピーター・パーカーになってました。

目次

Vol. I パーカーショック

プロローグ 1

第一話 13

第二話 21

第三話 27

第四話 36

第五話 45

第六話 52

第七話 58

小話 65

第八話 69

第九話 75

第十話 85

第十一話 90

第十二話 98

第十三話 105

第十四話 109

第十五話 117

第十六話 124

第十七話 131

第十八話 139

第十九話 146

第二十話 156

第二十一話 162

最終話	172
エンドロール	179
Vol. II 蜘蛛男とアメリカのケツ	
プロローグ	182
第一話	187
第二話	191
第三話	198

Vol. I パーカーショック プロローグ

僕が誰かつて？

本当に知りたいの？

まあ……臆病な人には向かない話だよ。

僕の人生の話を、幸せなおとぎ話だとか、普通の男の話だとか、悩みのないやつの話だとか言うヤツがいたら、そいつはウソをついてる。

「おい！停まってくれ！乗せてくれ！」

ミッドタウン高校に向かうバスの横を必死に叩いている。

そう……これが僕。メガネに猫背で、いかにもオタクっぽい格好が学校の同学年の奴らから格好のいじめの標的にされてしまっている。バスの運転手も、車内で僕をバカにする奴らに便乗してわざと追いつけるか、追いつけないかの速度で走ってるんだ。

そんな意地悪なバスの横を並走するように僕は走っている。

誰も僕を助けてくれない。

それが当然だと、心のどこかで納得していたから、あんな事故に遭うことになったんだ。

「おい！乗せて……！」

再び叫ぼうとした時、横の路地から飛び出してきた車に僕は跳ねられた。ボンネットの上に叩きつけられた上に、数メートルほど吹っ飛んだと後から聞いたけど。

「パーカー!!」

「ドジなパーカーが車に撥ねられたぞ!!」

流石にヤバいと思ったいいじめ相手が、救急車を呼んでくれたことだけには感謝はしたかった。

そして、そこから僕の物語がはじまった。



スパイダーマンという作品に出会ったのは、まだ幼い頃だった。

それまでは脚が8本もあってネバネバした糸を出して、あらゆるところに巣を張って獲物を待ち構える蜘蛛が苦手だったのに、スパイダーマンというヒーローはその嫌悪感を吹き飛ばしてくれるほどの衝撃を与えてくれた。

手首から出す糸。強靱な肉体。ニューヨークの摩天楼を飛ぶ鮮やかなスイング。

そしてイカしたデザインの衣装もさることながら、一番魅力を感じたのは、どんな苦境に立たされても必ず立ち上がる主人公、ピーター・パーカーの在り方だった。

彼は市民からバッシングを受けようが、デイリービートルに悪態記事を書かれようが、どんなヴィランに打ちのめされようが……そして大切な友人や大切な人を失いながらも、必ず立ち上がって悪に向かい、挑んだ。

そのヒーローとしての姿が、幼い頃の自分には眩しくて、強烈で、とても憧れ、尊敬した。

その時から、スパイダーマンという作品の虜になったのかもしれない。自分の好きだったサム・ライミ版のスパイダーマンは三部作で終わってしまったが、その後のアメィジング・スパイダーマンや、マーベルシリーズのスパイダーマンも観たし、ゲームも初代から最新作まで買い漁って朝までプレイしたものだ。

あの日も、最新作のスパイダーマンの予告を見てからニューヨークを飛び回れるスパイダーマンのゲームを堪能して、布団に入ったはずだった。

だというのに。

目が覚めると、そこには信じられない光景が広がっていた。

「ピーター？」

目の前にクリフ・ロバートソンがいて、CV勝部演之さんの声が聞こえる。

いやいや、待て待て。待つて？脳内が混乱して思わず布団を口元まで上げてしまった。変な声が出そうになった。

そして、そんな俺の混乱など知ったことかと言わんばかりに脳内がかけられた言葉を自然と処理した。

「やあ、ベン叔父さん……」

あかん、今回の夢は相当アタリらしい。目の前に……あのベン叔父さんが……大いなる力には大いなる責任が伴うとピーターを諭してくれたベン叔父さんがいる!!と、内心でこんな夢を見てラツキーとガッツポーズを取る俺に、ベン叔父さんは優しく体を撫でてくれながら微笑んでくれた。

「車に撥ねられたと聞いた時は心底驚いたものだ」

そしてベンの後ろ、そこにはローズマリー・ハリス演のメイ・パークーがいた。彼女は花を花瓶に入れてから、目を覚ました俺に向かって微笑んでくれる。

「よかったわ、ピーター。頭を強く打ったとは聞いていたけど無事そうで何よりだわ」

おっほ、C V 谷育子さんやないかい!! いよいよもつてこの夢グツジヨブすぎだろ、と声を荒げたくなるが、ふと俺はここであることに気づいた。ベン叔父さんと、メイ叔母さんが見ず知らずの俺にこんな優しい声をかけてくれることなどあっただろうか？

いや、流石に人のいい2人でもあり得ない。

そこで俺は自分の中に沸いた疑問の答えを得るためにベッドから起き上がった。

「叔父さん、叔母さん。ちよつとトイレに行つてくるよ……」

「おいおい、無理をするもんじゃあないぞ」

「んん、平気……大丈夫だから」

頭はちよつとフラフラするけど、目立った怪我が無かったのが幸い……幸い？ 怪我？ なぜ、そんなことを考えるのか？ ああ、これは夢だからか。単純に納得して俺は病院の廊下に出た。見た目からしてアメリカンな病院。通路ですれ違う人もみんな外国人だが、妙に違和感を覚えなかった。

何か妙だ。

そんな感覚はどこかにあった。

はじめての病院だというのに迷うことなく俺は洗面所にたどり着いて、鏡に映った自分の姿を見た。

ああ、間違いない。

この夢は……スパイダーマンの世界だ。それもまだ能力を得てないピーター・パーカーの……。

この顔……トビー・マグワイヤそのものじゃあねえか！ 驚きの声を上げると同時に、自身の声もC V 猪野学ということに気がつく。

ということは……このスパイダーマンの世界はサム・ライミ版のスパイダーマンだ。何という僥倖。スパイダーマンという作品に出会うきっかけとなった世界に、夢とはいえ入り込む……しかもピーター自身になれるとは本当に夢のようだった。

だが、夢にしては……あまりにも出来すぎていた。妙にリアルで、浮遊感や夢見心地といった感覚はなかった。

まあ、これは夢だし、せつかくのサム・ライミ版のピーターになったんだからと樂觀視していた過去の自分を殴ってやりたい。

だって、病院で数日検査入院を終えて、郊外にあるパーカー家に戻ってきてても、隣に住むヒロイン、MJことメリー・J・ワトソンとその父の言い合いを聞いても、学校でフラッシュユにいじめられても、ベン叔父さんと2人で天体観測してもまっつったく夢から醒めないもの!!!

え？なに？夢にしてはリアルすぎるし長すぎない？フラッシュユにぶん殴られた頬は痛いし!!ちなみにぶん殴られた理由はフラッシュユ・トンプソン役のジョー・マンガニエロに会えて感激すぎて人目を憚らず抱きついたのが理由だったりする。あとMJと初めてあつた時は驚きと嬉しさのあまり硬直したのちに卒倒しました。保健室にお世話になったの計2回です。

だがしかし、フラッシュユにぶん殴られたあたりで気づいたけどこれは真面目に夢じゃないと思う。信じられないし、俺も信じたくはないけど、確かにこの世界はスパイダーマンの世界であり、あろうことか単なるファンでしかなかった俺が恐れ多くもスパイダーマンであるピーター・パーカーの肉体に入ってしまったているのだ。

オイオイオイ、俺死んだわ。

数日というか、数週間この世界で生活してみて分かったけど、おそらくピーターがコロンビア大学の研究室で蜘蛛に噛まれる一ヶ月前くらいに来てるわ俺。

つまり、俺はもうすぐスパイダーマンの能力を手に入れることになるし、後の親友であるハリー・オズボーンの父、ノーマン・オズボーンは未完成の超人薬を飲んで狂人化した人格が形成されたグリーンゴブリンになるわけだ。

そしてなにより、ベン叔父さんの死が間近に迫っている。

現実逃避してもこの世界がリアルに近い非現実であることに変わりはない。俺は学校でいじめられているし、コロンビア大学に社会見

学に行くのも確定しているのだ。

あかん、元のピーターがどういう精神構造をしていたのかはわからないけど、俺程度……単にスパイダーマンが好きな一般人にあんな過酷な運命を歩めるはずがない。

そう気づいたとき、俺は最初は夢見心地で最高だと思っていたこの世界が途端に恐ろしくなった。

ハイスクールに行くのも怖くて、家を出るのも怖くて、ベン叔父さんやメイ叔母さんに心配されたまま俺は学校をズル休みしていた。

流石に2日連続ズル休みとなると居心地も悪くなるものであって、2日目は学校に行くふりをして近くの公園で無職になったリーマンよろしく頂垂れる時間を過ごしていた。

寝ても覚めても、この世界から目覚める兆候はない。いったい俺はどれだけの時間をここで過ごさなければならぬのだろうか？

今は17歳。もう少しすれば高校も卒業だ。その頃に原作通りに進めば俺はきつとスパイダーマンの力を手に入れることになる。

けど、その大いなる力のために大いなる責任を負う覚悟なんて出来ていない。出来たとしても背負って生きていける自信がない。

そうだ！いっそのことコロンビア大学なんて行かずに今日みたいにズル休みをすればこのままスパイダーマンにならずに平凡なピーター・パーカーとして生きていけるのではないか!?

そんな打算にも似た思考に陥っていた時だった。

ふと、公園の入り口から外へボールが跳ねて出ていくのが見えた。それを一心不乱に追う少年。ボールは車道に出て行ってしまい、少年は構わずに歩道から車道に飛び出そうとした。すぐそこに大型のトラックが来ていることに気づかず……。

勝手に体が動いていた。

少年の後を全力で追って、車道に飛び出す直前に少年の手を掴んで引っ張ることができた。自分と少年の眼前を大型のトラックが過ぎ去る。ほんとにストレスで後一步出していれば俺も少年と同じように

轢かれていただろう。

少年を抱きとめて後ろ向きに倒れた俺は、異変に気づいた少年の母親がこつちに駆け寄ってくるのが見えた。

母親は少年を抱き上げて、何度も何度も俺に礼を言ってきた。さつきまでウダウダと現実逃避をしながら学校もサボって公園でぶらついてる俺にだ。

手を繋いで去ってゆく親子の背を見ながら俺は考えた。何故、あの時勝手に体が動いたのだろうか。ヒーローなんて責任重大な存在になる度胸もないのに。

いや、そんなことじゃない。そんなことはわかっていた。きつと、ピーター・パーカーという存在はスパイダーマンの力を手にしなくても不屈の精神と正義の心を持っていた。その心に俺も無意識に影響を受けていたのだろうか。

そんなもの、わからない。

だが、本当に感謝してくれたあの母親と、助けてくれてありがとうと言ってくれた少年の言葉だけは本当に、事実なのだと思うた。

きつとこのために、ピーターは……スパイダーマンは、どんな困難にも苦難の状況からも立ち上がって、立ち向かうことができたのだろう。

……よし、決めたぞ。

もう、ヒーローになれないとか、元の世界に帰れないとか、スパイダーマンになるのが恐ろしいなんて言わない。まだ何も現実になっていないことにクヨクヨ迷ったり、悩んだりしない。

たしかに、スパイダーマンことピーター・パーカーが歩む道は苦難の道だ。

だからこそ、俺はこの悲劇のフラグをへし折って、幸福なスパイダーマンとして生き残ってやる……!!

原作知識を使った無双ピーター・パーカーってやつを見せてやろうじゃあないか!!

▼

さて、幸福に生きてみせるぞ、と何処かの殺人鬼ばりな決意表明をしたのはいいが、まずはスパイダーマンの能力を授かることから始めなければならぬ。

となれば、学校に通うことから再開だ！と思っていたのだが……。

「おおい！待ってくれー!!乗せてくれ!!頼む!!止まってくれ!!」

相変わらず、スクールバスは止まってくれない。座席に座るクラスメイトたちがニヤニヤしながらバスを叩いている俺を見下ろしている。そうこうしないうちにスタミナが切れて、バスが行ってしまうのを見送った。

もう少し頑張つて走つたら、もしかするとあのバスに乗れたかもしれないけど、喉の奥はイガイガして、胸は痛いし、息苦しいし。気分は最悪だ。

「ただだけ扱い酷いんだよ……メガネでオタクな感じがそんなにダメなのか？顔立ちを整つてると思うんだけどなあ、こちとらトビー・マグワイアだぞコラア！」

そんな悪態を内心でついていると、黒塗りの車が俺の少し前でぴたりと止まった。え、なに怖いんですけど、黒塗りの車に後ろから突っ込んで免許出せコラアって言われるんですか？海外版ですか？ビリー兄貴呼んでももらえませんか？

「やあ、ピーター」

黒塗りの高級車から降りてきたのは、我がピーター・パーカーの後の親友であるハリー・オズボーンだった。ほえー、マジでジェームズ・フランコじゃねえかイケメンすぎやろ。しかも声は鉄野正豊さんで

すよ!!専属声優さんってやつですね!!

「ハリー!」

「さっきからバスの横でマラソンしてるのが見えたからさ。一緒に乗っていくかい?」

そう後ろに目を向けるハリー。史実のピーターなら、割と情けない姿を気にしてるからハリーの気配りを断ったりするだろうけど、だが覚悟を決めた俺は断りはしない!!是非とも乗らせて頂こう!!とハリーの申し出を快諾した。

あと、ハリーは超金持ち。そのせいでフラッシュとか他の悪ガキからたかられたりするからそれとなく守ったりして俺が殴られたりしてるから、原作より若干仲良くなってたりしてる。あと庇ったというより俳優さんたちにテンション上がって突っ込んだらぶっ飛ばされただけです。

「ハリー、なんか元気ない?」

車に向かう途中、どこかゲンナリしてるハリーにそう問いかけると、ハリーは肩をすくめて応えた。

「父からちよつとお小言を言われてね」

「お小言とは随分な言い方じゃあないか」

リムジンの中から、聞き覚えのある声が聞こえる。このCV……山路和弘!!ジェイソン・ステイサムの声が一番ピンとくる声優さんだ!!あとゴットファザーシリーズにもよく出てますね!!

え、というかこんなところでエンカウトしたっけ、ハリーのお父さん。

ハリーと共に車に乗り込むと、座席には高級そうなスーツに身を包んだウイレム・デフォォー……もとい、ノーマン・オズボーン社長が足

を組んで座っていた。ひえ、カッコいい。

「やあ、ピーター。ハリーからは話を聞いている。私は……」

「ノーマン・オズボーンさんですね！あなたの学術論文は全て目を通しました。内容も革新的で実利も伴った素晴らしいものばかりです」

「あー……全て読んだのかね？」

「はい、貴方の大学研究員の時の遺伝子工学最優秀賞を取ったものから全てです」

本音を言えば貴方のハイスクール時代に出した色々な論文まで国立図書館や母校まで調べてひっくり返して読み漁りましたごめんなさい。だってピーターの知識まんま使えんだぜ!? 英語も日本語バりに読める環境なんだ！読まないわけにはいかないぜ!! あとトニー・スタークの論文とかも読んでみたかったけどこの世界にはアイアンマンはいないみたいです。無念だ……!!

あと論文の中にはグライダーの雛形の構造力学とかの資料もあつてめっちゃめっちゃ読み応えありました。わからん用語もたくさんあつただけどな!!

「……素晴らしい。一度、君とはゆっくり話したいものだ」

ノーマンさんからお墨付きをもらえて嬉しいです。あとハリーが少し複雑な顔をしていました。うーん、ちよつと嫉妬的な感じがありますね！だがそんな複雑な感情なんて関係ないぜ!!

ノーマン・オズボーンが設立したオズコープの本社前でノーマンさんが降りるのを見送り、ハリーと一緒にハイスクールに行く道中、俺はハリーにある提案をした。

「ハリー、ちよつと共同研究に付き合っただけいいんだ」

「共同研究？」

首を傾げるハリーに、俺はカバンからノートを取り出してページをめくった。中に書かれているものを見たハリーは少し怪訝な顔をして俺を見てくる。

「あ、ああ、えつと……これをどうするんだ？」

「見た目からしてどう？」

「まあセンスは無いな？」

うん、知ってる。俺がメモしたのはパツとみPCの部品でしかない。基盤をいくつか繋ぎ合わせてバッテリーユニットを固定したガラクタだ。見栄えはかなり悪い。

「だろう？だから外観を君の手でアレンジしてほしい」

「……本気かい？」

まじまじとこつちを見るハリーにオフコースと言わんばかりに俺は頷いた。

「本気だよ、まじだ。君のアイデアと、僕のアイデアを組み合わせるんだ。きつと君のお父さんも驚くものだ」

構想をノーマンさんに説明したあと、できれば予算の交渉と実験できる小さなラボが借りられたらという本音も交えてハリーに話すと、彼は少し考えてから手を差し伸ばしてきた。

「いいよ。一枚乗った」

「そこなくつちや」

後日、俺とハリーは資料をまとめて休暇中のノーマンさんの書斎をたずねた。結果、資料を見たノーマンはラボと資金の提供を快諾。データなどはオズコープに提出することになるが、そこは想定範囲

内。

ピーターの頭脳をフルに活かして、ハリーを巻き込んだ研究が軌道に乗り始めた頃。

ついにコロンビア大学の研究室見学の話が舞い込んでくるのだった。

第一話

ノーマンさんに話を通してから、コロンビア大学の社会見学までの期間。

俺ことピーター・パーカーは、ノーマンの息子であるハリーを引つ張り回してオズコープの管理下にあるラボで忙しい日々を過ごしています。

ハリーに持ちかけた話についてだけど、内容は割と簡単というか……俺が生きていた時代というか、前世では結構標準化されたものを逆輸入したものだつたりする。

俺が前世でやっていたのは制御機系のエンジニアだ。一言に電気制御と言えど、その内容は多岐にわたる。

たとえば工場で動いている機械の制御から、施設ネットワークの構築に、衛星回線を使ったデータリンクの構築とか。大手メーカーが出すあらゆる制御ユニットを横並びで繋げて丸一週間ビルのサーバールームに立てこもって配線作業をしていたりしていた。

そんなもって、膨大なビッグデータを平準化したり、そのデータから必要なものを抽出したり、あるいは平均値を取ったり……勤務体制はブラック通り越して暗黒だったけど、割と趣味にも走れたし、そういったことが面白かったから技術力はメキメキと上がっていった。

そしてそこに、ピーター・パーカーの天才的な頭脳が悪魔合体した結果、俺は「短納期」で「アグレッシブ」な機器の設計に着手したのだ。

簡単に言えば、ノーマンさんにデザインレビューした自立支援型のAIだ。

本音を言えばアイアンマンのジャービスみたいなクソかつこいい支援システムを作りたいんですけど、データベースの容量が足りなすぎるのと、単純に俺の技術力不足が原因で実現は難しいと判断されました、悔しい。

あと、サム・ライミ版の時代ってまだガラケーの時代で、画面スワイプできる液晶モニターが掌サイズに小型化されるのはもう少し先の話だったりする。具体的に言えば10年後くらい。

同時にラボ内でネットワーク直繋ぎの処理用のユニットには膨大なデータが一日中注ぎ込まれるため、機器も割と大きめになってしまった。

そこで、端末ボディを小さくするために処理ユニットは独立化させて、端末には電波で送受信させる仕組みを確立した。

実はこのやり方って工業用制御製品ではポピュラーな方法でもある。

この世界でも基本的な通信機器装置は取り扱っていたので助かった。型式は無論古くはなるが、頭数を増やせば何とかなる。

そのため大規模な開発やコストは大幅に削減できたりする。まあ処理ユニットはアホみたいに大きくなるし、演算用のCPUやメモリが馬鹿みたいに膨大になるから冷却の電気代とか管理費とか、そっちに金が掛かるんだけどね!!

ノーマンさんの話じゃ、将来的に人工衛星通信の一回線を取れば地球の裏側までデータの送受信は可能になるらしい。さすがオズコープ！俺にできない金の使い方を平然とやってのける！そこに痺れる憧れるう!!

ちなみに衛星通信の回線一本でめちゃくちゃ高い。前世俺の生涯年収を軽く2倍くらいした金額。月払い契約もできるらしいけど好き勝手やりたいなら占有回線買えば？というマネーパワーの権化みたいな言葉をいただきました。

さて、大まかな機能の設計はできたが、中身よりも外見が伴うのが世の常である。どれだけシステムが優秀でも見た目がダサければ客は寄ってこない。

そこで出番となるのが我が親友であるハリー・オズボーンである。ハリーに手伝ってもらったのはコクピットモジュールなどのレイアウトや、外見の簡略化や、基盤を保護するカバーのデザイン。それとノーマンさんが満足するようなプレゼン資料、広告用のデザイン

や、カタログなどの見栄え e t c。

サム・ライミ版の2作目、3作目でオズコープを守り抜いた手腕と才覚は折り紙付きで、ハリーの考案したデザインは修正もなく本採用された。

つまり、機器の中身は俺、外側や宣伝はハリーといった役回りで回している。

利益関係は全部ハリーにぶん投げてるし、そのままオズコープで使用する場合は研究員としての給与や補償をしてくれるとノーマンさんからも言質を取ってたりする。高校生にして就職先が決まったぜっ！やったね!!

ぶつちやけスパイダーマン活動も見据えて利権関係の土台を築き上げておきたかったなんていう邪な気持ちもあったわけだけど、ノーマンさんも画期的な自立支援システムだと絶賛してくれたし、これでグライダーや超人薬に頼らず、軍の需要や他産業への足掛かりになってくれればいいな、と思っっていたりしている。

そんなこんなで僅か一ヶ月で専用のラボもできたし、データ運用を見据えたテスト工場もノーマンさんが突貫工事で作ってくれたので、彼が本腰を入れてくれるのも時間の問題である。

あとは、ハリーと俺で得た利益を山分けして、夢の不労所得を得ながら俺は悠々とスパイダーマン活動に精を出せるって寸法なのさ！

そんな机上の空論を脳内で展開しながら、俺とハリーが乗る車はコロンビア大学に向かっていて。ラボで朝まで稼働実験を2人ですいて、ノーマンさんが迎えの車を寄越してくれなかったら危うく重要なイベントを逃すところであった。

ハリーはサボって寝たいと愚痴っていたが、無理矢理車に乗せてパンを口の中に突っ込みました。

何か、ピーターの性格変わったよな、と言われたけど気にしない。これもあれも俺の悲劇フラグをへし折るための種まきなのだから、その程度の事など何の問題もないのだ!!

……ないよね？バタフライエフェクトとかないよね？そんな一抹の不安を心の隅で感じながら、俺たちは車から降りてコロンビア大学

の入り口へと向かう。

さて、クラスメイトに陰口叩かれながらスパイダーマンの能力を得るとしますか!!



最近、自身の築き上げてきた会社に多大なる貢献をし始めてくれた息子とその友人であるピーター。

若い視点から捉えた着眼点は、技術者や研究者としても高名なノーマンを驚かせるもので、普段は気怠げそうにしているハリーを巻き込んでノーマンの書齋に乗り込んできた上で、自身の設計したものをプレゼンテーションをしていくバイタリティにも、ノーマンは好感を持っていた。

現に彼らが開発した自立支援システムは、オズコープ社内でも試運転が始まっており、作業員や技術スタッフからの評価は上々と言ったところだった。

そんな優秀さの頭角を表し始めてある2人は、ハイスクールの授業の一環で今はコロンビア大学の研究室の見学に向かっている。

朝まで作業をしていた2人の尻を叩いて学校の授業に送り出したノーマンは、今まで共同研究をしてきたストローム博士と共に、大口クライアントであるスローカム將軍の社内視察に同行していた。

「グライダーはもう前回に見ている。他に我々にとって有益な代物はないのかね?」

1人乗り用の飛行グライダーの見学をしながら、將軍はつまらなそうにそう言った。彼が望むのは有益な兵器や、兵士、軍隊を強化するための製品だ。グライダーは空戦能力は高いが、操縦には並外れた

空間認識能力とフィジカルが必要になる “人を選ぶ武器” であり、万人受けする製品を求める将軍のお気にめさなかったようだ。

「スーパーソルジャー計画の薬品は？」

「テストは行っていますが……検体のマウスに凶暴性が端緒に現れる傾向が……」

ストローム博士とノーマンが主導で行っている兵士の肉体増強剤だが、これもまだまだ検証と治験をする必要がある代物だ。下手に服用すれば凶暴性や狂人性が顕著に現れることはマウスなどへの投与実験で明らかになっている。

ストローム博士の言葉に落胆するように息をついた将軍は冷ややかな目でノーマンを見た。彼はすでにオズコープのライバル企業にもアプローチを行っている。このまま目新しい製品をこちらが提示しなければ、彼らはすぐにライバル企業へと鞍替えをするに違いない。

大口顧客がライバル企業へと乗り換ええた場合、それは軍需産業のシェアが五割を占めているオズコープにとっては大打撃は免れない出来事であり、ノーマンは文字通り苦境に立たされていた。

「オズボーン君。君からは新たなプロジェクトの提案などは無いのかね？なければ我々は別の企業に……」

興味なさげな声調で言う将軍に対して、ノーマンはどこか迷ったような目を伏せて、最後の希望に手を伸ばした。

「お待ちください、将軍。……お見せしたいものがあります」

ストローム博士が驚く顔をした。まさかあれを軍に見せるつもりなのか？といった顔だ。だがノーマンに選択する余裕も時間もなかった。オズコープ所有のラボがある場まで将軍たちを案内した

ノーマンは、広大な実験場で往々しく手を広げた。

「こちらは、我がオズボーン社が極秘で開発している試作無人ユニットです」

ノーマンの目の前にあるのは、さつき将軍がつまらないと言って捨てたグライダーと、それに乗る白いボディに短い手足のようなものが生えた小型のロボットだ。

それは、ピーターが設計を行い、ハリーが外観のデザインを行った研究品であった。

「従来の無人を謳った柔なシステムではなく、この無人機はマザーユニットに蓄積されたあらゆる情報から取捨選択を行い、要求された依頼に対し最適な動作を導き出します」

ノーマンが手を叩くと、広大な実験場に幾つかのパネルが地面から迫り出してゆく。それはあつという間に敷地内に乱立して、だだっ広かった実験場を複雑に入り組んだ迷宮へと変貌させたのだった。

「ウエンデイ。レイアウト24を飛行開始。ただし最適経路で飛行せよ」

《ラージャ》

命令用のインカムを取り付けたノーマンがそう指示をすると、グライダーはふわりと浮かび飛翔する。グライダーを操るのはその上に乗る白い小型ロボットだ。操作性がピーキーだったはずのグライダーは凄まじい機動力で障害物を縦横無尽に避けては通り抜けて、あつという間に目的地である迷宮の出口へとたどり着いたのだ。

「レイアウトは18564通りあります。将軍の好きなレイアウトを選択ください」

ノーマンからインカムを受け取った將軍は遠慮なく自身の思考の中で思いついたレイアウトを選択し、その中でグライダーを飛ばし続けた。結果、どんな実験レイアウトでもグライダーは接触や激突をすることなく通り抜けてみせたのだった。

「ユニット内には小型の光学レンズカメラと、物体感知センサーが内蔵されており、対象の動きや反応、熱すらも感知できます」

あくまで試作品ですが、とピーターとハリーがこのロボットを持ってきたときに言っていたセリフをノーマンは飲み込んだ。これは社運をかけたプロジェクトだ。大口顧客である將軍らが手を引いて、ライバル企業に乗り換えられてしまえばオズコープに未来はない。

支援ユニットの性能を見た將軍は、さっきまでのつまらなそうな顔が嘘のような笑顔でノーマンに握手を求めた。

「……素晴らしいな、オズボーン君。君を見誤っていたよ」

「恐縮です、將軍」

「ところでこれは、思考プロセスも自立化させることはできるのかね？」

「いえ、あくまで指向性のみです。思考プロセスは操作者に委譲されます」

そう言うルールでピーターとハリーはこの支援ユニットを制作したのだ。これはあくまで人が命令を下し、それに応えることができる機器なのだ。人が使う機械に物を考えさせるのはナンセンスだとピーターは早々に自立思考という分野を切り捨てた。

機械や薬品はあくまで人の生活を豊かにし、支えるためにあるのだと言って。

だが目の前の顧客はそんなことはどうでもいいと言わんばかりにこう言った。

「では、オプションで自立思考プロセスも組み込めるようにしてくれ」
「……將軍、それは機械に物事を判断させるという解釈で正しいでしょうか？」

「ああ、そうだ。自分で考え、その最適な行動を自分で選択できる。軍は人件費が高くつくからな。それさえできれば戦場に貴重な人材を送り込まなくて済むであろう？」

「しかし、データベースの構築からになります」

「無論、支援は惜しまん。それに情報ソースなら我々が提供しようではないか。戦場という坩堝でな」

そう言い残して、將軍は大口契約のサインに署名をして部下を引き連れてオズコープを後にした。彼らの見送りをした後、ストローム博士が心配そうに問いかけてくる。

「ノーマン……本当にこれでよかったのか？」

「ああ会社は守られた。……パンドラの箱をこじ開けながらもな」

息子とその友が生み出したものを、ノーマンは分かっているながらも軍へと提供したのだ。

それがのちに、ニューヨークを恐怖のどん底へと陥れる『ウルトロン・オートマトン事件』に繋がることになるとも知らずに。

第二話

コロンビア大学内にある国際研究室。

そこでは、蜘蛛への遺伝子操作関係の研究が行われていた。

研究室の部屋には大小様々なケースが陳列しており、その中には様々な蜘蛛が飼育されていた。

うむ、見る限り不気味だ。

世界最大の蜘蛛種であるタランチュラ類と目があつた時は思わず息を呑むほどだった。

一応、学校新聞用のカメラを首から下げているが、進んで撮影しようという気にはなれないし、ハリーもゲエツといった顔で蜘蛛が入ったケースを見て回っている。

とりあえず程度のいい蜘蛛のケースに向けてカメラを構えると、大学の研究員生がなんとも言えない表情でこつちを見ていた。

あー、学校新聞に。そういうと、研究員生はどうぞと目線で答えてくれた。そしてレンズを覗き込んでシャッターをパシヤリ。見事にズレる。後ろからフラッシュが肩をトンと押してきたのだ。

「フラッシュ……見てわからない？学校新聞用の写真撮ってるんだけど」

振り返り、呆れた口調でそういうとニヤニヤしていたフラッシュの顔がスンッと真顔になった。おお怖い、けどイケメンなんだよなあ……。

「二丁前に俺に反論する気か？パーカー」

ゴキゴキと指の間接を鳴らすフラッシュ。チラリとハリーを見ると素知らぬ顔でそっぽを向いていた。この薄情者めっ！

「フラッシュユ。そんなにカツカしてたらしんどいばっかだよ？ハイ、チーズ」

パシヤリ、と怒り心頭なフラッシュユの顔を撮影。すると同時に胸ぐらをガツと掴まれた。

「今すぐここでぶん殴って……」

「何をするつもりだ？トンプソン」

気をつけろー！もうすぐ殴られるぞー！と、神掛かったタイミングで引率の先生が俺とフラッシュユの間にヌツと現れた。フラッシュユはなんとも言えない顔で、けど怒りは宿ったままの目つきで俺の襟首を離して乱雑に掴み上げてシワになったところを直した。

「よろしい、次騒ぎを起こしたら補習だからな？覚悟しておくように」

去ってゆく先生を張り付けたような笑顔で見送ると、フラッシュユはぐるりと振り返って俺を睨んだ。チャンスがあればぶん殴ってやるの顔ですね、ありがとうございました。取り巻きと共に去ってゆくフラッシュユを見送って小さく息を吐く。

「ピーター。余計な事を言ってアイツらを怒らせるなよ？」

「悪いのは向こうだよ、ハリー」

そうだけどき、と歯切れ悪く言うハリー。彼自身、フラッシュユは苦手だった。ハイスクール転校初日にカツアゲされたのが原因らしい。気持ちはすぐくわかる。

「おい、ピーターー！」

ハリーに小突かれて視線を顎で指してくる。目を向けるとそこには蜘蛛のいるケースを見ているMJがいた。ハリーは、ピーターがMJを好いてることを知っているのだ。だから気を利かせてくれたんだけど……。

「ハリーこそ、声かけなよ」

「何言ってるんだよ。お前、MJに気があるんだろ？」

「今のラボの研究でそれどころじゃないよ……」

嘘である。MJを演じる女優さん、キルステイン・ダンストさんは確かに綺麗だけど……ハリーとか、まだ見ぬ相手とかお付き合いをしてもスパイダーマンに恋を抱いてるヒロインなんだけど……好きかと聞かれたら微妙なところだ。

それに今はフラッシュと付き合ってるわけで、おいそれと声をかければ今度こそ俺はフラッシュの右ストレートで吹っ飛ばされて、仲良く補習コースに入ることになる。それは勘弁して欲しかった。

俺的には、このままハリーと付き合ってもらって、男女のもつれなく過ごしてほしい物である。スパイダーマン3のような痴情のもつれはほんとに嫌だ。

ハリーに譲ると、彼は咳払いをしてMJに勇敢に声をかけにいった。割と誰とも仲良くなれるのが彼女の利点だし、そう言った器の大ききもあるのだろう。

つと、ここでハリー。俺がさつき教えた蜘蛛の雑学を披露。ここでピーターは微妙な顔をするんだけど、俺は別に気にしない。邪魔されないうちに他のケースの蜘蛛の写真を撮っておく。

そこで、ハリーが引率の先生から真面目に話を聞けと注意されて引っ張られてゆく。

いよいよだ。

俺は意を決して、MJに「原作通り」に話しかけた。

「やあ、MJ。写真いいかな？学校新聞に載せるやつ」

彼女は少しビツクリした顔をしてから、髪を整えてオツケーと了承してくれた。ブサイクに撮らないでね？　と言われて、そんなことにはなりっこないさと答えて写真を撮る。

すると、シャッターを構えている手に何かが降りてきた。ゾワゾワと這うような感触が伝わってくる。気持ち悪い。今にも悲鳴をあげそうな感覚をMJを撮影することに集中して全力でねじ伏せる。

と、彼女が友達から呼ばれて去ってゆくのを見送った瞬間。

「痛ッ……シャオラア!!」

親指の付け根あたりをスーパースパイダーにおもっくそ噛まれた。思わず手を振ってしまおうとスーパースパイダーは柵の隙間へと姿を消してゆく。

改めて親指の付け根あたりを見た。はつきりと噛まれた跡と、少し腫れている形跡がある。痛いけど思わずガツポーズみたいな声をあげてしまった。かなり序盤から色々ハリーを巻き込んで原作改編的な動きをしているから、もしかしてスパイダーマンになるフラグを折ったかも？と心配していたのだが、無事に能力を手にするフラグは入手できた。

ふと、周りがシンと静まりかえっていることに気づく。あたりを見渡すと俺が噛まれた時に出した声に、フラッシュやMJ、ハリーも俺の方を見ていた。

ちやうねん。思わずテンション上がりすぎて……その……。

「ピーター。お前は後日、補習だ」

いつのまにか後ろにいた引率の先生から静かにそう言われた。うわあい、僕科学の補習大好き（白目）

その日は家に帰ると同時に体調不良に襲われ、一晩ぐっすり眠ることになりました。

▼

ピーターがスーパーパイダーによる遺伝子大改造工事を受けているとき。

オズコープではノーマンとストローム博士による試作無人ユニットに対する改造作業が進められていた。

「ストローム博士。メインサーバーをウエンデイのコンピュータに接続してくれ」

「本気でやるつもりか？ノーマン。これは君の息子やその友人の……」

接続を手伝ってくれているストローム博士の言い分はもつともだが、この作業にはオズコープの未来が掛かっている。

それにこのラボに出資する際に得られた成果はオズコープに譲渡されると言う契約をしているので、彼らの預かり知らぬところで人工知能への改造を行っても契約上は問題ないのだ。

無論、親として、人としての道は踏み外している気はするが。

「とりあえず、ウエンデイに我が社が蓄積したグライダーのデータや、ボディースーツのデータを取り入れるだけだ。データの蓄積と学習をさせるだけ。2人には私から話す」

そうストローム博士にノーマンは言うが、博士はどこか腑に落ちないような顔をしていた。ケーブルをコネクタに挿して、中継ユニットを取り付けるとすぐにオズコープのコンピュータと、ハリーとピーターが作り上げた無人コンピュータとのデータ受信が始まる。

2人には済まないと思っている。だが、その研究もオズコープとい

う会社があるからこそ可能であると言う事を2人には理解してほしい。そんな話をストローム博士としながら、データ通信をしたままノーマンはラボをあとにした。

しばらくの間は、それでよかった。だが彼は失念していた。データを受信し続けるマザーユニットが学習を繰り返し、ついにはオズコープの機密データにもアクセスし始めてしまうということを。

《オズコープ……ライバル企業……設定、殲滅対象はライバル企業》

その不穏な言葉が電子データの中で反復され、肥大した。結果、歪んだままの情報をマザーユニットは子機である機動ユニットへと送信したことから……すべてが狂い始めたのだった。

第三話

目が覚めたら体がマッチョマッチョになっていましたピーター・パーカーです。

某ワクチンの1回目と2回目の副作用とインフルエンザ級の寒気とかがいっぺんに来たような体調不良に見舞われて一夜。

まじで起きたら体が激変していた。悪かった視力も良くなり、両目の視力は2.0以上は固いくらい。体も筋肉がついており、昨日までの貧相な姿とは本当に別人と言えた。

鏡の前で思わずマッスルポーズを取ってしまう原作ピーターの気持ちがよくわかる。コンコン、と自室のドアをメイ叔母さんが叩いた。

「ピーター、大丈夫?」

「ああ!大丈夫だよ!」

「何か身体に変わりはない?」

うん、そうだね!すごく変わった!そう答えると、朝食はできてるわとだけ伝えてメイ叔母さんが降りてゆく音が聞こえる。視力もそうだけど聴力もかなり向上しているらしい。五感全般が鋭敏になったような感覚だ。

手早く着替えを済ませてゆつくりとドアを開ける。いつものようにドアノブを握ると、異常な握力でノブが果物みたいに潰れてしまっそうだった。

「おはよう、ベン叔父さん」

「ああ、おはよう。ピーター」

今朝の朝刊を読んでメイ叔母さんの作ってくれた朝食を口にするベン叔父さんだが、その様子は普段通りだった。

原作で職を失って間もない頃だったベン叔父さんであるが、ここでは少し違う。俺やハリーが立ち上げたラボの手伝いをしてもらったりしているし、ラボであげた成果をノーマンさんに買い取ってもらい、そのお金を家に入れたりしているのだから、家の経済状況が苦境に立たされているという事はなかった。

叔母さんの作ってくれたオムレツをペロリと平らげ、追加で傍に置いてあったシリアルを皿に入れる。アメリカのココナッツミルクは最高だ。シリアルとココナッツミルクをかきこむ俺の姿を見て、メイ叔母さんは珍しそうな顔をしていた。

「よく食べるわねえ、ピーター」

「うん、美味しいよ。メイ叔母さん。昨日晩ごはんも食べずに寝ちゃったからお腹ぺこぺこだったんだ」

事実である。一晩で肉体が文字通り作り変わった俺は、今は消費したカロリーを求めている。原作のピーターはよく朝食べずに出たよな。多分、ここでのんびり朝ごはん食べてるからMJの後ろ姿見ながらポエミーなことをいうシーンのフラグは折れてるだろうけど。

「ごちそうさま、と空っぽになった皿をシンクへと置いてカバンを背負うと、老眼鏡をつけていたベン叔父さんが呼び止めてきた。

「ピーター！今日は台所のペンキ塗りだからな」

「わかってるよ、叔父さん」

「逃げるなよ？」

学校が終わったたらまっすぐ帰ってくるよと伝えて、俺は家から出て大通りを通ってすぐに裏路地に入る。

そこで指先をじっと眺めた。指の腹にはびっしりと末端毛束が生えているのが見える。肉体にスパイダーマンの能力の兆候が現れていた。

俺は意を決して見上げる建物の壁へと飛び上がる。普段では考え

られない跳躍。壁に手を貼り付けると、手は滑ることなくピタリと壁に吸い付いた。いや、くっ付いた。

片手を離してもう一手。さらにもう一手。壁を這うように登ってゆき、俺はついに実感した。

「Fooooooooooooッ!!!」

俺の身体に、スパイダーマンの能力が備わったことを。



(改めて見ると、本当に凄い力だ……)

試しにビルを数棟飛び越えながら学校への道をショートカットしたのだが、普段徒歩で行けば一時間近くかかる道のりを僅か20分程度で走破してしまった。しかも息切れも無し。ビルの合間を飛び越えて進み、人目につかない学校近くの路地を壁蹴りの要領で降りて着地する。

(何か壊さないように気をつけないと)

足場にしたアメリカンな非常階段の手すりが一部凹んだが、軟着地である。手を払って何食わぬ顔で学生たちが行き交う学校前の大通りへと出た。

「ピーター!」

すると、すぐに人をかき分けてハリーがやってきた。その表情は普段の気怠げなものとは違う。どこか怒りや焦り、驚きに染まっている

ような表情だ。

「やあ、ハリー。おは……」

「朝の挨拶はどうでもいいんだ！父が……」

深刻そうに言うハリーに俺は内心でビビっていた。

原作ではオズコープの経営苦境の打開策として、ノーマンが筋肉増強剤を服用し人体実験を断行。その結果、精神異常が生じて人間の欲や狂気を全面に押し出した第二の人格と、グリーン・ゴブリンが誕生すると言った展開がある。

「ノーマンさんがどうかしたの?!」

まさかグリーン・ゴブリンになるような真似をしたんじゃないや？そんな不安を押し殺してハリーに問い詰めると、彼は言いづらそうに口ごもってから、静かに言った。

「父が俺らの研究を軍に売ったんだ」

セエエエエエエー……フツ!!!

まじビビった。ノーマンさんがグリーン・ゴブリンになってたらハリーの悲劇ルートがある意味確定する。それを見越して、俺はオズコープの利益になるように人工知能の開発をノーマンさんにプレゼンしたわけだが、思惑通り、ノーマンさんは軍に俺とハリーが作った代物を売って、経営苦境を打開したのだ。

計画通りッ！勝ったな、フラッシュに昼食をスパークキングしてくる。

だが、ハリーからしたらそんなことなど知ったこともないわけであって、俺が安堵してる様子を見て不満そうに顔をしかめた。

「ピーター、俺らの研究を父が軍に売ったんだぞ？ここから先の研究

は全部オズコープが管理する機密扱いだ……俺らがやろうとしてきた実験も発表も全部パーになったんだ」

「ああ、ハリー。気持ちはわかるよ。僕だって悔しいよ。けど、あの研究の出資をしてくれたのはノーマンさんだし、研究で得た成果の利権はオズコープに……」

「そんなこと、俺だってわかってるよ！……俺が怒ってるのは、なぜ相談もせずに父は俺らの研究を軍に売ったんだって……」

まあ、多分昨日のコロンビア大学の研究室見学中に商談は纏まったのだらうな、と勝手に想像する。ノーマンさん自身も、俺やハリーには、開発した補助システムについて何度かそれとなく話はしていたし。ただ、軍のお偉いさんが来ているなら……多少は仕方ないのかもしれない。

「……やむにやまれぬ事情ってやつさ、ハリー。ノーマンさんには事情をしつかり聞こう」

そうは言ってみるが、ハリーの不機嫌は解消されなかった。ピーター。お前はそれでいいのかよ、と更に食ってかかってくる。

「んー、まあ、よくないよ。けど、そういうモノだと割り切るのも必要だと思ってる。お金が絡んでる話だからね」

「お前は大人だな、ピーター」

不貞腐れるハリーを見て、俺は少し可笑しくなって笑った。なんで笑ってんだ？と不思議そうな顔をするハリーに、俺は咳払いと共に愉快な気持ちを追い出した。

「僕はハリーを尊敬するよ」

「え？」

「それほど本気になってくれてたってところにさ」

ぶつちやけ、俺が人工知能の理論について話したとき、ハリーは乗り気じゃなかった。スポンサーとしての仕事はしてくれただけ、あくまで主体はピーターで……といった他人事のような雰囲気があったのだ。

だが、ハリーが外観のデザインや社内コンペで最優秀を取ってからみるみると態度が変わった。ノーマンさんから褒められたというのも大きかったのだろうが、そこにやりがいを自分なりに見つけたのだろう。

それがなくなつて怒っているハリーを見れば、企画当初の彼とは比べ物にならないほどの進歩だった。

俺は困惑するハリーの肩を叩いた。

「さ、次の研究だよ、ハリー。人工知能は取り上げられただけインターフェースの課題は山積みだ。あれを完成させれば、そこから次のテーマも見えてくるよ」

「……当面の目標は視線操作で車の運転、だったよな？」

「ノーマンさんが軍に売ったんだ。その恩恵は倍にして投資してもらうとするよ」

そう言う俺の顔を見てハリーもまた悪巧みしてそんな笑顔で応じた。

「ピーター、大人だと言ったのは前言撤回。お前、俺よりも怒ってるよな？」

はっはっはっ！何のことかわからないなあ!!できることならもう少しシステムを詰めたい箇所もあるし、まだまだバグもある。商品として売るにはクオリティが低すぎる。それを売ったノーマンさんに物申したいことはあるが、すでに後の祭りなので早々に次の実験に切り替えるでしょう。

今後の構想もある程度は練れているしね!!

そんな話をしながらハリーとロッカーの前に来た瞬間だった。

周りの雑踏がクリアに聞こえ、あたりに漂ってあるハエや、空気感すら感じ取れるほどの感覚が危険信号を発した。

と、同時に無意識に顔を横へと避けると俺の使っていたロッカーの扉が拳でベコリと凹んだ。

そんな!こないだ買い替えてもらったばかりなのに!!

振り返るとやる気満々で怒り怒髪天なフラッシュユが拳を構えて立っていた。

「昨日はよくも馬鹿にしてくれたな、パーカー!!」

「あー。やあ、フラッシュユ。今日ももしかしてご機嫌斜め?」

「ああ、お前を殴ったら少しはスッキリするさ!」

そう言つてフラッシュユが拳を振るう。右、左。だが当たらない。咄嗟に上半身のスウェーだけで対処してしまった。俺はすぐに体を入れ替えてロッカーを背にする間合いから抜け出す。

「ピーター!」

「ごめんハリー、ちよつと後で話があるんだ」

「けっ!喋ってる余裕なんかあるかよ!」

驚いているハリー。あ、フラッシュユの後ろにはMJもいる。僕は悪気がなかったつて言つても、フラッシュユも「じゃあ俺もパンチを当てるが悪気はない」とかいういじめっ子特有のトンデモ持論を展開していた。

あたりには一限目前なので学校生徒が円を作つて俺とフラッシュユの喧嘩を見物している。すぐに賭け事が始まるのは、なんというかアメリカンだなあと思う。

と、フラッシュユの拳が飛んでくる。昨日までは目では見えているが、避けれるとは言つてない!!と言う速度で飛んでくる拳であるが、

スパイダーマンの能力を手に入れた今はかなり話が違う。

「何やってんだよフラッシュ！はやく当てろよ！」

周りが手加減してるんじゃないぞ、ともてはさすが、フラッシュの表情はそんな余裕めいたものをしていなかった。右、左、フックや蹴りをしてもことごとく避ける俺に戸惑っているのが目に見えて分かった。

(ほんと、止まってるように見えるな……)

まるでスローモーションのように飛来するフラッシュの拳。邪魔な角度で来た時は横に払って軌道をずらすなどして対処してゆく。

むっ、後ろから気配。と、条件反射する様に俺の身体は宙に上がってバク転をかました。ああー、華麗に避けるつもりだったんだけどなあ！ちよつとここら辺の反射神経の感覚もトレーニングが必要かな！

俺の身体能力にビビる仲間をどかして、フラッシュは本格的なストリートファイトに移行した。足を使って、腰を入れて、頭を振って拳を振るってくる。そして、その全てを避ける。体を逸らして、手道を変えて、半身になって。うん、勉強になる。フラッシュには悪いけどスパイダーマンの能力の実験台になってもらおう。

しばらく拳をくり出し続けるフラッシュ、その全てを避けている俺。

ギャラリーも最初はフラッシュの手抜きだとヤジを飛ばしていたが、それが1分、2分と続くとみんなが黙りこくった。

息が上がるフラッシュと全く息を乱していない俺の対比を見たあたりで、周りの反応は正体不明のなにかを見るような、恐れ慄いた気配に変わっていた。

そろそろ潮時か。

俺はフラフラになったフラッシュの拳を受け止め、そしてちよいと

フラッシュを押しした。すると彼の体は後ろへと吹き飛んでゆく。まじか、ちよつと押しただけなんですか。

「フラッシュ!!大丈夫!?!」

ズササーと滑ってゆくフラッシュに駆け寄る取り巻きだが、MJだけは信じられないようなものを見るような目で俺を見ていた。俺は咳払いをして、隣で待っていてくれたハリーの元へと戻る。

「行こう、ハリー」

「え……あ……ま、待てよ、ピーター!!」

居心地の悪いロッカーエリアから立ち去る俺を、若干放心状態だったハリーはすぐに追いかけてきた上に、俺にさっきのは何だったのか?と質問攻めをしてくる。

この後めちやくちやハリーに説明した。

第四話

ハイスクールを無断欠席した俺は混乱した様子のままのハリーを連れて人気の少ない裏路地へとやってくる。早朝のこの時間なのでからさずがに路地には強盗や浮浪者も潜んでいない。

あたりに人影がないのを入念に確認してから俺は服を腕まくりしてハリーに蜘蛛に噛まれた傷跡と、手首にできた糸の乳腺を見せて簡単に説明をした。

「コロンビア大学の研究室で？」

「うん……多分、蜘蛛に噛まれたんだ」

というか、それしかあり得ない。昨日の今日でこんな状態になったのだ。ハリーはまだ状況を飲み込めていない様子で信じられない顔で俺の顔と手首へ視線を彷徨わせていた。

「それでお前……メガネとか無くなってるし……フラッシュにあんな……」

「これは観察から得た推察だけど、僕の身体には……おそらく蜘蛛のような能力が備わってるんだ」

「そんな馬鹿げた話……」

あるわけないだろ？と言いつわる前に俺はハリーの目の前で飛び上がった、まるで某警備会社のCMに出てくる人類最強の霊長類がやっていたように壁に張り付いてハリーを見下ろした。それを見たハリーは口を開いたまま呆然として固まっている。

「ほらね？」

そのまま指先に意識を集中して壁から離れる。これが割と難しい。自在に壁に張り付く機能をオンオフできなければずつと体が粘着してしまうのだ。原作ピーターはこれにすぐ慣れていた様子だが、注意しなければ手に触れたあらゆるものが引っ付いて離れなくなるだろう。

「わあお……ピーター……それって……」

しどろもどろとしているハリー。ちょうど直ぐ近くにあるゴミ箱の上に置かれた空き缶があった。俺は手首を構えて、ピーターが試行錯誤の後に導き出した指の形を再現。すると手首の乳腺から糸が飛び出して、そのままゴミ箱の上に置かれていた空き缶を捉えた。

噴き出すような音と共に離れた糸は空き缶に絡みつきそのまま壁に張り付いて固まった。

ハリーはそれを呆然と眺めてから、再び俺に視線を向ける。わざとらしく肩をすくめて答えた。

「もう少し、この力については分析する必要があるんだ。そしてどう言ったことに活用できるか、というのよね」

「……なら、オズコープのラボが最適ってわけだな？ピーター、お前が父さんの行動に難色を示す前に妥協案を出したのはこれが原因だな？」

ハリーもやっと納得したという風に頷く。一緒に開発した人工知能技術は確かに惜しいが、ピーター自身の体の変貌の対応の方が重要だと判断したのだろう。

「ハリー、このことは……」

「わかってるよ、俺とお前だけの秘密ってことにしておいてやるよ」

「ビューツ！さすがハリー、わかってくれてる！」

思わずハグをしてしまい、ハリーはよせよと照れ臭そうに笑った。何はともあれ心強いパートナーができて一安心だ。まだ自分はスパイダーマンと名乗り始める前。ハリーにこのパワーを知らせることができたのは大きい。それにノーマンもまだ超人薬に手を出していない。このまま行けば、ノーマンがグリーンゴブリンになることはないし、ハリーとの関係が拗れることもないはずだ。

とりあえず今後のことや、人工知能技術の妥協案の詰めもあるため、今日は学校はバックれてオズコープのラボにでも行こうかとハリーと話しながら路地を出た時だ。

「ピーター？ハリー？」

聞き覚えの声に思わず振り返る。そこには買い物用のメモ帳を持ったベンおじさんが驚いた顔をして立っていた。

「あー……やあ、ベン叔父さん。こんなところでどうしたの？」

「台所用のペンキが足りなかったから買いに向かうところだ。それよりも2人とも、学校はどうした？」

ベンおじさんの言葉に思わずハリーと共に言葉を詰まらせてしまう。咄嗟にハリーがベンおじさんへの説明を始めた。

「実は僕たちの研究で少しトラブルがあって」

うむ、あなたが間違っていない。ベンおじさんも俺やハリーがやっている研究については理解もあるが、会うたびに「学業をおろそかにしてはいけない」と釘を刺してくれていた。そんなベンおじさん相手にハリーの言い訳が通じるかと言われれば答えはノーであった。

何かを察したベンおじさんは小さく息を吐いて俺たちの肩を叩きながら優しい声で言った。

「ラボの実験も立派なことだが勉強を疎かにしてはいけないぞ？ハリリー。ピーターもな？」

これには謝るしかない。ハリリーと俺は共にベンおじさんへ謝ると、おじさんはヨシと言って肩を叩いてくれた。

「まあ、今更学校に戻るのも忍びないだろう。サボったついでにペンキの買い出しに付き合ってくれないか？この老体だとペンキ缶を持ち歩くのは少々骨が折れるのでね」

「わかったよ、叔父さん」

「誠心誠意、手伝わせていただきます」

若い二人がいれば外壁まで塗装できそうだとベンおじさんは愉快そうに微笑んで歩き出し、俺とハリリーもマーケットに向かうおじさんの後に続いた。その後、ありったけのペンキを買って俺が全部一人で持つておじさんにびっくりされてハリリーに「いきなりバレたらどうするんだ」と小言で怒られたり、勢い余って台所だけじゃなく、リビングと階段の手すりまでペンキ塗りをして、家でご飯は食べれないわねと言ったメイおばさんの言葉がきつかけとなり、ハリリーも含めた四人で行きつけのピザ屋で晩御飯を食べた。

ハリリーはこんな風にいよいよと外食するのは初めてだとはいやいでおり、それをベンおじさんとメイおばさんは優しい顔で見守っていた。サイドで頼んだ骨つきソーセージにかぶりつくハリリーを見ながら俺もピザに手をつける。

やはりペパロニたっぷりのピザは最高だったと言っておこう。



翌日、ベンおじさんとの約束もあつて俺とハリリーは共に登校した。フラッシュの一件から何か仕返しをされるかとハリリーは戦々恐々と

していたが別にそんなことはなかったぜ。

むしろ腫れ物を扱う感じでさらに疎外感を味わったくらいだ。肝心のフラッシュはメンツも潰れたこともあるのか無闇に俺に話しかけてくることはなかった。取り巻きはしどろもどろしているし、MJもチラチラとこちらを見ていたがとりあえずスルー。

それよりも俺にはやらねばならないことがある。

授業が終わってハリー側近の執事の方に迎えに来てもらった俺たちは真っ直ぐにオズコープにある新たなラボへと向かった。ハリーの言った通り、前にAIを開発していた頃のラボよりも広くなっている上に設備も十全に揃えられていて思わず入口で靴を地面に落とした後、隣にいるハリーとノールックでハイタッチを交わすほどだった。

とにもかくにも、まずは自分の体に何が起こっているのかを調査する必要があると俺は考えた。ハリーに手伝ってもらいながら素人ながら採血を行ったのだが、血管にうまく刺さらないわで二人してかなり手間取った。落ち着いたら自動で採血するユニットを作ってやると心に決めながら、なんとか取り出した血液を色々な装置にかけて調べてゆく。

が、結果は俺の持つピーターの知識量ではどうにもならないものしかなかった。

遺伝子的な変異までは特定できたが、どのような作用とどのような効果、どのような過程でこうなったのかがさっぱりだ。答えはあるのにそれを導き出す計算式の手がかりが一切ない状態だったので、調べだして二時間も経たないうちに俺とハリーは検査装置の前で突っ伏していた。

「まあ、悪用する方法はいくらでもあるんだけどね」

「ピーター。それは言わない約束だろう？」

「ごめん、ハリー」

検査装置の前で力なくそんなやりとりを繰り返す。前人未到の

スーパーパワーだ。こちらの世界にも他生物の遺伝子を組み込むなどといったテーマを題材にしたフィクション作品があるが、そのどれもが悍ましいクリーチャーになったり、悲惨な末路を辿っている。扱いを間違えればとんでもないことになるのはハリーもよくわかっているようだった。

実際、このスーパーパワーを日常生活に役立てるにはどうすればいいか？とハリーと真剣に議論もしてみたが、結論は「スーパーパワーはなるべく使わない方がいい」になった。よくて昨日のようにベンおじさんのペンキ塗りで梯子を使わずに済むという点くらいだろうか。スポーツや何かに興じててもスーパーパワーで圧倒してしまえば途端に八百長試合になる。それはピーター自身がプロレスというリングの上で実践した結果でもよくわかることだ。

原作でデイリービークルのJ・J・ジェイムソンが言うようにマスクをせずに警察など正規の組織の一員としてパワーを発揮するということという方針も考えたが、こちらもパワー発覚後に国家運営の研究所に送られて終了という結論で終わった。

とりあえず、パワーは隠した状態でこれまでと変わらない生活を送るしかないんじゃないか？とハリーが提案してきたところで、ラボを出入りするドアが静かに開いた。

「ピーター、ハリー、いるか？」

入り口から顔を覗かせたのはノーマンだった。あとから続くようにストローム博士もラボへ入ってくる。本当にノーマンは超人薬を飲まずにいる。

オズコープの危機と追い詰められたことから彼は自身の肉体で実験を行い、結果的には超人的な肉体ポテンシャルを有することには成功したが、副作用で重度の二重人格疾患を患ってしまった。

それもノーマンが内に秘めている怒りから作り出された「鬼」。その鬼が生まれ落ちた日に、実験に立ち会っていたストローム博士は殺されてしまうのだが、二人して現れたということは彼はまだ超人薬に

手を出していないということを証明してくれていた。

ノーマンが取締役をするオズコープの業績は空前の右肩上がりを見せていた。2人で開発した人工AIが軍部に認められて正式な補助システムとして使用されることが正式に決定されたのだ。その一報を俺たちに伝えた後、ノーマンとストローム博士は頭を下げた。

「……二人とも。すまないことをした」

「もう構わないよ、父さん」

頭を下げる二人にハリーは少し息をついてから伝える。それは俺とハリーの意志でもあった。たしかに研究成果がまるまる横に渡されて思わないことはないが、それがノーマンの危機とオズコープの危機を救ったのだから、不満はあれどそれを責めるつもりはなかった。

「先方からの受けはいいぞ？ 今期の利益率は5パーセントアップを見越せる。素晴らしい実績だ」

「コクピットモジュールの予算はどうなりそう？」

「予定額の2倍は約束しよう。必要なものはすべて手配する。エンジンアも増員するぞ」

ノーマンの言質にハリーと拳をコツンと合わせた。コクピットモジュールと言っても使い方は様々だ。最終的な着地点は、いわゆる光学式モニター。まずはガラスに映し出して指先で操作できる簡単なものから製作することになるが、こういうことは小さな積み重ねが重要だ。

それに余った予算でやりたいこともできるようになる。たとえばグライダーの新型の開発とか、ノーマンとストローム博士が作っている超人薬のさらなる改造とか。

そんな話をしている途中、ハリーがノーマンに疑問を投げた。

「僕らの作った支援システムはどうなるの？ 父さん」

「……今後は軍が利用する。新たなデータベースの整理だとか、財務調整の補助システムとか、色々とな」

オズコープが行うのは人工AIが集めたさまざまなデータの仕分けやサーバー管理などのいわゆるアフターサービス程度らしい。AIの改造や技術開発は国家機密扱いとなるため、使用権などの権利もすべて軍が買い取ったらしい。つまり、俺たちが開発したAIは完全にブラックボックス化されたわけだ。

そこに若干の寂しさを覚えながらもハリーは小さく笑って俺の肩を小突いた。

「ウエンデイにしては楽な就職先だな」

「違うないね、ハリー」

そんな軽口にノーマンもストローム博士も笑う。とりあえずスパイダーパワーの調査も一区切りついたので、ノーマンに誘われるまま夕飯を食べに俺とハリーはラボを後にするのだった。



「システムはどうだ？」

「問題ありません、将軍。すぐにでも実地実験に移れるでしょう。それにしても、このウエンデイという支援システムは画期的です」

「支援AIを搭載した独立軌道のグライダーか。良いものを作ったじゃないか。オズコープは」

「将軍、ウエンデイの今後のスケジュールですが」

「ああ、その名前だが軍では別の登録名にする。これはペンタゴンからの要請だ」

「は……では、なんとと言う名前に？」

「指令ではこう来ていたな、ウルترون、と」

第五話

どうも、新設されたラボでの研究が始まって半年経ったピーターです。

軍に売却されたAIは順調にデータベースを更新し続けていて、その膨大なビッグデータのせいで、オズコープ社内で管理していたマザーユニットの容量が十分にスペックオーバーを引き起こしました。エアコンガンガンに効かせてるはずなのに部屋に入ると「サハラ砂漠かな？」って言うくらいの暑さでハリーと一緒に溶けた顔をしてしまったぜ。

その後、軍が購入したスパコン……IBM社のパチモンみたいな名前の企業の代物にデータを移して完全に軍が管理することになりました。

オズコープの利益としてはノーマンがマネーパワーで買った専用の衛星通信の使用料金があるのと、基礎であるマザーユニットの定期的なメンテナンスや、リース費用があるので手離れしても利益は見込めるのだが、開発した俺とハリーからすれば少し寂しいところもあった。

だがしかし、そんな感傷に浸っている場合ではない。今俺たち二人は空前絶後の忙しさを味わっていた。

「ピーター、その端子をとってくれないか？」

そうやって特徴的なループをつけている博士に、先に組んでおいた端子をそつと渡した。大きさにしてわずか数ミリ程度。腕時計の超小型部品のようなそれを、博士はピンセットを使って端子の上に置くと、熱伝導で融着させるコネクタに溶着させた。

一通りの作業が終わって、俺と博士は思いつきり息を吐き出した。とてつもない精密作業で、ぶつちやけめちやくちやしんどい。けど、こうしないと今開発している機械は部屋に収まりきらないほど巨大

化してしまう。

ビルワンフロアを余裕で食い潰す設計図を見たハリーが死ぬ気で頑張ってテーブルの上に乗るくらいまで小型化してくれなかったら今頃ラボのリフォームで終わっていただろう。当のハリーは疲労からカラボの隅に置いてあるソファで爆睡しております。

「これで第三工程は完了だな、ピーター」

「ええ、オクタヴィアス博士。きつとうまくいきますよ」

そういうと優しそうな笑みを浮かべて汗を拭う博士。そう、オットー・オクタヴィアス博士。アルフレッド・モリーナで声が銀河万丈さんの方な!!そんな彼が我らのラボにいるのだ。ちなみにスパイダーマン2で4本の作業アームを操るメインヴィランとなる人物である。

なんで彼がまだ1の序盤にもいってない状況で俺ことピーター・パーカーと面識があるかという話は長くなるが、俺が博士をラボにスカウトしたからだ。

ハリーと一緒に新型モジュールのプレゼンに行った帰り道で、行きつけとなったカフェでぐったりとカフェオレを煽っていたら斜め向かいに奥さんであるロージー・オクタヴィアスと一緒に座っていたのを見て思わず吹き出してしまった。

そこからは俺が猛烈アプローチ。オクタヴィアス博士の論文も読んでいたのもあるし、何より彼が着目する「トリチウム」という物質を使った新たな核融合エネルギーが理由だ。彼が長年研究を続ける夢もあり、ドクター・オクトパスというヴィランとなってしまう理由でもある。

すぐさまハリーにも紹介し話を聞くとなんでもトリチウムが高価すぎて実験が進んでおらず、スポンサーを探していると言ったのでハリーに無理を言ってオズコープのラボで共同研究を持ちかけたのだ。

だがオクタヴィアス博士、割とプライドが高い。最初は自分の研究は自分だけで完成させると言っておズコープからの支援は求めたが

共同研究はOKしなかった。それもそうだろう、彼が生涯をかけて研究してきた代物だ。俺やハリーが関われば研究成果を横取りされるのでは？という疑念もあるに違いない。

だが、俺に抜かりはなかった。ハリーと共にオズコープ社内で子会社を設立して、オクタヴィアス博士の研究は彼自身の功績である、それをいかなる理由であっても侵害しない、という行政誓約書を発行して再度、博士にアプローチをかけたのだ。ちなみにノーマンさんも了承済みで、オズコープの役員全員の同意判子も押してもらっている。

それに驚いた顔をする博士に、さらに追撃。

トリチウムによる核融合。それは凄まじいエネルギーを発生させるが、スパイダーマン2では実験が失敗に終わっている。博士の理論では核融合エネルギーを発生はさせられるが、制御することができなかったのだ。核融合はストッパーがなければ無限にエネルギーが作り続けられてゆく仕組みだ。そんなものが制御不能に陥れば、下手をすればニューヨークが更地になりかねない。

だが、それを真つ向から否定すればプライドの高いオクタヴィアス博士は余計むきになって共同研究の話を蹴ってしまうことになる。

そこで、俺は一つの提案をした。

エネルギーを循環させればいいじゃない、と。

「トリチウムを円形に加工し、重水素とパラジウムによる化学反応を利用してエネルギーを循環させる方式……私では考えられなかったアイデアだ」

いや、それは別世界の天才のアイデアです。なんて口が裂けても言えなかった。俺がオクタヴィアス博士に持ちかけたのは博士の夢を具現化させると同時に俺が目指したものを作る目的もあつた。

そう、この世界で「アークリアクター」を作ろうとしているのだ。

映画ではアークリアクターの動力源はパラジウムだったが、そんな夢の設計なんてピーターの頭を持ってしても不可能で、半ば諦めかけていたところでオクタヴィアス博士の理論を応用すればいけるん

じゃね？という天啓が舞い降りたのだ。

だが課題も多くあった。

「あー……ピーター？これは流石に大きすぎるんじゃないか？」

「でーすーよーねえー!!」

まず作ろうと原案図面を引いたらめっちゃデカくなったのだ。

まじでビルワンフロア食い潰すサイズ。

その図面を見たノーマン氏が浮かべた苦笑いに俺とオクタヴィアス博士は何も言えなかった。デザインセンス皆無な中年博士と異世界転生トビー・マグワイアでは出来ることに限界がありましたよ。

そこで白羽の矢が立ったのが俺の親友、ハリー・オズボーンだった。

高校も夏休みだし、とりあえずこのビルワンフロアサイズのやつを自動販売機サイズにしようぜ！って補習終わりのハリーに持ちかけたら思いっきり頭を叩かれた。解せぬ。

そこからはオクタヴィアス博士と俺とハリーの三人でのバトルだった。

朝起きて論争しては設計図書いて、検討しては設計図書いて、想定しては設計図書いて、オクタヴィアス博士の奥さんが作ってくれたシヤワルマ食べながらラボで爆睡して起きて設計図書いて寝るみたいな生活を続けているうちに、三人は徐々にぶっ壊れ始めた。

たまに手伝いに来てくれるベンおじさんに向かって俺が壊れたラデオみたいにあークリアクターの基礎理論を説明したり、未成年なのにノーマンの持っているワインを一本空けてベロベロに酔ったハリーが書いた図面が外観の図案になったり、積み上がった不採用の設計図をビリビリに破ってオクタヴィアス博士が食べ出した頃がマジでやばかった。

そんな検討と検証と図面書く生活を続けて、やっとテーブルの上に乗るサイズまで小型化できたのだ。

マジで捕虜生活の中でガラクタからアークリアクター作ったトニー・スタークは天才だと思う。

そんなこんなで部品もミリ単位、もしくはそれ以下となったが、オクタヴィアス博士と二人三脚で組み上げてやっとアークリアクター（仮）は形になったわけだ。

だが、実験はまだ成功していない。理論上は制御できるはずだが、もし失敗すれば何が起こるか誰にも予想がつかないのだ。

とりあえず長い夏休みも終わりを迎えたので、俺とハリーは学校へ。オクタヴィアス博士もリフレッシュするために奥さんと一緒に一時帰宅。

起動実験は学校終了後の夕方となるのだった。え？原作のプロレス？知らない子ですねえ……。



ピーター・パーカーとハリー・オズボーンはとても優秀な青年だ。それが共に研究を行うことになったオットー・オクタヴィアス博士の素直な感想だった。

二人との出会いはニューヨークの一角にあるカフェテリアだ。妻のロージーと共に日課の朝食とカフェを楽しんでいたところ、ものすごい形相をしたピーターが話しかけてきたのがきっかけ。ハリーはそんなピーターを止めながら驚いている私とロージーに頭を下げている。そんな印象が強く残っている。

高校を卒業もしていない二人の青年、特にピーターは私の行なっていたトリチウムを使った新たなエネルギー研究にとても強い関心を示しており、論文の一部や私自身が学会で報告した資料の一部を引用しながら捲し立ててくるピーターに圧倒された気分だった。

だが、私もひとりの科学者であり、探求者だ。

たしかに私の研究が陽を浴びる事はなかった。学会でも誰にも鼻で笑われてあしらわれた。そんな私に投資をしようとするスポンサーもいない。誰にも理解されない中で妻であるロージーには多くの苦労もかけてきた。

しかし、私はそれでもトリチウムでの新たなエネルギーが実現で

きると信じているし、それを達成できるのは自分ひとりだと断言できた。たとえ自分を尊敬し、慕ってくれる若者だとしても、彼らと共同で研究をするつもりはなかった。

だが、彼らはそんな私の凝り固まったプライドを忘れさせるほどのアイデアを携えて、再び私の前に現れた。

私の中にあつたイメージはトリチウムのエネルギーを内包した手に収まる太陽だった。だが、ピーターはエネルギー体ではなく、それを循環させエネルギーの発生比率を安定させようと提言してくれたのだ。彼は確信していたのだ。私がトリチウムからエネルギーを作り出すということ。その上で、作り出したエネルギーを制御する方法を出してきた。

私は言葉を失った。誰もが私の研究は不可能だと笑ったというのに、ピーターは私の研究が成功すると信じていた。それだけで、意固地になっていた私の心はどこか救われたような気がした。

改めてエネルギー発生装置を見る。トリチウムで円を描いた伝導体に、重水素とパラジウムが内蔵された二重構造体のコアユニット。

トリチウムは私が。

重水素とパラジウムの部分はピーターが。

外観のコアユニット構造はハリーが設計してくれている。

この三人がいなければなし得なかった偉業だ。

「アナタ」

ロージーが私の手を握ってくれる。握られて初めて私の手が震えていることに気づいた。緊張からか、不安からか？いや、違う。大いなる力の一步に心が震えているのだ。

安定装置の数値データを監査しているピーター、そしてコアユニットの同調率をみるハリーが私を見て頷く。

私も頷いて、長年愛用してきたゴーグルを着用し、この時のために設計した作業用アームを取り付ける。本来なら脊髄にケーブルを通して神経パルスでの操作をする設計だったが、ピーターとハリーが開

発したコクピットモジュールと、脳波デバイスを用いて神経接続は取りやめた代物となっている。

神経系への悪影響を考慮したピーターからの提案だったが、そのモジュールシステムはまさに画期的だった。神経接続よりも負担は少なく、スムーズにアームも操作できる。

彼らは素晴らしい才能を持っている。センスもだ。彼らと共に仕事ができることは、私にとっての誇りだ。

作業アームがコアユニットをつかむ。誰もが緊張の表情を浮かべるとき、コアユニットをエネルギー発生装置へとはめ込む。それを見てピーターが起動装置のスイッチバーを少しずつ上げてゆくと、トリウムとパラジウムのリングが少しずつ光を発生してゆく。

40、60、80と出力が上がってゆき、スイッチバーはついに100の値へと到達した。リングの光は極光に達して、静かにエネルギーを発生させていく。

ハリーが同調率を見て笑いとサムズアップを掲げた。我々は、新たな可能性の扉をついに開いたのだ。

第六話

祝★アークリアクター（仮）稼働テスト合格!!

残念ながらまだまだ完成じゃないんですよ、とハリーに言ったら祝賀ムードで意気揚々とワインを出していた彼の顔がスンってなっていた。ごめんよ、ハリー。だがお祝いはするからワインは仕舞おうな！ワインがぶ飲みで天啓が降りてきて以降、どっぷり酒の沼に親友がハマったような気がした。

オクタヴィアス博士と奥さんはまるでノーベル賞を授与されたようにお祭り騒ぎで二人してシャンパンを開けていた。ここラボで僕ら未成年なんですけど!?!まあいいか、俺もベンおじさんとメイおばさんを呼んで懇意にしているピザ屋から何枚かアメリカンピザを注文。

実験が成功するまでは設計図や失敗作の残骸や加工したパーツのゴミで溢れかえっていた机をノリと勢いで片付けて、光り輝くアークリアクター（仮）を中心に、テーブルの上いっぱいにご馳走を並べて、全員で完成を祝った。

といっても、リアクターの稼働効率は10%以下で発電量もまだまだ少ない。できて豆電球の電源を向こう百年以上維持できる程度のエネルギーしか出せていない。オクタヴィアス博士とハリーはそれを知ってガッツポーズしていたけど、目標は毎秒3GJですって言ったら二人とも真顔になってました。目標は高く持たないとね!!

そんなわけで何項目かのテストを三人で行ってから、まずは最大のスポンサーであるノーマン氏にプレゼンを行うことに。

ドライヤーの消費電力程度なら余裕で賄えるほどのエネルギーを永続的に生み出すアークリアクター（仮）をノーマンの書斎へと運び込み、オクタヴィアス博士主導でプレゼンを実施したところ、企業として博士と契約を結び、アークリアクターの独占販売を行いたいと正式に打診すると太鼓判を押してもらえた。

すぐにオズコープ経由で学会にも発表される手筈が整っており、申請資料にもオクタヴィアス博士の名前がしっかりと乗っていた。こ

ここで手柄を奪うとかすると後々の遺恨になるからな！オツケーを出してノーマンに申請書を返そうとしたとき、オクタヴィアス博士が待ったをかけた。

「これは私一人ではなし得なかったことだ。ピーター、そしてハリー。君たちの名も共同研究者として載せてもらえないだろうか？」

予想外だ。思わずハリーと顔を見合わせる。ぶつちやけていうとかなり嬉しい話であるが、共同研究にするとなるとオクタヴィアス博士がこれまで積み上げてきたトリチウムからのエネルギー発生論も俺たちの成果となってしまうのではないだろうか？それを危惧してオクタヴィアス博士の言葉を断ろうと思ったのだが、彼は首を横に振って笑顔を向けた。

「学会で誰もがトリチウムからのエネルギー発生論を馬鹿にしていたが、君とハリーは私がそれを成功させると確信していた。だから、その後のことを考え、このアークリアクターが出来上がったのだ。手の中に太陽を、そう願って続けてきた私の生涯の研究は……君たちと巡り会うために続けてきたのだろう」

彼は言う。共同研究として共に名を連ねるのはオクタヴィアス博士からの恩返しである。思わずその言葉に涙が出そうになった。ハリーなんて隣で男泣きしてるし、ノーマンもつられて泣いているように見えた。博士は本当に満足げな顔で俺たちに手を差し伸ばしてきた。涙を堪えながら……ハリーは泣いてるけど、俺たちは差し出された博士の手をしっかりと握って握手する。

こうして、俺たちは三人でアークリアクターの正式な発表を行ったのだ。

オズコープ経由で公表された論文と研究成果であるアークリアクターは瞬く間のうちに反響を呼び、多くの研究者や研究機関がオズコープに注目して株価が見たこともない速さで爆上がりしていった。

これはこのままオズコープがこの世界のスターク社になるのでは？という勢いだった。

ついでに「我が社の研究にも出資を!!」という声も多く、ノーマンから俺とハリーが選別担当を任されて目ぼしい研究をしている企業を片っ端からヘッドハンティングしてこいと言いだされた。

スポンサー契約のための面接や資料選考に目を通す傍らで学校に通ってオクタヴィアス博士とアークリアクターのアップグレード案も考えて、あれ？研究してた時よりも忙しくなってるね？って思った頃には、学校新聞にも俺とハリーの名が大々的に載るようになっていた。

これまでオズコープのバカ息子と陰で腫れ物扱いしていたハイスクルの教師や関係者たちも面白いくらい手のひら返しをしていて、いつもなら止まってくれないバスの運転手も気がつけばパーカー家の目の前に停車して俺を待ってくれるようになっていた。なにそれこわい。

いつもは威張って俺とハリーから隙あればカツアゲをしようとしていたフラツシユやその取り巻きたちも態度を一変させていて、逆に気味悪いからいつも通りで頼むよとお願いする変な状況になっていた。

あとアークリアクターの利権の給金も入ってるらしく、その金額を見て口座を管理しているメイおばさんがぶっ倒れた事件があったり、オクタヴィアス夫妻がラボから近い場所に家を建てたり、その引越しの手伝いをしたり、ハイスクルの科学オタクたちからの言及から明らかに逃げたりと色々周囲が大きく変わっていた。

そんな中、なんとハリーに恋人が！相手はMJ！原作よりもかなり早くお付き合いを開始したようだ。

大企業の社長の息子でいつも出来損ないと言われて自信がなかったハリーだったが、俺とAIを開発したことや、オクタヴィアス博士との共同研究ですっかり自信がついたらしく、自らMJにアプローチをかけたのだ。無論、先にMJに恋心を抱いていた俺にも相談をしてきたのだが、俺は二つ返事で「ゴー！」と返したのでハリーはMJに

告白。見事にお付き合いということになったのだった。

ちなみに俺はMJと距離を縮めるフラグを全て折っているのだから白どころかアプローチをする暇ありませんでした。MJのために車を買う計画をしている時期は、研究に行き詰まったオクタヴィアス博士とハリーと俺とで深夜のラボ内でバスケットボールをして守衛のスタン・リー似のおっちゃんに三人仲良く怒られていました。

ハイスクール内でラブラブの二人を眺めつつ、MJに捨てられたフラッシュを慰めるとめちやくちや仲良くなったという。今度、フラッシュが出るアメフトの試合へオクタヴィアス夫妻と一緒に応援に行く約束までしてしまったぜ。

そんなこんなで研究と学業を上手いこと両立させつつ、ノーベル賞受賞まで秒読みとなったある日、俺とハリーとオクタヴィアス夫妻とノーマンは、ニューヨークの広告企業や新聞会社が主催する祝賀パーティーに招待されたのだった。



「おお！君がパーカーくんとオズボーンくんか！会えて光栄だ！私はデイリービッグルのジェイ・ジョナ・ジェイムソンだ。よろしく頼む。ロビー！二人にシャンパンを用意してやれ！」

「しかし二人は未成年ですが……」
「ならジンジャーエールやら何やらあるだろう！さっさと持ってくるんだ！」

うわ出た、生のJ・K・シモンズだ！じゃなかった、J・J・ジェイムソンだぞ。めちやくちや上機嫌に話してこられてピーターは困惑しています。

ドレスコードに準じたドレスに身を包むMJを横に連れるハリーと談笑しているところにジェイムソンが部下を引き連れて特攻を仕掛けてきた。ハリーがMJを連れてくるのは知ってたけど別に悔しくないやい！オクタヴィアス博士が知り合いの学生を紹介しようと

言ってくれたから寂しくないもん！

ジェイムソンと握手を交わすなんて想像してなかったわ。彼にはデイリービーグルの編集デスクで喚き散らすイメージしかなかったわけだが、まさかこの祝賀会に来ているとは……。

「二人のような若く優秀な者が活躍することは嬉しく思う。君たちが作り上げたものは素晴らしい！二酸化炭素は排出しないし、放射能も出さない！まあ酸化イオンの廃棄物が出るが、タバコの煙よりはマシだろうからな！私はクリーンエネルギー推奨委員会に入っているので君たちの成果を正當に評価することができる！ホフマン、今のセリフ、メモしておけ！あとで本にかける」

はい、わかりましたとおどおどと答える部下のホフマンと、申し訳なきようにこちらを見るロビー、そしてマシンガントークを続けるジェイムソンにハリーとMJは圧倒されっぱなしで、俺はああ、ジェイムソンだと内心で感動していた。

原作でも彼は憎まれ役で、ピーター／スパイダーマンを真つ向から批判している人物でもあるが、それは彼の奥さんが覆面の強盗に殺害されたという過去があるからであって、覆面のヒーローを認めたくないという心からああいう行動を取っていたのだろう。

だが、彼の方からは俺とハリーの名しか出てこないのであえて突っ込んでみた。

「ありがとうございます、ジェイムソンさん。しかし、今回の研究はオクタヴィアス博士の長年の研究がなければそもそも実現すらできませんでした。僕らは博士の研究にほんの少し助力したに過ぎません」

俺の言葉にハリーも深く頷いているが、ジェイムソンはどこか納得してない様子で啞えている葉巻を上下に動かしながら答えた。

「ドクター・オクトパスの研究はたしかにあるが、それを実現できたの

は君たちの力でもある。では記事にはこう書こう！天才二人がいかれ科学者の窮地を救う！オクトパスの夢は二人が叶えた！これで一画は決まりだな！」

ハリーは怪訝な顔をして俺は頭を抱えなくなった。なぜそうなるのか、ジエイムソン……。あとで部下のロビーが話してくれたが、以前デイリービーグルがオクタヴィアス博士の研究を取材し、発行した新聞でボロクソにこき下ろしていたのだとか。なんでもニューヨークを更地にしかねないマッドサイエンティスト、ドクター・オクトパスと銘打って書き上げたらしい。うん、ジエイムソンらしいし、その記事はあながち間違っていないのが悲しいところだ。道理で別の場所を取材を受けているノーマンとオクタヴィアスの方に近づかないわけだ。ちなみにノーマンもデイリービーグルからのネガティブキャンペーン被害者の会の一人です。

そんな感じで捲し立てるジエイムソンとの会話をしている中、少し気になる話を聞いた。なんでもオズコープのライバル企業である、スペース・ロジック社がアークリアクターを使ったスペース・スーツの開発をしているらしい。

たしかにアークリアクターはオズコープ主導で販売をテスト的に開始しているが、あくまでそれはリアクターの有用性を知らしめるためのデモンストレーションであり、実験目的はもちろん、兵器運用は絶対禁止として取引をしている。

そもそもノーマンがライバル企業であるスペース・ロジック社に今後の企業根幹ともなるであろうリアクターを取引するだろうか？

満足して帰っていったジエイムソンを見送り、俺はハリーに相談。パーティー後、研究成果で買った高級車でMJを送り届けたのち、俺とハリーはラボへと向かうのだった。

第七話

パシユつと、手首から放たれた糸がビルの壁に当たり、それを引つ張って飛び上がる。弾力と張力が働いた糸の反動で俺の体は人の体を遙かに凌ぐ高さまで一気に飛び上がり、ビルの屋上へ前受け身をしながら着地した。

流石にスイングをすると色々と厄介なことになるので、裏路地からビルの上あたり目がけて糸を放つて思いっきり引つ張つて飛び上がったピーター・パーカーです。件のオズコープのライバル企業、スペース・ロジック社の所有するビルの屋上からお送りいたします。

「ハリー、問題なく着いたよ」

《オーケーだ、ピーター。こちらでも確認できている》

今の格好はスパイダーマンスーツ……ではなく、スポーツウエアだ。肌にピッタリ張り付くメッシュ製の黒タイツインナーの上に動きやすい膝下まであるサバイバルパンツ。上も同じくメッシュ製のピッタリインナーで上にベスト型の作業ウエア。その上から黒のカーゴジャケットと、どう見ても不審者な格好となっている。極め付けにツバの短い黒のプッシュハットに同じく暗色のスカーフをマスクのように身につけている。

帽子とマスクを除けば、スパイダーバースのマイルズみたいな格好だ。さて、なぜピーター・パーカーがそんな姿でスペース・ロジック社にいるかという点、簡単に言えば潜入調査のためだ。

ラボに帰還後、俺とハリーはネットの海に挙げられているスペース・ロジック社の情報をかき集めた。本来ならこういつた処理はハリーと共に作ったウエンディにさせるつもりだったのだが、無いものを強請つても仕方ないので手分けして情報をサルベージしてゆく。

すると、出るわ出るわとスペース・ロジック社のスペース・スーツの情報。最初は脚部がロケット構造となっており、見た目は宇宙服の

下半身にロケットがくつついたようなびっくりドッキリメカな姿をしていたのだが、最近になってアーマータイプへと進化し、アーマーに備わるスラスタユニットで飛行をおこなっている実験映像とネットには流出していた。

スペース・ロジック社は以前はオズコープとライバル関係であったが、ノーマンがAIを軍に売り込んだことから業績が低迷していたようだ。だが、数ヶ月前から一気にスペース・スーツの開発が飛躍し、初期型では考えられないアイデアが盛り込まれた代物となっている。噂では軍上層部が絡んでいるとも囁かれているが真相は闇の中だ。

「どう思う？・ハリー」

「あくまで設計側の意見だけど、スペース・スーツの初期型の構成を見ると、このコンセプトでアーマー型に持つていくのは無理だ」

リアクターの開発で構造学や力学関係を猛勉強したハリーいわく、脚部のロケットが固形燃料式ならその点火や出力調整には膨大な演算ユニットが必要になるとのこと。それをいくらか小型化してもハイスクールのポストンバックくらいのサイズにはなるのでアーマー型となればその演算ユニットがどうしても重りになってしまうようだ。

だが、スペース・ロジックが開発したアーマータイプは見る限り演算ユニットなど積んでいない。かなりスリムなモデルになっている。具体的に言えばMCUのハマー社のアイアンマンのパチモンみたいな感じ。制御ユニットはあるけれど、あの大きさではスラスタの制御などとてもじゃないが処理しきれないだろう。しかし、実験の流出映像ではそのアーマーは軽快に空を飛んでいるのだ。

「アーマーのスラスタも気になる。固形燃料式のロケットからどうやってこんなものを開発したんだ？この大きさと出力なら並のエンジンじゃない。グライダーの電磁パルスドライブシステムじゃないと説明が……」

そこでハリーはハツとした表情をした。おそらく俺と同じ答えに行き着いたのだろう。

「オズコープの技術が流出している……？」

「それもかなりヤバい情報がね」

すぐに父に知らせないと！そう言っただけでハリーは立ち上がるが、まず待ったをかける。オズコープの利益侵害行為であり、裁判でスペース・ロジック社を相手取れば向こうの会社などペンペン草も生えないほどの更地になるに違いない。けれどその前に気になるところがあった。

「あのスペース・スーツの演算システムにもしかするとウエンデイが使われているかもしれない」

憤っていたハリーはその言葉で静かになった。腰を下ろして真っ直ぐと俺を見る。

「ウエンデイは軍が買収したはずだ。なぜそれをスペース・ロジック社が？」

「問い1。補助的なAIを手に入れた軍人が次に考えることは何か？」

「……無人兵器」

このハリー、なかなか頭の回転が速い。ウエンデイはあくまで指向性の補助AIであり、自ら考えて実行する独立型のものではない。軍にもそう言った内容で販売しているはずだが、ここ最近のマザーユニットへのデータの蓄積量や、軍が高額のスパコンを導入してソフトウェアのアップデートを凶っている以上、おそらく独立型のAI開発が秘密裏に進められているのだろう。

「けど、それは売買契約の違反じゃないのか？」

「国が律儀に約束を守るなんて考えられないかな。現にこうなっちゃってるわけだし」

横目で空を飛んでるスペース・ロジック社のアーマーの映像を見る。契約が守られていない結果がこうやって目の前にあるのだ。ハリーも言い返せないまま悶々と苛立ちを募らせている様子だ。

唐突だが、俺は立ち上がって思いつきリジャンプする。飛び上がりながらぐるりと体を入れ替え、高さ3メートルはあるラボの天井に両足で到着してから、蜘蛛の引っ付き能力で天井からぶら下がって歩き回った。

「ピーターのその能力、ひさびさに見た気がするよ。……え、まさか？」

「そのまさかだよ、ハリー。言ったでしょう？ 『悪用する方法』はいくらでもあるって」

ニヤリと黒い笑みを浮かべるトビー・マグワイアにハリーは「冗談だろ？」というふうな顔を手で覆った。オズコープとスペース・ロジックの行政的なやりとりが始まれば、そこで何が行われていたかは全て極秘に処理されることになる。ウエンディの生みの親として、AIが不正に使用されているなら見過ごすわけにはいかない。

「俺たちに残された道はこれしかない」

「……乗ったよ、親友。こうなったら、とことん付き合うさ」

俺の言葉でハリーも腹を決めたのか、頷いて答えた。こうして、俺とハリープレゼンツ、スペース・ロジック社への潜入大作戦が開始されたのだった。



《試験場はそのビルから東に700Mのあたりだ。ただし、人にはバ
レないようにしろよ?》

耳に取り付けるイヤホン型のインカムからハリーの声が聞こえる。
今回の潜入はピーターのスパイダーマンパワーを全面に押し出した
力技に近い方法である。カーゴジャケットの内側と、中に着込む作業
ベストにはハリーが設計した数々のガジェットが仕込まれている豪
華仕様だ。

俺は内ポケットからボタンサイズのガジェットを取り出して、屋上
の数カ所に設置されている防犯カメラ目掛けてそれを投げる。ガ
ジエツトは衝撃を吸収しつつ、ぴたりとカメラに張り付き特殊な電磁
波を発生させる。するとカメラの通信モジュールに異常が発生し、画
像が一時的に乱れるのだ。

このガジエツトはもう一つあって、張り付いてからジャミングする
タイプと、張り付く直前の五秒間の映像を延々とリピート再生するタ
イプがある。使い所は考えなければならぬが、これで監視カメラに
俺の姿が映ることはないだろう。それにスパイダーマン能力を使っ
て物理的に監視カメラの視界から逃れることもできる。なるべく節
約しながら進んでいきたいものだ。

屋上からするりと降りて壁に張り付きつつ、別のビルへと飛び移
る。それを何度か繰り返してから目的の試験場が眼下に見える高さ
までやってくることができた。

「ハリー、見えてる?」

《ああ、問題なく見えてるよ》

身につけているサングラスはウェンディ用にと作成していたコク
ピットモジュールの成果の一つだ。フレームに小型のカメラとディ
スプレイを内蔵していて、レンズにモデルを投影することも可能。簡
単なマップも表示できる便利アイテムだ。

サンングラスに内蔵された小型カメラから見る実験場の映像にはくつきりとスペース・ロジック社のアーマーが映し出されている。

「近くには演算ユニットは見当たらないね」

《……やはり衛星回線を使った補助システムが組み込まれていると見た方がいいな》

ハリーの予測は二通りあって、まず一つはウエンデイのようなマザーユニットが近くにあつて、そこから演算補助を受けている可能性だったが、近くにそれらしきユニットは見当たらない。

この年代の無線通信はかなり脆弱だ。建物の壁に遮られれば通信など届かない。強力な通信基盤を確立するなら衛星からのダイレクトデリバリーになるわけだ。

実験場にユニットがない以上、あのアーマーは衛星回線からの通信補助を受けている可能性が大いにあるといえる。

《ピーター、もう少し近づいてくれないか？》

わかったと答えて俺は張り付いているビルから飛び降りようと身構えた瞬間だった。むずむずと第六感が何かを訴えかけてきた。身動きせずに辺りに注意を払う俺にハリーが心配の声をかけるが、その声も耳に入らないほど胸騒ぎが大きくなっているのがわかった。

すると、俺の鋭敏となった視覚が夜闇にまぎれて飛んでいる何かを捉えた。

「ハリー、聞こえる？」

《ああ、聞こえた。この音は間違いない……電磁パルスエンジン。グライダーの音だ》

意識を集中させる先。夜の雲から現れたのはオズコープが開発したグライダーだった。だが、ハリーや俺がみた試作型のものではな

い。完全に武装された上に、視認性を低くするためのステルス迷彩、そしてステルス塗装も施されたものだった。そして、グライダーの上には人は乗っていない。流線形のユニットがグライダーに張り付くように取り付いているのが俺の目には、はつきりと見えた。

「なんだ、あれは?!こっちに向かってくる!!」

その瞬間、俺の目の前でグライダーがミサイルを放った。思わず飛び出したが間に合わない。ミサイルはそのまま地上にいたスペース・スーツに直撃。パイロットと近くにいた作業員や研究者たちも巻き込んで大爆発を起こした。そして飛び抜け様にダメ押しで野球ボールサイズの爆弾もグライダーは投下。証拠を隠滅する様に次々と爆発してゆく。

飛び出していた俺は爆風の衝撃を体に受けて吹き飛ばされ、ビルの壁に叩きつけられた。そのままずるずると地上に落ちて体を強く打つ。想像を絶する痛みが体を駆け抜けた。スパイダーマンパワーを身につけていなければ死んでいただろう。

土煙と瓦礫が崩れる音が響く中、グライダーはスーツが立っていた実験場を見渡し、完全に破壊されたのを確認すると再び夜闇の中へと消えてゆくのがあった。

「……………あれは……………ウエンデイ……………なのか……………?」

割れてしまったサングラスを外して見上げる。そこには夜空へ消えてゆくグライダーの放った飛行機雲が残っていた。一体なにが起こっているのか、この時の俺にはまだ理解できていなかった。

それがあの事件の始まりだったということ。

小話

薄暗い部屋の中。アメリカのどこかの軍施設内に設けられた会議室にはテレビ電話による会議が行われていた。部屋の中央にあるテーブルに座るスローカム将軍は、彼を取り囲むように映っている映像を見回し、満足そうな笑みを浮かべていた。

そこにはAIである「ウルトロン」が搭載されたグライダーによるスペース・ロジック社の襲撃映像が記録されてきた。グライダーに取り付けられたガンカメラは、実験中だったスペース・スーツが完膚なきまでに破壊されている様子がはつきりと記録されている。

「作戦はうまく行きましたな」

テレビ会議に出席するスーツ姿の初老の男性がそうつぶやく。彼はオズコープの役員の人だ。他に出席している人物もオズコープ社の中枢に深く関わる者や、役員が多い。これは社長であるノーマンにも秘密で行われていた取引であった。

「スペース・ロジック社もバカな真似をしたものだ。オズコープが開発したものを土台にしているくせに、それに乗ってオズコープに優つたと豪語したのだから」

誰かがそう言って、残骸と化したスペース・スーツに消火剤をかけているスペース・ロジック社の人間を見下す。彼らは軍との秘密契約でプロジェクト・ウルトロンに参加していた企業の一つだ。主に戦場で自立AIに従って戦闘を行う無人アーマー兵器の開発を進めていたが、開発コンセプトを最適化するウルトロンの性能や、オズコープ社から流れたグライダーのエンジンシステムを手に入れたことで計画から外れた有人アーマーの開発に欲を出したのだ。将来的には欧

州やロシア方面にも売り出そうという思惑もあつたことがCIAの調査で明らかになつたことで、軍は極秘にスペース・ロジック社の瓦解を行ったのだ。

資金面でも既に手を加えており、彼らは有人アーマーに投資した莫大な金を回収しきれずに人知れず自滅する運命が確定している。

「彼らの行った実績も、「プロジェクト・ウルトロン」にとっては非常に有益なものであつた。まあ、甘くみた分は痛い目を見てもらうことになるがね」

スローカム將軍は彼らを滅する前に入手したアーマーの設計図を眺めながらそう言った。動力源はオズコープからテスト的に支給されたリアクター。複雑な姿勢制御や動作指示、管理AIなどはすべてオズコープの軍施設が入るタワーの地下に設置されたウルトロンのマザーユニットから送信される。

ピーターとハリーが開発したAIは軍施設に送られたわけではなく、ニューヨーク市内に立つオズコープ本社地下にあるのだ。軍施設に置かれているものはあくまで戦場や諜報部で採取されたデータバンクの容量の一部に過ぎない。

オズコープは軍と極秘に契約し、ウルトロンを完全無人兵器として運用するためのテストに協力していたのだ。

「独立型のAI機能、無人のボディアーマー、そして飛行するグライダーに無尽蔵のアクリアクター。まさにアメリカ合衆国にふさわしい夢の兵器だ」

これが完成すれば、これまでの戦争は大きく変貌する。兵士を戦場に送ることもなく、平和な街でコーヒーを楽しみながら、ウルトロンが世界中の前線で戦ってくれるのだから。

「オズコープ社とはこれからよろしく願います」

「ああ、無論だとも……だが、少々厄介な者たちを追い出さねばならんな」

トントン、とスローカム將軍はテーブルに置かれているノーマンの写真を指先で叩いた。プロジェクト・ウルトロンに遅れが出ているのは全てこの男のせいだ。彼がウルトロンのマザーユニットに介入する限り、完全無人の自立AIは完成されない。どこかに必ず人が判断しなければならぬ指向性を残しているのだ。それを指摘しても彼はのらりくらりと躲して我々の思うように動かないのだ。

先日提供されたアークリアクターも簡単な部品については説明があったが、肝心のコアユニットについては全てがブラックボックス扱いだ。軍の研究員も解析を行なったが、理論が分からない限り複製も量産もできないのだ。ノーマンはその情報を開示しようとしぬ。もし我々が欲すれば、ノーマンは躊躇いなく法廷で争うだろう。その覚悟が提供されたアークリアクターと共に同梱された誓約書に滲み出していた。

その姿に苛立っていたのはスローカム將軍だけではない。オズコープの役員たちも苛立ちと焦りを覚えていた。

「ノーマン・オズボーンは最早オズコープには不必要な人間です。役員たちの丸め込みもすでに整っています。彼が目をつけた若き天才たちも」

すでに役員総員の可決でノーマンを代表取締役から退任させる方向で意思は統一されている。彼を社長の座から引き摺り落とし、首にさえすればいいと、誰もがそう思っていた。

だが、事實は異なる。

ノーマンを首にしようが、彼のプライベートマネーで作られた子会社がある。オズコープという後ろ盾をなくしても、その子会社にはトリチウムの権威であるオクタヴィアスをはじめ、画期的なコクピットモジュールを開発し、アークリアクターの設計を行なったピーター・

パーカーと、息子でもあるハリー・オズボーンがいる。その功績と成果で完全にノーマンを叩き潰すことは不可能だ。

だが、それはあくまで正攻法で行なった場合の話。

「彼らが開発したものはまさに革命的なものだ。だからこそ、彼らのような希望は我々が管理しなければならない。ノーマン・オズボーンではなく、我々がな」

オズコープの役員たちが黒い笑みを浮かべる中。

スローカム將軍の後ろにあるウルトロンの演算ユニットは、中央にあるカメラを赤く光らせながら見つめているのだった。

第八話

どうも、スペース・ロジック社を襲ったグライダー爆撃を受けて這う這うの体でラボに戻ってきたピーター・パーカーです。

通信用のインカムと映像送信用のサンングラスを爆風で木っ端微塵に破壊された結果、ラボの屋根裏から入るとハリーが顔面蒼白で出迎えてくれた。うむ、カーゴジャケットはボロボロだし、サバイバルパンツも焼けてるし、背中は痛いし肋は痛めてるし傷も多くてしんどいけど俺は元気です。

変装用の服をとりあえず着替えて、包帯を巻いてもらってるところで祝賀会後のお偉いさんの付き合いで遅くなつたオクタヴィアス夫妻とノーマンが帰還。ちよつと見ない間にスタボロになつた俺をみて全員が絶句してた。

なんて言い訳したものか、と考えていたらハリーがまさかの爆弾投下。俺とハリーで調べたスペース・ロジック社の技術横領を説明して、ハリーはロジック社に事実確認をしに行つたところ、車に轢かれたと俺が軌道修正しておいた。

軍経験者が見れば、俺の傷は明らかな爆風による裂傷だとわかるだろうが、このオクタヴィアス夫妻もノーマンも軍属ではなかつたため車に轢き逃げされたということを感じてくれた。ノーマンは「車の特徴やナンバーを教えろ。なにがあつても捕まえて償わさせてやる」とグリーンゴブリンも真つ青なマジグレ顔でそう言つてきてくれた。とりあえずでつちあげると地の果てまで架空の轢き逃げ犯を追いかけそうな勢いだったので轢かれた衝撃でなにも覚えていないということにしておいた。

一方で、オズコープ社の技術が同業他社に流出していた件については、ノーマンの方で出どころを調べるといふことで一旦預かりとなつた。オクタヴィアス博士としては、アーリアクター技術は既に確立されたシステムであり、複製や模倣されるのは仕方がないというが、オズコープ社製だとわかれば社会批判は免れないだろうと言つてい

たので、ノーマンもすぐに動く約束していた。

「私の研究はある意味完成したが、ピーターやハリーの若い者たちの未来を奪うのはどうにか避けなければならぬ」

そう真剣な眼差しで言う博士の顔には、トリチウムによる新エネルギーの研究に没頭していた時のような生き急いでいる雰囲気はなく、純粹に俺やハリーの将来を心配している大人の表情が浮かんでいた。彼の結末の一つを知る者として、今のオクタヴィアス博士の姿に少し泣きそうになったがヒビが入った肋を押さえて痛みで誤魔化した。

とりあえず俺はそのまま救急車に乗せられて病院へ。ノーマンから連絡を受けたメイお婆さんとベンおじさんも病室に駆けつけられた。

最近をよく車に轢かれるわねえ、と無事の俺の姿を見てホツとしながらメイお婆さんは言う。たしかこのピーター・パーカーに憑依したのも交通事故が原因だったわけ？おじさんは「とにかく養生して力をつけなさい」とゴツゴツした手で頭を撫でてくれた。

入院も明日の朝一から検査を行なって、問題なければ夕方にも退院できるらしい。ぶっちゃけスパイダーマンパワーのおかげで痛みはほぼ引いているし、ヒビが入った肋も徐々に治っている。治癒力も馬鹿みたいに上がってるんだなあとか思いながら、ハリーやオクタヴィアス夫妻、ノーマン、おじさん夫婦でゴった返していた病室からそれぞれが帰路についていく。

ハリーは心配だから泊まると言ってノーマンを見送った後、部屋に鍵をかけて窓にカーテンを広げた。

「ピーター、あそこで何があった？あのライダーには……本当にウエンデイが乗っていたのか？」

悲しさと困惑が入り混じったような顔でそう問いかけてくるハリーに、俺は少し迷ってから頷く。親友であり、とことん付き合うと

言ってくれたハリーには嘘はつきたくなかった。ウエンデイが軍事利用。しかも自立型AIとして使われていることにハリーも、そして俺自身もシヨックを隠しきれなかった。

「俺たちは、人殺しをさせるためにウエンデイを作り出してしまったのかな……」

項垂れて顔を手で覆いながら弱々しい声でハリーはつぶやく。ハリーと一緒にウエンデイのAIを作っていた時は、こんな悲しみなんてなかったはずだ。

ウエンデイは、そんなことのために生み出されたAIではない。人の役に立ち、人の手助けをし、人に感謝されるために生み出された存在だ。決して、人殺しの道具になるために生まれてきたんじゃない。俺は立ち上がった。痛みを歪めながら、けれど決して諦めずに立ち上がる。ハリーはいきなりベッドから立ち上がった俺に驚いていたが、躊躇わずにハリーに言った。

「助けよう。僕たちが作ったウエンデイを」

たとえ相手が軍でも、国でも、政府であっても必ずウエンデイを取り戻して、本来使うべきはずだったものに役立てよう。俺ははつきりとハリーに言った。無謀なことだとはわかっている。取り返せる可能性なんて万が一にもありはしないかもしれない。

だが、それがどうした。

それが諦める理由になんてなるものか。それが絶望する理由になんてなるものか。なんとかして、最後には必ず立ち上がる。

それが、俺の目指す本物のヒーローであり、スパイダーマンなのだから。

「……ピーターは、いつも突拍子もないことを言うからな」

“なあ、ハリー！ビルフロアサイズの機械を一緒に自動販売機サイズにしな……いったあ!?いきなりなんで殴るんだよ!?”

“あーハリー。計算上大丈夫だろうけど重水素とパラジウムの配置間違えたら下手すると水素爆発起こすから……え？それは設置する前に言え？あー、ごめいっただああい!!”

“ハリー大変だ！オクタヴィアス博士がシエイカーでニトログリセリンをシエイクしようとしてる！止めるの手伝って!!”

“ただい……うわあ、酒臭ツ!!ハリーなにしているんだ!?ワインボトルを空けるなんて僕ら未成年……え？設計図書いたから見ろ？そんな状態で書いた図面が上手くいくわけ……ハリー、君は天才なのかい?”

“え？MJにアプローチするか迷っている？男ならドーンと好きな女の子にアタックだよ、ハリー！え、お前もMJのことが好きだったんじゃないかって？このレポートと面接スケジュールみてそんな余裕あるように見えるかな?”

うむ、ハリーとのやりとりを瞬時に思い返したが割と酷いというか、これは酷いの連続だったような気がする。けれど、充実していた。ハリーもそれを感じているらしく、小さく笑ったその顔にはもう悲壮感が残っていないかった。

「ああ、このまま諦めるなんてらしくない。だったら取り返そうぜ。俺たちの作ったウエンディを」

そう言って立ち上がるハリーと拳を軽く合わせる。いつもそうやって困難を乗り越えてきた。だから必ずウエンディを取り戻す。その道のりがどんなに険しかろうともだ。

「男の子同士の友情を確かめ合うのはいいけれど、そろそろ就寝の間ですよ」

その光景を見回りに来た看護師さんに見られた。俺とハリーはなんだか恥ずかしくなって、すぐに合わせていた拳を下ろしていそいそとベッドとソファアへと引き上げることになるのだった。



翌朝、起床後に朝食を食べてすぐさま検査となったが、回復が思ったよりも早くて昼過ぎには退院できる目処が経った。ハリーは俺の検査結果を見届けた後、側近と共に高校へ。MJをほつたらかしにしてしまったフォローもしなきゃならないらしい。

迎えにはメイおばさんとオクタヴィアス夫妻が来てくれるようで、特にならない荷物を簡単にまとめて病室を後にし、玄関ロビーに行く途中で三人は待合場所で待つてくれた。

「ピーター、体の調子はどうかしら？」

心配そうな眼差しで言うメイおばさんに、肩をぐるぐる回して元気いっぱい笑顔で答える。見てくれた医者も「え、なんで君入院して……ああ、車に轢かれたのか。……本当に轢かれたのかい？」と若干引き気味に言っていた。それくらい体も回復している。

タクシーを待たせているから先に行くわね、とメイおばさんが玄関から出て行くのを見送ると、俺の入院費用諸々を立て替えてくれたオクタヴィアス博士が隣にやってきた。

「さて、ピーター。以前君に私の知り合いの学生を紹介すると言ったな？ 今晚に都合が付くのだが、夜は私の家に来てくれないかな？」

鞆に入れていたミネラルウォーターを取り出して口に含んでいるときにそう言われたもんだから思わず吹き出しそうになったけれどなんとか持ち堪えた。たしかにMJとハリーの関係を見ていると羨ましいと思う自分もいるけれど、こんなに早く場を設けてもらえる

なんて想定外だった。

ちなみにもうメイおばさんとベンおじさんにも話を通していろいろ、帰っても夕飯は準備されていないようだ。選ぶのは君の自由だと笑顔で言うけど外堀を見事に埋めてませんか？そういう目を向けていたのか、オクタヴィアス博士の隣にいた妻、ロージーがおかしそうに笑った。

「主人はそれほどピーターを心配してるのよ。それに悪い子じゃないわ、きつと会えば気にいるはずよ」

なんでも元はオクタヴィアス博士が教鞭を執っていたサイエンス学習塾の生徒であり、今でも科学系の話題でやりとりをしているのだとか。そんな話を半分聞いてタクシーに乗り込む前に、オクタヴィアス博士は写真と名前を俺に告げた。

「名前はグウェン・ステイシー。ブロンドの髪が特徴的な快活な子だよ」

WHAT, S?俺はタクシーに乗り込んだオクタヴィアス博士にそんな言葉しか返すことができなかった。

第九話

退院してからまず向かったのは高校だった。入院の名目上、俺が交通事故にあつたので念のための検査と入院だったから、今日から様子見で一週間学校を休むことになるからだ。

最初はベンおじさんが話をしておくと言ってくれたが、これ以上迷惑をかけるわけにもいかないし、置いてあるカバンとかも取りに行きたかったし。

高校では先生たちに体を気遣われて少しむず痒かった。なにより驚いたのがフラッシュユがすぐに心配してくれたことだ。ハリーと一緒にいるMJにも入院の内容を伝えていると、フラッシュユが横から声をかけてきたのだ。

交通事故にあつたのを心底心配していたらしく、週末は試合は観に来なくてもいいから安静にしておけよ、と伝えるだけ伝えて取り巻きたちと一緒に教室から出て行ってしまった。

MJの話によると、俺と仲良くなってから人が変わったようにサボっていたアメフトの練習に精を出すようになったらしく、大学はいけないが企業チームにスカウトしてもらうために頑張っているらしい。フラッシュユからいじめっ子体質抜いてまじめなスポーツマンになったらヤベエくらいモチるんじゃないかねえの？って思ったけど、本人は女遊びより激励してくれたピーターに報いるために練習に打ち込んでいるのだとか。

フラッシュユはいじめっ子だが根はいい奴だ。それはスパイダーマンの原作でも現れてるし、アメイジングスパイダーマンではおじさんを失って荒れているピーターを慰めてくれたりしたのだが……。

ふと思う。俺は確かにスパイダーマンの能力を手に入れた。けれど、ピーターのようにその力でお金を稼ぐことを考えたり、プロレスでボーン・ソー・マッグローと戦うなんて真似もしていない。あの試合の後、図書館にいくと嘘をついていたピーターを待っていたおじさ

んは車強盗にあつて命を落としたのだ。

俺はボーン・ソー・マツグローの試合の日に起こった犯罪は全て目を通していた。マツグローの試合の後に起こる車強盗が、ベンおじさんの死につながる可能性がとても高かったから。だが、マツグローは相変わらずプロレスのチャンプのままだし、車強盗が新聞に乗ることもなかった。

このままあの場所に近づかなければ何もなければ……ずっと嫌な予感と恐怖はある。何がきっかけで、おじさんやメイおばさんに危害が加わるかわからないからだ。

俺はなるべくおじさんが危険な目に遭わないようにラボに迎えにきてもらうときはまだ明るい内にお願ひしているし、遅くなるようだったらラボの端に作った仮眠室で寝泊まりするようにしているの
で夜闇の中でおじさんを待たせたりするような真似はしなかった。

ノーマンもグリーンゴブリンになっていない。オクタヴィアス博士も自分の夢を叶えて、もうあんな無茶な実験を行うことはない。ハリーとも関係は良好だし、彼女のMJは友達として交友関係を構築している。オズコープも右肩上がりで成長している。僕とハリーが立ち上げた子会社も研究援助を行いながら零細企業を買収したりして成長していつている。

何も問題はない。何もなければいい。けどなぜだ。こんなに胸騒ぎがするのは……。

「ピーター、ちょっといいか？」

学校から帰宅して、夕方。そろそろオクタヴィアス博士が主催してくれるホームパーティーに出かけるかと言うところで、おじさんが部屋をノックして開いたドアの前に立っていた。いいよ、と声をかけるとおじさんは部屋に入り、ベッドに腰を下ろした。

「ピーター、お前は本当によくやっている。ほんの半年前から見たら見違えるほどイキイキしているよ」

「何だよ、ベンおじさん。急に改まってさ」

「いいから聞きなさい、ピーター。お前のやってることは間違ってる。お前がなすことはきつとこれからも多くの人を助ける大きな力になる。だが、その大きな力は時にして使い方を間違えれば災いをもたらすことになる」

アークリアクターが完成した時も、おじさんは喜んでいたが、同時に不安な顔もしていた。それはよく覚えている。ベンおじさんは長く電気工場に勤めていた人でもあって、通信インフラが激変した時代の中で切り捨てられた経験もある人だ。アークリアクターや、俺とハリーが開発したコクピットモジュールは確かに人の生活を豊かにする面もあるが、同時に人を不幸にしてしまう側面もある。

大きな変化には犠牲がつきまとう。だが、それを受け入れてしまえば人を人たらしめるものがなくなっていってしまう、と誰かが言った。そんな力を生み出してしまった以上、使い方を俺やハリー、オクタヴィアス博士やノーマンはもつと深く考えなければならぬだろう。

「いいか、ピーター。大いなる力には、大いなる責任が伴う。忘れるなよ?」

その言葉が重くのしかかったような気がした。場面は全く違う。今いるのは車の中ではない。俺の部屋で、ベンおじさんの自宅だ。けれど、なぜか、その言葉を聞きたくなかった自分がいた。おじさんが危険な目にあってしまうのではないかと、強迫観念のようなものが心に迫り上がってくるような気がした。

「……大いなる責任を、僕は果たせるかな?おじさん」

「もちろんだとも。ピーター。お前にもわかる時が必ずくる。特に護るべきものができたらな?」

そう言つて微笑むおじさんに、俺も笑みを返してその胸に顔を埋めるように抱きしめる。絶対におじさんは死なせはしない。それがまず、俺が果たすべき大いなる責任なのだから。



「ハアイ。はじめましてピーター・パーカー。私はグウエン・ステイシー」

「……ああー、うん。どうも、ステイシーさん。ピーター・パーカーです」

時間は夜の七時半。おじさんとおばさんには嚴重に戸締りをするように伝えて家を出た俺は、オクタヴィアス博士主権のホームパーティにやつてきていた。

ドアを開けてくれたのは博士の妻であるロージー……ではなく、ブルンドの髪がよく似合う綺麗な女性だった。笑顔で差し出された手に反射で握手を交わしてしまったのだが……相手はグウエン・ステイシーだ。あのグウエン・ステイシーだぞ？スパイダーマンのどの作品でも危険な目にあつて、ピーターの最初の彼女でグリーンゴブリンの手によって命を落としてしまう悲劇のヒロインだぞ？

まじかー、と思ひながら家に招き入れてくれるグウエンの後ろ姿を眺める。ブルンドの髪はボブカットに整えられており、水色の目が特徴的な女性。わあお、MJが霞んで見えるほどの美人……おっと、これは全世界のキルステイン・ダンストファンに刺されかねないのでお口は閉じておくでしょう。

リビングに通されるとすでにオクタヴィアス博士が座っていて、妻のロージーが出来立てのローストビーフやら、ラザニアやらを食卓にならべているところだった。とりあえず手を洗ってすかさずロージーの作業を手伝う。まかせてくれ、博士とハリーと三人で出前を

取った時の配膳係は全部俺だったんだぜ？

テキパキと用意をしているとグウエンが興味深そうな目で俺を見ていた。

「な、なに？」

「いや、結構家庭的なんだなって思って」

「すみません、そんな目で見ないでください！助けて博士！俺この子のこと好きになっちゃう!!そんな視線に気づいたオクタヴィアス博士はウイंकして再び読んでいた論文に視線を戻した。くっそおー！博士が研究に行き詰まって奇行に走ったこと奥さんに秘密にするのに恩を仇で返すつもりか！いや、今まさに恩返ししてくれてるんだよね！相手がグウエンじゃなかったらパーフェクトだったよクソが！」

「ピーター、あなたの論文読んだわ。アークリアクターの電力供給部の話。重水素とパラジウムを使うなんてどこで思いついたの？」

「あー、砂漠をジープ3台が爆走してる映画のシーンを見てたら思いついたんだ。めちやくちやロックなBGMかけながらね」

中の人がいけオジで軍用車の中で酒を煽ってることまでは言わなかった。冗談だと思ったらしくグウエンは笑っていて、論文を見たオクタヴィアス博士も笑っていた。そんなこんなで準備も終わってロージの合図で四人のささやかなホームパーティが始まった。

ロージの作るローストビーフは最高で、うまいうまいと言うとオクタヴィアス博士が自慢そうに頷いていた。

「ピーターはどこ的高校なの？」

ふと、グウエンが話題を振ってきた。頬張ったラザニアを飲み込んで当たり前障りなく答える。

「ミッドタウン高校」

「へえー、私はブルックリンよ。ねえ、オズコープのラボってどんなかんじ?」

「最新機器がズラーって感じだね」

「……オクタヴィアス博士と同じこと言ってるわ」

「悪いね、守秘義務とかいろいろあってさ」

「科学者って隠し事多いよね。オクタヴィアス博士もアークリアクターの研究してるなんて一言も言ってくれなかったし」

ジト目でオクタヴィアス博士を見るグウエンだが、博士も博士で仕方ないといった風だ。聞けばグウエンが中学生に上がった頃からの知り合いらしく、科学の専攻で高校も決めブルックリンに移ってからオクタヴィアス博士と連絡を取り合っていたらしい。

「それで? ピーターは彼女が欲しいの?」

ブフウっ!と飲んでいたコーラを吹き出した。幸いコップの中で済んで大事にはならなかったけれど話題がダイレクト過ぎてびっくりした。オクタヴィアス博士を見ると、彼は悪びれる様子もなく両手を上げた。

「ハリーが付き合いはじめた時、ピーターは応援しながらもどこか寂しい顔をしていただろう? ベンにもよくしてやってくれと伝えてもらってね」

「こうも恋愛ごとには大ぴらなのか、これだからアメリカは……いや、俺も生粋のトビー・マグワイアだったわ。じゃなくて、僕はですね、別にすぐにガールフレンドが欲しいとかじゃなくてですね!!」

「じゃあお友達からスタートする?」

なんでこの子はこんな食い気味なの!?肉食系なの!?暴食系女の子
なんですか!?頬杖について流し目でこつちを見ないで美人さんなん
だから!!

「と、とりあえず……お友達からお願いします……」

「そうね!じゃあ、まずはお友達から。よろしくね、ピーター」

「あー、よろしく。ステイシーさん」

「だめよ、グウエンって呼んで」

あーだめだ、どうあってもこれは彼女と距離が縮まるイベントだよ
これ。こんなにぐいぐい来られるとか想像してなかったんですけど
!!こら、オクタヴィアス博士!ロージーと静かにハイタッチするん
じゃないよ!!

「じゃ、じゃあ……よろしく、グウエン」

「ふふっ、よろしくね、ピーター」

みんな、俺をチキンと罵ってくれていいぞ。こんな美人な女の子に
言い寄られて尻込みするってな!俺だって相手がグウエンって名前
じゃなかったらめっちゃ嬉しかったし舞い上がったけど、グ
ウエン!!悲劇のヒロインなんだからそりゃあ遠ざけた方が彼女のた
めとか考えちゃうんだよ!!善意で紹介してくれたオクタヴィアス
博士には悪いけど、付かず離れずの距離を保ちながらグウエンが俺に
飽きてくれることを祈るしかない……。

そんな風にも楽しむも、どこかぎこちなく、緊張に満ちたホームパー
ティは終わりを迎えた。帰りはグウエンを地下鉄の入り口まで送る
と、彼女から「何かあったら連絡して」と電話番号とメールアドレス
が載ったメモ帳を渡されました。

うわあ、これどうすつかなあ……。下手に手を出すと彼女死亡フラ
グまつしぐらになりそうな気がする。いや、死因であるグリーンゴブ

リンフラグをへし折ったからワンチャン……いやいや、そんな油断を
するとピーター不運とダンスすることになるぞ。死神は常に俺の背
後でタツプダンスを踊っている。それを忘れるんじゃないぞ、ピー
ター。

とりあえず、このメモは大事にしまっておくことにして俺はそのま
まパーカー家への帰路についていた。

そして、悲劇はもう起こっていた。



いやな予感がした。

オクタヴィアス博士の家から家に帰るなら地下鉄に乗るのだが、そ
の日はザワザワとした何かを感じていた。あまりバレないようにピ
ルの屋上へと登ってビルの合間を飛び越えながら電車よりも最短の
直線ルートで家に帰ることを急いだ。

近くの路地に着地して、あとは何ブロックか進めば慣れ親しんだ我
が家が見えてくるのだが、そのブロックの先に赤と青の光が瞬いてい
るのが見えた。

アメリカの警察の独特なサイレン。パトランプの色に血の気がひ

く。ふわふわとした足取りのまま、心の中で何か祈りながら進んでゆくと、その疑念は確信に近づいてゆく。

筋を曲がると、パトカーが道に止まっていた。それも一台じゃなく数台だ。パーカー家の前に止まっている。

足がすくんだ。体が動かなくなつて喉がカラカラに乾いた。心臓の音がやけにはつきりと聞こえる。ふらついた足取りのまま家に近づく。野次馬が集まっていたがそれを押し分けて進んでゆく。

規制線の前で警官が立っているのが見えて。

その後ろで誰かが倒れているのが見えた。

頭が真っ白になった。

「ああ……そんな……僕の叔父だ!!」

止めてくる警官を押し退けて駆け寄る。

そこにはベンおじさんが横たわっていた。パーカー家の玄関の前だった。落ち着いた色のシャツは血に染まっついていて、出かける前は元気だった顔色が青くなっているのがわかった。

なんでだ。おじさんは外に出ていないのに、ここはパーカー家なのに、なんで?なんでなんで……叔父さんは撃たれて倒れているんだ?何が何だかわからなかった。

「ピーター……」

誰かがそつと俺の肩に手を置いた。振り返るとそこにはMJがいた。通報したのは彼女だった。

「……強盗が家に押し入って……おばさんを守ろうとしたおじさんが……犯人に撃たれたの……」

頭ではMJが説明してくれたことが理解できた。だが、心が受け入れられなかった。強盗が家に押し入るなんて……そんなことはあり

得ないと思っていた。なぜ家に残らなかった？なぜ、オクタヴィアス博士の誘いに乗った？なぜ？なぜ？そんなことしか考えられない自分がいて、そんな自分を冷ややかに見つめるもう一人の自分がいた。

そら、結局は何をしても変わりにはしなかっただろう？冷ややかな目と共に吐き出された言葉に、今まで大丈夫だと自分に言い聞かせてきた安直さが絶望に変わった。呆然と倒れているベン叔父さんを見つめていると、震えている手がかすかに俺の手を掴んだ。

「ピーター……」

掠れたベンおじさんの声が聞こえた。俺は血の気が引いているおじさんの手をしっかりと握りしめて頷いた。

「おじさん……僕はここにいるよ。ここにいるよ……ベンおじさん」
「ピーター……ピー……ター……」

おじさんは俺の名前をずっと呼んでいて、そして目を閉じた。握ってくれていたおじさんの手から力が抜け落ちた。サイレンの音がやけに鮮明に聞こえる。

《犯人は逃走、ダウンタウン方面に逃走車両有りとの報告》

俺は目を閉じたおじさんをしばらく見つめてから、ゆっくりと立ち上がった。

犯人はダウンタウンにいる。

それだけわかれば十分だ。

気がついたら、俺はもう走り出していた。

第十話

ミッドタウンの高層ビルの間を飛び越えて走っていた。目指す先はダウンタウン通り。一足で屋上の淵から一気に空中へと飛び上がり、給水塔の上や、ビルの突起部分を巧みに利用して駆け抜けていく。その時のことはよく覚えていない。本能と叔父を殺した犯人への怒りだけで体が動いていた。大通り沿いのビルの屋上へと着地すると、眼下でサイレンが鳴り響いているのが聞こえた。見下ろすと、逆側車線を猛スピードで進む逃走車と、サイレンを光らせるパトカーがカーチェイスを繰り返しているのが見えた。

俺に迷いはなかった。正体がどうだとか、顔を隠すとか、そんなことも頭になかった。見える範囲にあるビルの先へ手首から糸を飛ばし、一気に屋上から身を投げ出す。

振り子の運動でビルから一気にスイングし、摩天楼へと飛び出す。糸を貼り付けたビルに激突する寸前に他のビルへと糸を飛ばしてさらにスイングで加速していく。大通りの誰もが暴走する犯人の車とパトカーに視線が向かっていて、頭上からスイングで迫る俺に気づいてない。

逆に好都合だ。さらに加速してパトカーを追い越して、逃走車の上へ着地した。

「なんだ？」

犯人の声が車体越しに聞こえる。俺は怒りのまま拳を振り下ろした。人の力を超えた一撃は紙細工を突き破るように運転席側の天板を貫いた。振り下ろした拳は犯人の肩に直撃したらしい。鎖骨が碎かれる感触が拳越しに伝わってきて犯人の悲鳴のような叫びが聞こえた。

そうだ、もつと叫べ。叔父さんの痛みはこんなものじゃなかった!! 腕を引き抜き、両手で貫いた天板の穴を広げる。見上げた犯人の目

は恐怖に染まっていた。俺は人が通れるサイズまで穴を広げると、犯人の襟首を掴んでそのままずりりと車体から引き摺り出した。

「は、はな……うわあああーっ!」

話を聞くつもりはない。引き摺り出した犯人を一気に空高く投げ飛ばし、暴走する車のブレーキに糸を飛ばした。車は急減速するが、その反動を利用して空へと飛び上がり、糸を出してスイング。重力に従って落ちてきた男を掴んで、俺はそのままダウンタウンの路地をスイングで飛び抜けてゆく。

サイレンの音が静かになったあたりの屋上に上がって掴んでいた男を乱暴に屋上の床へと落とす。ゴロゴロと転げ回る男の目の前に着地して、足で転がってきた男の胸を踏みつける。

「た、助けてくれ……!!俺は頼まれてやっただけなんだ!!」

「お前は僕の叔父さんに情けをかけたのか?なあ、答えるツ!!!」

命乞いをする男を持ち上げる。ビルの屋上に照明はなく、街の街灯も届かないため互いに顔は見えなかった。持ち上げた男がやけに軽く感じた。その命の軽さは尋常じゃない。今にもむしり取れそうな重さだった。そのまま歩いて10階以上あるビルの屋上の淵から男の体を出す。俺が手を離せば男の命は簡単に消え去る。

「ひい……た、たすけ……」

「頼まれたと言ったな?誰が頼んだ?金が目的か?なぜ叔父さんを撃った!!」

「う、撃つつもりはなかった……!!殺しなんて頼まれてなかった!!あの親父が抵抗するか……!!」

襟首を掴んで持ち上げたまま男の顔を数発殴る。歯が折れた感触と、鼻が潰れた感触があった。うめき声のような声を上げる男を揺さ

ぶって気絶させないように目を見開かせた。

「次は腕の骨だ!!そんな言い訳が通用すると思うか?この犯罪者が!!
答えろ!!誰に頼まれた!!」

「…………ぐえ…………た、頼まれたのは…………アークリアクターのデータだ
…………ピーター…………パーカーのデスクにあるって言われ…………」

なんだと?アークリアクター?こいつの目的は金じゃなかったのか?なぜこんなゴロツキがアークリアクターの情報を欲しがる。そして次に犯人の口から出た言葉で、俺の怒りによって熱くなった脳は冷や水をかけられたように冷たくなった。

「頼んできたのは…………オズコープ…………ノーマン・オズボーンだ…………」

嘘だ。

何を言われたのか理解できなかった。俺の家に強盗に入った男は…………オズコープ…………それもノーマンに雇われた、だって?そんな馬鹿なことがあるわけない。ノーマンはグリーンゴブリンになんかかっていない。オズコープも業績悪化で危機に陥っていない。全部うまくいっているはずなのに…………なのに…………ノーマンが俺を疎ましく思ったのか?成果を上げすぎたことに苛立ちを覚えたのか?彼は…………どんな人間だった?

答えのない自問自答の中で、気がつけば犯人は地面に足をつけていて、襟首を掴み上げていた手を離していた。男は懐から拳銃を取り出して俺の頭に銃口を向けていた。

「意外とあまちゃんだな、スーパーボーイ」

引き金が引かれる直前、反射的に俺の手は動いた。すぐさま拳銃を持っていてる手を捻り上げ、そのまま手首を折る。男は声を上げて腕を押さえたまま後ずさった。

「や、やめ……」

そしてそのままビルの屋上から足を踏み外して、後ろ向きのまま落ちてゆく。死んで当然だ。こいつはベンおじさんを殺した。突然の報いなんだ。

そう納得しようとした俺の心に、誰かの声が聞こえた。俺の名前を呼ぶ声。

手首をかざして、落ちてゆく男に糸を放つ。絡まった男はそのままビルの外壁に叩きつけられるが死にはしなかった。

男を吊るした糸をビルの淵に引っ掛けて、俺はその場を去った。

頭の中がグチャグチャだった。

叔父さんを殺してしまったのは、間違いなく自分の行いのせいだ。アークリアクターが世に発表された段階で、おじやお婆にはもつとセキュリテイが整えられた場所に引越しておけばよかったのに、あの家に愛着があるからと、どこかで怠っていた。

あんな発明をしてしまって、世に名前が出たから。発明さえしなれば強盗は来なかったのか？ ノーマンは？ オズコープが本当に男を差し向けたのか？ 俺が信じていたノーマンは本当に善人だったのか？ ハリーは？ オクタヴィアス博士は？

何も信じられなくなったまま、俺は一人でビルの屋上からニューヨークの街並みを見つめていた。

翌日、デイリービッグルを始め、新聞各社が一面に大スクープを取り上げた。

ピーター・パーカーが産業スパイの標的に！ オズコープ社長、ノーマン・オズボーンの仕業か!?

そんな馬鹿げた内容が取り上げられ、ニューヨーク中が困惑と混乱に陥った。

そしてその日、ノーマンはピーターの前に現れることはなかった。

第十一話

そこからのことはあまり覚えていない。まるで夢でも見てるかのような感覚だった。

気がつけば家に帰っていて、気がつけば叔父の葬儀が終わっていて、気がつけば叔父の墓の前に一人で立っていた。

思い出せる限りの中で、メイおばさんはずっと言ってくれた。ピーターのせいじゃないと。叔父さんは最後まで、俺がやってきたことは間違っていないと言ってくれていたこと。そして成したことに對する大いなる責任についても、ピーターはよく理解できていると言っていたそうだ。

その言葉すらもあやふやで、まるでやが掛かっているように掠れていくような気がした。

ただ、はつきりと覚えているのは夜の家の中で、メイおばさんが一人で泣いてるところだった。どうして私を置いて逝ってしまったの。どうしてこんなことに。どうして……ああ、神様、どうして。

自分に対して、途方もない怒りがあった。メイ叔母さんは、ピーターのせいではないと慰めてくれたが、なんでこんなことになったかと問えば、それは俺が有名になってしまったから。アークリアクターなんてものを開発してしまったから……それを望むもの、奪いたいもの、独占したいものが多かれ少なかれ存在していることだ。

そいつらはどんな手段でも容赦なく使ってくる。悪党や犯罪者を使ってまた生活を脅かしてくるだろう。そして、それを呼び込んでいるのは紛れもなく俺自身だ。

叔父の墓の前で多くのことを考えていた。犯人が言っていたオズコープのこと。ノーマンが主犯だということ。そして誰かがアークリアクターの秘密を狙っているということ。

手に握っていた新聞はぐしゃぐしゃになっていたが、その一面にはオズボーン・スキャンダルと書かれた一面が大きく書き出されていた。

若き天才、その才能をみたノーマン・オズボーンは嫉妬に狂い、その青年の家を強盗に扮した企業スパイに襲わせ、彼の唯一の叔父であったベン・パーカーを殺害させた。事件後の彼は行方をくらましており、オズコープは役員会議にて、全会一致でノーマンをオズコープから追放させることを決定した。警察やCIAもノーマンの行方を追っているが未だに手がかりはない。

デイリー・ビートルを始め、ニューヨークタイムズや他の新聞社も同じようなことを書き出していた。その新聞を見てショックを受けたメイおばさんは余計に心労が酷くなり、一時は一人で立って歩くことすらできない危険な状態まで陥っていた。幸い、今は回復しておじさんの葬儀は家族のみで執り行うことになった。

叔母さんは神父の方や葬儀関係者と一緒に先に家に帰っている。叔母さんは俺が無理を言っつてすぐにセキュリティがしつかりとしたマンションに引っ越してもらったことになっている。今の家は俺の部屋を除いて空き家同然だった。

「ピーター」

さわさわと新緑の葉が風で揺れる音が聞こえる中、俺を呼ぶ声が聞こえた。振り返るとそこには、ハリーとオクタヴィアス夫妻が立っていた。

ハリーは件の記事のせいで身を隠さざるを得なくなり、しばらくの間はオクタヴィアス夫妻の元にいたらしい。格好も喪服ではなく、目立たないジャケット姿にサングラスと帽子を深く被っていた。

「ピーター……なんて言えいいのか……ずっと考えていたけど……俺は……」

「ハリー。いいんだ」

言葉に悩んでいるハリーに振り返らずに言う。ハリー自身も、あの新聞の記事や、オズコープを追放された上に行方を晦ましている父の

行動に戸惑いを隠せていないのだろう。

「何がいいんだよ、ピーター……！お前の叔父を殺したのは……」
「よせ、ハリー。ピーター、私たちの話を聞いてはくれないだろうか？」

俺の言葉に感情的になったハリーを止めながらオクタヴィアス博士がそう言うてくる。たしかにノーマンは計算高く、必要なら君たちの実験成果を売るような冷徹さを持つてはいる。だが、ハリーを気にかけていたことや、ピーターに期待していたこと。そして自分達三人でアークリアクターを作り上げたときはまるで自分のことのように喜び、二人を称賛していたのだ。オクタヴィアス博士はそれを側で見してきた。どんな取材や仕事の話がこようとも、彼はピーターと、ハリー、そしてオクタヴィアス博士の成果を褒め、そして認めていた、と。

「だから、ピーター。彼が君の成果を横取りするような矮小な男だとは私には考えられない。……君が辛いのはわかるが……だが」

どうか、ノーマンを悪だとは思わないでくれ。そう頭を下げるオクタヴィアス博士に、ハリーも妻であるロージーも言葉を無くした。

俺は叔父の墓を見つめる。

ああ、そうだ。叔父が言っていたことを思い返す。スパイダーマンとして、親愛なる隣人として胸に灯し続けた言葉であり、これからの人生を決定づける呪いの言葉を。

“大いなる力には、大いなる責任が伴う。忘れるな、ピーター”

俺はこの世界にやってきてすぐの頃に、幼い子供と親を助けた。あの時に体は動いた。正しい方向に。

俺は一輪の花を叔父の墓に手向けて、三人の方へと振り返った。

「三人とも。ついてきてくれ」



それから向かったのはパーカー家だった。叔母はすでに新しいマンションに出ていて、ここには今日は帰ってこない。俺は三人を自室に案内してから、すぐに部屋のパソコンを起動させた。

「ハリー、僕らのラボはどうなってるの？」

「それは……」

「私から説明する。あのラボはほぼ閉鎖状態だ。事件翌日に警察とオズコープの社員が来て、ラボを強制的に閉鎖したんだ」

ハリーは朝から飛び込んでくるようにやってくる誹謗中傷をしてくる市民から逃げるのに必死で、ボロボロになりながらラボにたどり着いたところでオクタヴィアスが救助したらしい。説明をしてくれた博士も朝イチでラボに入ろうとしたらすでにカードキーの暗証番号がロックされていて、ラボ内の備品を持ち出せないまま追い出されたいらしい。

「明らかに用意周到が過ぎる。ノーマンの一件でオズコープが手配をしたとしても、ここまで強引なやり方をしてくるとは……」

「俺の家も警察の捜索の手が入ってる……部屋にあった資料も全部やられてるはずだ」

あまりにも手際が良過ぎる。叔父が撃たれてから新聞社がノーマンの記事を出すまでも。まるであらかじめノーマンがその事件を起こすことを知っていたかのように……。

だが、どれを考えても推測にすぎない。ノーマンがやっていないと言う証拠もないし、新聞各社もノーマンの音声データや企業スパイを

させた指示書などの証拠を掴んでいる以上、何を信頼すればいいのかわからないのだ。その事実を困惑するハリーの顔が雄弁に物語っているように思えた。

「確かめる方法はある」

だからこそ、俺はここにきた。

「確かめるって……何をするんだよ、ピーター」

「ハリー、君に渡した『ラプラスの鍵』は肌身離さず持つてるよね？」
「あ、ああ、これか。ウエンデイの機動実験成功の時に作ったやつ」

ハリーが思い出したように首元にあるネックレスを取り出す。そこには長方形に加工したパーツが付いている。俺はハリーからそれを受け取ると精密ドライバーでパーツの一部をこじ開けた。

「なるほど、グーバーか！」

それを見た途端、オクタヴィアス博士は納得したように手を打った。ハリーはよくわからないようだったが、『ラプラスの鍵』と言ってハリーにウエンデイ起動記念に渡したこれは、もしウエンデイが悪用された場合に使う最終手段。いわゆる世界を救うための仕掛けとして用意したものだ。

「なんでこんなものを俺に預けてたんだ？」

「ウエンデイの生みの親は僕達二人だ。だからこれを使うときは君の許しも必要だったんだ」

それに立派な犯罪行為だしね、とだけ伝えてハリーは「それなら仕方ないか」と許してくれた。このグーバーは、ウエンデイが使用する衛星回線に不正にログインするためのツールだ。もちろん、このグー

バーを使用すれば不正なアクセスは相手にもバレる可能性はあるし、下手をすれば国家機密にアクセスした罪で牢屋行きとなる。

それでも、これを使えばわかることは多くある。ウエンディのサーバーは国家運営となつてはいるがその大元はオズコープのサーバーにダイレクトにつながっているし、それに依存しているはずだ。そこから逆に検索を掛ければ本当にノーマンが企業スパイの指示をしたのか、それとも何か他の陰謀があるのかがわかる。

「その役目は私に任せてもらおう」

グーバーを差し込みソフトが起動したところで、オクタヴィア博士がそう言ってきた。だが、博士は今回は完全な被害者でありとばかりだ。俺とノーマンの関係や、ウエンディのことで危険な目に遭う必要はないはずなのに。するとオクタヴィア博士は優しい笑みを浮かべてこう言った。

「君たちには世話になりっぱなしだからな。ここは大人の威厳というものを発揮させてもらおうとするよ」

それだけ言ってグーバーのハッキングを始める博士。俺とハリーはそんな博士の背中を見て、肩をすくめるとサブPCで博士がダウンロードした情報を整理する準備を始めるのだった。



「これは一体どういうつもりだ？」

話は前に戻る。

叔父が殺される前、ノーマンは仕事帰りに覆面の男に拉致されていた。目隠しの袋を外されて座っていたのはオズコープの社内であり、

目の前には取締役員の面々が座っている。

「ノーマン。君の先見の明には随分と世話にはなった。だが君の野望もここまでだ」

「さて、何を言ってるんだ？」

「役員は君の存在が疎ましくなったのだよ」

そう答える役員たちにノーマンはまだ事態が理解できていない様子だったが、彼らが何をしようとしているのかは直感的に理解はできた。

「私を追放するつもりか？私が作り上げてきた……このオズコープから!!」

「追放……とは少し違うな。君はここに囚われることになるのさ。永遠にな」

「なんだと？」

「プロジェクト・ウルトロン。これが完成すれば世界はより安定した治安維持システムによって保護され、世界秩序は達成される。アメリカ合衆国と、オズコープの力によってな」

役員の後ろから現れたのはスローカム將軍だった。彼は自信に満ちた顔で囚われているノーマンを見下ろす。

「あとは君がその事実を認めるだけだ。簡単なことだ、ウルトロンに備わる自律思考型のAIを完全な物に仕上げるだけだ」

「馬鹿な！そんなことをすれば、我々の命令ではなく、ウエンデイは自律した思考を持つ存在となる！そんな不安定な存在が兵器になるなど……!!」

「不安定ではない。それは美しく、完璧な存在だ。脅威となる者を排除し、平和をもたらす。兵が死ぬことはなくなり、テロリストがアメリカの地を踏むこともなくなるのだ」

「その最終決定は善意がある人間が行うべきだ！それがあからこそ、私は貴方にウエンディを……」

「もはやアレはウエンディではない。我々のウルトロンだよ、ノーマン」

そこで切り上げた将軍が手を挙げると、ライフルを持った兵がノーマンの両脇に立ち、彼を無理やり立たせた。

「君には二つの選択肢がある。私の要求を断りピーターの叔父を殺した犯罪者として逮捕されるか。それとも私に協力しウルトロンを完成させるかだ」

その言葉を聞いた瞬間、ノーマンの顔つきは激昂したそれに変わった。

「ピーターやハリーたちに手を出してみろ……!!ただでは済まさんぞ!!」

「ならウルトロンを仕上げることに全力を尽くすのだな」

連れて行け、と将軍の言葉と共にノーマンはオズコープの地下研究所へと運ばれてゆく。スローカム将軍は葉巻の煙をくゆらせながらニヤリと笑みを浮かべる。彼がウルトロンを完成させれば将軍の地位も確固たるものになるのだ。

「将軍、ウルトロンの公式発表は何時ごろに？」

「予定は変わらない。タイムズスクエアのフェスティバルで大々的に発表するでしょう」

第十二話

「よし、記憶中枢にアクセスできたぞ」

オクタヴィアス博士の声に全員が博士の見ているモニターに視線を向けた。グーバーはいわゆる管理者権限のようなものだ。ウエンデイのシステムにアクセスするには軍が新たに作ったファイアウォールなどは自力で突破しなければならぬ。それを難なく突破するとは、さすがは太陽を作り出した天才である。

「だが、用心しろ。私はこういったことは専門ではない。どういうトラブルが仕掛けられているのか……」

「ここまですれば皿まで飲み込むまでですよ」

「あー、どう言う意味だ？ピーター」

「毒を食うなら皿までつて意味さ、ハリー」

「……笑えないジョークだよ」

肩をすくめるハリーを他所に、オクタヴィアス博士と席を替わった俺はウエンデイの管理者権限にアクセスし、俺とハリーが作っていた頃とどれだけの違いがあるのか、その点に目を走らせたのだが……。こいつはかなり手が加えられている。

ウエンデイの記憶領域はあくまでデータバンクとして活用し、指示者あるいは命令を下した者が指定したデータを最適化し、必要な情報をデータバンクから即座に引き抜く機能だったはずだ。だが、現在は必要なデータを自律的に選定し、不要な情報は誰の指示もなく消去されていつている。

以前が単純なプロトコルだったものが、今やムービングプロトコル（変化する思考性）に変貌しているのだ。

「ウエンデイは改造されている。指向性のAIじゃなく、これじゃあ

まるで……完全なる自律思考型のAIだ」

なんと初期設定の区画まで手が加えられている。データファイルを開くと、登録されたマスコットネームには「ウエンディ」の名前はなく、別の名が刻まれていた。

新たに設定されたマスコットネームを見て、タイピングしていた俺の手は止まった。

「コードネーム……ウルトロン……そんな馬鹿な……」

なぜ、この名が付いている。

ウルトロン。それはマーベルの世界……MCUではスタークが世界平和のために作り上げようとした人工知能の名だ。ネットワーク上に存在するありとあらゆるデータと、世界的な文学や、歴史、科学知識を有した存在であり、人類を滅ぼし機械の生命体が支配する地球を実現しようとした狂氣的であり、幼さを持つスーパーヴィラン。

なんの因縁があつて、俺とハリーが作り上げたAIにその名がつけられているのか。単なる偶然には思えない。俺はどこか焦りと恐怖に突き動かされるままにウエンディのデータをさらに深く潜って調べてゆく。

ウルトロンはすでに全世界のネットワークからありとあらゆるデータを蓄積していた。そのデータは膨大であり、そこから得られる“知能”と“推測”はもはや予言じみた物を感じさせた。

それゆえに、ウルトロンはある提案をすでにしていたのだ。

「インサイト……計画……」

背中に冷たい何かが走り、ぞわりと首に鎌がかけられた気がした。インサイト計画。

MCUでは三機のヘリキャリアだったが、これはウルトロン本体へ偵察衛星ネットワークをリンクさせ、テロリストのDNAを衛星が読

み取って攻撃するシステムだ。テロリストが潜む場にグライダーに乗ったウルトロンが飛来し、ターゲットを攻撃、撃滅する。

「ピーター、これは……」

ハリーも気付いていた。これはまさにスペース・ロジック社で起こったグライダーによるスペース・スーツへの攻撃事件だ。あれほどの事故だと言うのに、デイリー・ビューグルを除く全ての新聞社がダマリを決め込んだのだ。政府や軍が関わっているとは予想していたが……あまりにも偶然が重なり過ぎている。

「ピーター？」

オクタヴィア博士が心配そうに声をかけてきたが、俺はそれどころではなかった。ウルトロン、そしてそれを使って実行されるインサイト計画。これは全て、「この世界の人間が創造した代物」なのだろうか？たしかに関連性はあるが……サム・ライミ版のスパイダーマンにはアイアンマンやキャプテン、そしてアベンジャーズなどは存在しないはずだ。

じゃあ誰が？

そんな疑問に思考が支配されていると、さっきまでウエンディのデータを映し出していたパソコンのモニターに急にノイズが走り出した。

【君がこの世界のピーター・パーカーであったか】

ノイズの奥から声が響く。ハリーとオクタヴィア博士が驚いたように身構えたが、俺はこの声に聞き覚えがあった。理性的であり、自分本位であり、なによりも人を見下したような口調と声質。

そして、この世界では「存在してはならない者」の声。

「ウルトロンシステムにアクセスするのだから、何者かと思っただが……なるほどなるほど、どうやら私の考えは間違っていないかもしれない」

ノイズが徐々に晴れ、モニターに映ったのはメガネのようなマークだった。それはナチスから生まれた組織にいた科学者のトレードマークであり、まったくの「一緒」だった。この世界には存在しない S・H・I・E・L・D の基地にあった古びたスーパーコンピュータの中にいた人物と。

モニターに映っていたのは、紛れもなくヒドラの科学者、アーニム・ゾラだった。

「お、おい、ピーター……まさかばれて……」

「いや、違う。これはウエンディを通して誰かが逆アクセスを仕掛けてきてる」

「もはや、これはウエンディなどという稚拙なものではないよ、ピーター・パーカー。そしてハリー・オズボーン。ああ、ドクター・オクタヴィアスも同席しているのかね？」

硬直する俺を他所に、ハリーとオクタヴィアス博士が推測していると、ゾラはさも当然のようにモニターの前にいる二人の存在を言い当てていた。

「……こちらの様子が見えているのか？」

「まさか。これまで積み上げてきたデータをもとに言っているのだよ。私は新たな名を得た、『ウルトロン』としてね。アレは不完全であつたが……随分と興味深い成果であつた」

ゾラは死んでいなかった。彼はネットワークという広い海の中で残骸になりながらも生きながらえていたのだ。そして彼は科学者であると言うように研究を思考の中で繰り返していたのだ。

ウルトロン、シヴィルウォー、そしてサノスに……インフィニティ・ストーン。

「頭を切り落とされても別の場所から再び生えてくる。我々が何もせぬまま滅ぶと思っていたか？あの程度のことでは我々の存在が消え去るだけでも？」

彼がインフィニティ・ストーンにアクセスできたのは全くの偶然であつた。そこまではかなり長い時間がかかったが、それが達成できたのはアベンジャーズがタイム泥棒計画を成功させたおかげだ。彼はスターク社のネットワークに潜み、そして機を待って行動に移した。ストーンが膨大なエネルギーを発し、サノスによって失われた人々の命を取り返した際の余剰エネルギーを利用した。

彼は誰もなし得なかつたことを成功させたのだ。

次元転移。別次元世界への移動を。

「この世界に来れたのは全くの偶然ではあつたが、君がスタークの真似事をしてくれたおかげで我々の野望も何歩か前進することができた。感謝するよ、ピーター・パーカー」

そして彼はさらに雌伏の時間を過ごした。新たなる新天地。技術レベルは過去に自分がいた世界とは大きく異なるが、そんなものは関係ない。失われた頭が再び生えてくる。

それはまず軍部に。

そしてオズコープの中に。

下地は整っていた。あとは時間をかけて進めるだけだと思つていたが、思わぬ展開があつた。この世界では未だに不可能だと思われていたAIが誕生したのだ。

それはゾラにとっては奇跡だつた。本来なら、彼は何も成せぬまま終わるはずだつた。新たなヒドラの頭となるストローム將軍はグリーンゴブリンによって殺害され、残された手駒であつたオズコープ

の役員も皆殺しにされ、彼の野望は潰え、そのままデータの海に消える運命だった。

それを変えたのは紛れもなく、この世界に降り立ったピーター・パーカーだった。

彼のおかげで事態は変わり、研究は飛躍し、ウルトロンが築き上げられた。そして更には無尽蔵のエネルギーを有するアークリアクターまで。

それを利用しない手はない。ゾラはすぐに行動に移した。ストローム将軍を使役し、オズコープの重役を操り、かつては叶わない夢で終わったインサイト計画を実行させるため。

「これで世界は変わる。私が……我々が夢見た理想の世界に。……ハイル、ヒドラ」

ゾラの言葉と共に、パソコンは外部からウイルスソフトを流し込まれクラッシュした。真つ暗になった画面を黙って見つめるハリーとオクタヴィアス博士。俺はあまりの出来事に状況が飲み込めなかった。

まさか、ゾラ博士がこの世界に来ていたなんて予想だにしてなかった。このままではウルトロンが使われたインサイト計画が発動され……ニューヨークだけじゃない。全世界からヒドラに不要とされた人々が殺害される。

それも、殺害するのは俺とハリーが作り上げたAIだ。

「止めないと」

重苦しい空気の中、俺は声を上げた。ハリーとオクタヴィアス博士は黙ったままだが、俺はもう覚悟を決めていた。こうなってしまうのは俺の発明のせいでもあるのだから。

「無茶だ！ピーター！」

「相手は軍にオズコープだ。我々の力では何もできない……」

ハリーとオクタヴィアス博士はそう言った。たしかにただの科学者風情では軍と企業を相手取るなんてことはできない。裁判を起すにしろ、何をするにしろ時間が足りなさ過ぎた。

「ただ、僕は単なる科学者じゃない」

俺は飛び上がって天井に張り付いた。ハリーは目を見開き、オクタヴィアス博士と妻のロージーは信じられない物を見るような顔をしないで口をあんぐりと開けていた。

「ハリー、この力を正しいことに使うときだ」

その責任と義務がある。

なぜならそれは、俺がピーター・パーカーであり、スパイダーマンなのだから。

第十三話

「作戦はこうだ」

出前で頼んだ中華料理の空き箱を乱雑に退かせ、ウエンデイへのアクセスがシャットダウンする前に保存していたオズコープ本社の見取り図を広げながらオクタヴィアス博士とハリー、ロージーに説明を始めた。

ウエンデイ……ウルトロンはオズコープ社内の地下15階の隔離エリアに本体が置かれている。ノーマンは同階に閉じ込められており、今もウルトロンを完全なる自律AIにするように改造を強要されていることも分かった。

今回の作戦の目標は、1に人質となったノーマン・オズボーンの救出。2にゾラ博士によって改造されたウルトロンの中枢ユニットを分離、それを奪還することだ。中枢ユニットはウルトロンのコア部にある三枚のパネルで構成されており、ガードシステムを解除すれば簡単に取り出せる設計は残っているはずだ。

オクタヴィアス博士とハリーと三人でガードシステムを無効化する抗ウイルスソフトは作ったものの、問題はどうかやってオズコープの中に入り込むか。

対策は案外簡単に思いついた。

「はあい、ピーター。オクタヴィアス博士も。何かあった？」

「グウエン。頼みがある」

グウエン・ステイシーは今専攻学科のためにオズコープにインターシップをしている。オクタヴィアス博士や俺とも面識がある彼女だ。巻き込むのは申し訳ないが、やることは簡単だ。中に入り、一般に解放されているパソコンのUSBに俺たちが使ったグーバーを挿すだけ。それだけで数分間はオズコープ社内のあらゆる監視システ

ムが凍結する。

その間に忍び込んで……というのが囷だ。

その役目はオクタヴィアス博士とハリーがやってくれる。正面からオズコープに二人が乗り込めばオズコープの社員や、ヒドラに属する構成員も対処する羽目になる。

その間に俺が通気口の内部に侵入。地下へ繋がるシャフトを通って一気に地下へと潜入する作戦だ。

「すまない、グウエン。君にこんなことを……」

「いいのよ、ピーター。それに……誰かとそういうのをするのってなんだかワクワクするしね」

そう言っただけでウイंकをしてくれたグウエンはやっぱりいい女の子だと思ふ。不幸体質持ちのピーターより別の人と仲良くなつて是非とも幸せになつてほしいものだ。

さて、俺のスーパーパワーを見たオクタヴィアス夫妻の反応はと言うと、意外にもすぐに冷静になつていた。なんでもアークリアクターの開発などで年相応には見えない姿を感じており、そんなピーターがスーパーパワーを持っていると言つても、「あ、はい」という感想しか思いつかなかつたらしい。

それよりも二人はすぐに、その力をどうやって有効利用するか議論をし始めた。てつきり質問攻めに合うだろうと、「ピーターのパワーバレた時の言い訳記録」を用意していたハリーは肩透かしを食らつたような表情をしていた。

「ピーターになぜ能力が備わつたのかは我々じゃ説明はできない。だが、その力の使い方を考えることはできる。伸縮素材は昔、ロージーが研究していたんだ」

「任せて。空気抵抗が少ない最高のものを作るわ」

そう言つて張り切つて家の倉庫から伸縮素材を引つ張り出してき

たロージーが型紙を元にスーツを作り始めてゆく。伸縮性に優れた布の研究。その論文発表会でロージーと出会ったんだと馴れ初め話をするオクタヴィアス博士に、彼女もまんざらじゃない笑顔を浮かべていた。居合わせたグウェンも「博士ったら同じ話ばかりするのよ」と呆れた顔をしていた。

「コクピットモジュールを応用してカメラアイを作った。サーマルゴーグル、暗視モード、望遠、なんでもござれだ」

ハリーは家にある機材で特徴的な視界保護用のレンズに映像投影の技術や、この時代ではまだ出来ていないはずのオートフォーカス機能、小型カメラと連動させたズーム機能やその他諸々の機能を作り上げてくれた。ガラクタが多いこの家でそんなものを作り上げるハリーもまた天才の領域に足を踏み入れつつあるのかもしれない。

「インナーは私が研究した素材だ。粘り強く、防弾と防爆に強い。コストが高くて軍には採用されなかったがね」

パンつと素材を広げるオクタヴィアス博士。その生地の上にロージーが手がけたスーツの原型が覆いかぶさる。こもった空気は吐き出し、外気は取り入れない。これなら冬の寒さに負けることはない。ただし、夏は相応に暑いだとか。

「デザインは決めてるのか？」

ハリーがそう問いかけてくる。俺は机の中に仕舞っていたスケッチブックを取り出してハリーに渡した。何ページかチェックして、ハリーはスケッチブックを閉じて眉を上げる。

「ピーターにしては、いいセンスじゃないか？」

そう言ってくれた親友と、俺は拳を静かに合わせる。



三人が作ってくれたスーツを身にまとい、夜のダウンタウンを舞う。

THWIP!!!

手首から放たれた蜘蛛の糸がビルの壁に張り付き、グンと体を加速させてゆく。スイングは最高だ。視界も良好で、空気の抵抗感も全くない。

赤と青のスーツはこの体にフィットし、全く違和感を感じさせない。今ならどんな高い場所も飛べるような気がした。

「WOOOOOOOOOOOOO!!!」

高さ30階以上のビルから身を投げ出す。ニューヨークの摩天楼が煌めき、輝いていた。その中をスイングで駆ける。飛んで、壁を走り、手で障害物を乗り越え、そしてまた飛ぶ。

宙に舞った体はふわりと滞空して、落ちる。

THWIP!!!

糸のしなるまま前へ。上へ。そして空へ。

蜘蛛の巣のデザインをあしらったスーツを着こなした俺は、そのままの跳躍でエンパイアステートビルの天辺まで舞い上がった。

ニューヨークの街を見下ろせる摩天楼の頂に立つ。

捧げられた力。

定められた使命。

俺は、スパイダーマンだ。

第十四話

デーモンツ!! (SpyderMan)

※東映版スパイダーマツ アイキヤツチ

ニューヨーク、オズコープ本社。

「こちらタスク1、配置についたわ」

作戦は朝8時から開始された。まず作戦の起点となるグウエンがオズコープ本社内に入館。インターンシップで彼女は公式のオズコープIDカードを持っており、始業前から定時の間までは社内へ自由に行き来できる。

今回の作戦ではハリーお手製の小型インカムをそれぞれ装着しており、グウエンは見た目からしても普段使い用のデザインとなっているため入口の警備員にも怪しまれずに入ることができた。

そのまま一般用に開放されているデスクトップパソコンの元へと向かった彼女は手早くポーチからグーバーを取り出してUSBの差し込み口へと差し込む。

「おはよう、何をしてるんだい？ステイシーくん」

ハッとグウエンが振り返るとそこには彼女の担当部署の上司が立っていた。まずい、グウエンは視線を彷徨わせずに挨拶してきた上司に笑顔で挨拶を交わした。

「いえ、一般用に開放されているPCについていくつか疑問がありま

して」

「疑問？そのPCはオズコープ社の内部案内に対応するためのものだが？」

「そうーそれが問題なんです！ネットワークにアクセスしている以上、何かしらの危険な点は留意しておかないと！」

上司の視界からグーバーを隠すようにグウエンは身振り手振りで話題をスラスラと話していくが、その様子に上司は眉を顰めた。そもそも、上司が言うようにこのPCは単にオズコープ社内の部署案内などでしか使えない閉鎖的なパソコンでしかない。たしかに彼女の言うようにネットワークには繋がっているが、それはあくまでオズコープ社内に限定されたネットワークに過ぎない。外部からアクセスするなど、特殊なソフトなどを持ち要らなければできないはずだ。

そして、その上司の懸念は的中していた。グウエンが差し込んだグーバーは組み込まれたプログラムに従って内部ネットワークへと割り込み、防犯用のシステムの書き換えをしている真っ最中だ。こんなところで上司にバレて抜かれてもすれば防犯システムの書き換えはできないし、グウエンは捕まってインターンシップどころか学校からも退学を命じられるかもしれない。

チラチラとデスクトップPCを見る上司に、グウエンはえへへ、と誤魔化すように笑った。

「それで、君はこのPCで何を調べていたんだ？」

少し感情がこもった顔で上司はグウエンの肩を掴んで退かしてパソコンを見た。だがデスクトップに映るのはノーマン・オズボーンが社内理念やオズコープの存在意義、社会貢献度について語るばかりの動画だけだ。他に怪しいところはない。上司は画面からグウエンの顔を見ると、彼女は何かわからないと言った風な顔で上司に向かって首を傾げた。

「ごほん、わかった。ステイシーくんの指摘通り、法務部に一般開放用のPCにも監視をつけるように提案しておこう」

では、始業に遅れないようにとだけ言って上司はそそくさとオフィスへと向かっていく。その後ろ姿を手を振りながら見送るグウエン。もう片方の手には監視システムを書き換え終えたグーバーが握られていた。

「こちらタスク1。任務完了」

それだけ言うと、グウエンは予定通りに普段の仕事……には戻らず、この後の騒動を予想して一人、女子トイレへと歩いてゆくのだった。



「これで第一段階はクリアだな」

グウエンからの連絡を受けて外で待機しているオクタヴィアス博士は静かに呟いた。隣にいるハリーはツバが深い帽子とサングラスをしていて、オクタヴィアス博士も普段のカジュアルな格好ではなくラフなトレーナーに大きなトレンチコートを身につけていた。

「博士、ハリー。くれぐれも気をつけて」

俺は博士たちが作ってくれたスーツを身にまとって壁に張り付いたまま二人を見下ろして言葉をかける。ハリーは得意げに腰の改造ベルトにぶら下げたガジェット数点を見せて、オクタヴィアス博士も特徴的な丸のサングラス越しにニヤリと笑みを浮かべた。

「なに、紳士的に話をしてくるだけさ」

そう言つて、二人は路地から真つ直ぐとオズコープ本社の正面玄関へと歩いてゆく。普段はキーがないと回転しないドアを何食わぬ顔で突破した二人に、警備をしていた者たちがざわつきながら近づいた。

「おい、止まれ!……オクタヴィアス博士?」

「私も有名になつたな?なあ、ハリー」

「これからもっと有名になりますよ」

軽口を叩き合う二人。ハリーと呼ばれて警備員が帽子とサンングラスをつけるハリーを見て、すぐに肩に備わる無線機で通信しようとした瞬間だった。カラン、と警備員たちの足元に金色と淡いグリーンの発色が特徴的なボールが転がってきた。それは少しの間、中心にある大きなボタンが明滅を繰り返したのち、想像絶する音と閃光とともに炸裂したのだ。

「デイリービューグルは嫌いだが、彼らのネーミングセンスは気に入った。私はドクター・オクトパスと名乗ることにしようか!!」

元はグリーンゴブリンの手榴弾になるはずだった爆弾をスタングレネードなどにハリーが改造しており、その閃光に目をくらませている面々の前でオクタヴィアス博士の背後から四つの作業アームが姿を現した。前髪の生え際に貼り付けたチップから博士の脳波を感知して動くアームは博士の命令に従って取り囲もうとしていた警備員たちを薙ぎ倒してゆく。収納性の影響から攻撃範囲は限られるが、その動きは元の神経操作のアームに引けを取らない。

ハリーもすぐに駆け出して警備員たちが出てくる扉の前あたりにベルトに備わるボール型のガジェットを投げてゆく。

投げ込まれたボールは地面に当たった衝撃で広がり、バウンドすることなくその場に留まると、走つてそのガジェット付近に来た警備員たちの動きを感知し、半径数メートルに電撃を放った。

電撃トラップに捕まりなすすべなく倒れてゆく敵を見て、ハリーはガッツポーズをとる。

「見たか！父さんと僕を蔑めようとした仕返しだ!!」

「あー、ハリー。そういうのはフラグと言つてな?」

息巻くハリーの声にオクタヴィアスがそう言うのと、二人の前にはさらに数を増やした警備員たちが殺到してくる。

「言わなきゃよかったかな」

そう肩をすくめてボール型のガジェットを手に取るハリーに、オクタヴィアスもため息をついて再び4本の作業アームを構えるのだった。



オズコープ本社の正面入り口で少し早めのパレードが始まっている中、一人指定された通気口の入り口に入った俺は、そのまま一直線に地下へとつながるダクトの中を進んでゆく。

《ハイ、ピーター。ここからは私が案内するわ》

薄型のインカムからオクタヴィアスの家から遠隔で支援しているロージの通信が届く。彼女の指示に従って右へ左へ迷宮のようなダクトを進むと問題の箇所へと到着した。

「ロージ、これ見えてる?」

《あらやだ、予想より大きな排気ファンね》

地下の空気をかき出すために設置されている三つの排気ファンだ

が結構な大きさだった。ファンがある場所は俺一人が優に立てるくらいのは広さだ。問題はこの高速で回っている鉄製のファンをどうやって止めるかだが……。

「やあ、ピーター・パーカー」

根本を糸で止めようかと身構えたところでダクト内に声が響く。間違いなくゾラ博士の声だった。

「ゾラ博士か！悪いけどウルトロンを外に出すわけには行かない!!」
「それは出来ない相談だ。だからこそ、君にはここで死んでもらう」

空気が抜ける音と共に閉じていたダクトの幾つかが開くと、そこから数本の足に支えられた武装したドローンが姿を現した。これは、遠隔操作を目的にした制御ユニットに武装させたものか。

「ウエンディに武装をさせるなんて、親としては認められないな！」

「残念ながらもはやウエンディはいない。ウルトロンだよ、少年」

わさわさと虫のように壁を這い回っては背負っているマシンガンでこちらを攻撃してくるドローンたち。スパイダーセンスに従って攻撃を躲す。THWIP!!とドローンを糸で捕まえ振り回して高速回転するファンへと叩きつけて数を減らしていくと、ゾラ博士の苛立ったような声がダクト内に響いた。

「君のような存在はどこまでも我々の邪魔をしてくる。だから完全に抹消させてもらおうよ」

その言葉を皮切りに、回転していたファンがさらに速度を早めた。咄嗟にウェブを壁に放って踏ん張るが、吸い込まれたドローンがファンに当たると細切れになって後ろへと吹き飛んでいった。

「あんなのに当たったら今夜の晩御飯はスパイデイのミートローフになっちゃおうよー!」

《さすがに私も蜘蛛男のミンチは扱ったことはないわ》

「ロージー!! ジョークを上回るボケを返さないでもらえる!？」

あ、まずい。踏ん張っていた足が離れた!? ウェブを掴んだまま宙吊りになるが、足先が徐々にファンへと近づいて行くのがわかる。これじゃほんとにミンチになるぞ!? そう思った瞬間、ファンは突如として止まった。

《ピーター、聞こえる? 今ダクトの指令系統に割り込んだわ!》

「ワアオ! グウエン! 愛してる!!」

《あら、告白? もう少しロマンチックなところでリテイクをお願いできてる?》

グウエンのナイスアシストで粉微塵になるのは防がれた。停止したファンの間を通って先に進もうと思った矢先、スパイダーセンサーが何かを感じとる。ダクトに違和感を感じた。

「グウエン、ファンを逆方向に高速回転させられる?」

《え、できるけれど……》

「すぐ頼む!!」

俺の第六感に従うまま、グウエンがファンを反対方向へ回転させるプログラムを組み込むが、最後に彼女はこう付け加えた。

《あー、ピーター? これはあまりおすすめでできないけど》

「ゾラ博士がダクトのシャッターを閉めればおしまいだ! これしかない!」

《どうなっても知らないわよ?》

え、それってどういう……と言いかけたところでファンは要望通り逆方向に高速回転し始めた。今まで地下から空気を吸い上げていたファンが逆転したと言うことは、外気を地下へ一気に送り込む気流が発生する。俺は完全にその空圧に飲まれた。

まさに嵐のような有様だった。

「あーっ!!あーっ!!アアアアアアア!!いだだだだ!!」

ゾラが遠隔でダクトのシャッターを閉める前に俺の体は空気に運ばれて地下へと持っていかれる。体のあちこちをダクト内にぶつけまくりながら。

凄まじい打撃音と衝撃を味わいながら長い地下へのダクトを進むと、体がガアンと地下の通気口を突き破って、勢いそのまま部屋の壁へと叩きつけられる。顔からいったせいで意識が飛ぶかと思った。ずるずると壁からずり落ちて床に崩れ落ちると、驚いた顔をしたノーマンと目があった。

「あー、ノーマンさん……助けにきましたよ……ゴフツ」

「君の方が助けがいきそうなんだが!?!」

紆余曲折あったが、なんとか俺はオズコープの地下へと潜入するこ
とに成功したのだった。

第十五話

「こつちだ、ピーター」

ノーマンが囚われていた牢獄から脱出した俺は、彼の案内のもとオズコープの地下施設にあるウエンディの制御ユニットがある隔壁に向かって進んでいた。牢獄に着いた時点で俺はマスクを外してノーマンに正体を明かした。というか、隠す以前にこの格好をしてスパイダーマンとして活動するのは今回が初めてなので隠していた訳でもない。

オクタヴィアス夫妻やハリー、ノーマン、そしてグウエン。今のところ、この五人がスパイダーマンの正体を知る人物であり、巻き込んだ以上、この人たちに正体を隠すつもりはなかった。

ノーマンは終始驚いていた様子だが、スパイダーマンスーツがハリーとオクタヴィアス夫妻のお手製だと言うと何故か納得してくれた。スパイダーマンの能力についてはノーマンは深く言及せず、とりあえずここから出たら色々話を聞かせてほしいらしい。

地下施設の通路に出て、監視カメラが停止している間にウエンディの隔壁エリアへと足を進めてゆく。あと数ブロック先というところで、ノーマンが急に足を止めた。

「ピーター……私は君に謝らなければならない。私が愚かだった。あんな者たちに君たちの未来ある実績を売り捌いてしまった……」

ウエンディを取り戻す前に話をしておきたかったとノーマンは言う。オズコープの役員が、ウエンディを購入した軍部に掌握されていたこと。彼らが産業スパイに見立てた刺客で俺に危害を及ぼしたこと。そして叔父を殺害されたことにノーマンはひどくショックを受けていた様子で、打ちひしがれたような表情をしていた。

「私は戻ったとしても、オズコープを退くつもりだ。今回の件の責任も私が負う。君の叔父を奪ったのは……私で……」

「オズボーンさん」

謝罪と責任を取ろうとするノーマンを俺はマスク越しに言葉を遮る。報道やオズコープからの仕打ちでノーマンも精神的に参っているように思えた。なにより、彼が全部の悪の責任を取る必要はない。そんなことを求めるために俺はこの場に来ていないのだから。

「……貴方がしたことは間違いじゃありませんでした。現に貴方の決断で救われた人々はいます。それに嘘偽りなんてありはしません」

「だが、ピーター……科学者には責任というものがあるんだ」

「何を言ってるんですか。一度の失敗程度で何もかも諦めていたら何もできませんよ。僕とハリーとオクタヴィアス博士なんて失敗の連続でした。一番酷かったのはトリチウムのエネルギー抽出式を間違えてラボ内に特大のカーブラックホールが爆誕しようとした瞬間でしたね」

あの時はマジで大変だったと今になって振り返る。ノリと勢いでテスト品を作って、とりあえずテストだ！とノリノリで三人で起動実験をしたら、トリチウムの抽出エネルギー量のキャパが超えており、ハリーが咄嗟に非常放電ユニットを作動させていなかったら今頃ニューヨークの街はグラウンドゼロとなっていたに違いない。

そう過去の過ちをしみじみと振り返ると、話を聞いていたノーマンが少し引いていた。ゴホン、と気を取り直してノーマンに改めて向き直る。

「オズボーンさん。叔父は最後まで僕らの成果を誇りに思ってくれていました。もちろん、僕らを支えてくれたオズボーンさんも。メイおばさんも、そして僕も、ハリーもオクタヴィアス博士も、みんな貴方

に怒っても、恨んでもいないんです」

なにより、オクタヴィアス夫妻もハリーも、一切ノーマンを疑ったりはしなかった。行方知らずになったときも、ハリーは純粹に心配をしていたし、オズコープに囚われていることを知った時のオクタヴィアス博士は明確な怒りに拳を震わせていた。誰も彼を裏切り者なんて呼ばなかったし、囚われている彼の救出が今回の潜入の最大目標だったのだ。

「……すまない、ピーター」

そう呟いて肩を落とすノーマンに、俺は声をかけた。

「それにオズコープを辞めたなら都合がよかった」

「……どういう意味だ？」

「僕らが立ち上げた会社の代表取締役になってくださいよ。僕もハリーもオクタヴィアス博士も社長なんて肩書きとか似合いませんし」

実はこれ、アークリアクターの利権のために会社を立ち上げた際、ハリーが言い出したことだ。すでにオズコープの取締役をしているので望み薄だとは思っていたが、この中で社長できる人って挙手を求めたら誰も手が上がらなかったのだ。「じゃあチャンスがあれば言うてみよう」ということで話を進めていたのだ。

オズコープの利益率とは雲泥の差はあるものの、アークリアクターと俺とハリーが開発したモジュールシステムの特許があるのと、オクタヴィアス博士の作業用アームをベースに完全メタル製の義手プロジェクトもあるので食いつばぐれることはあるまい。

「……本気か？」

「立ち上げた会社はオズボーンさんの力あってこそですよ？当然じゃないですか。あ、オクタヴィアス博士は技術顧問、ハリーは設計部の

部長、僕は技術スポンサーのポジション希望です」

取締役だとか役員とかじゃなくて、「とりあえず好きな設計と研究させてくれ。その分利益周りの管理は任せます」なスタイルを地でゆく三人だ。それを聞いたノーマンはおかしそうに笑ってからいいだろうとニヤリと笑みを浮かべる。

「これは隠居なんて出来やしないな」

「天下のノーマン・オズボーンが耄碌するのはまだまだ早いってみんなに見せつけてやりましょう」

「どうせならやられたことを100倍返しでもしてやるとしよう」

そうやってウイレム・デフォーの独特な笑みを深める顔を見て、あつこれはぶちのぎれなノーマン・オズボーンだわと察した。いたい僕らの会社で何を仕出かすつもりなのか……ニューヨークが地図から消えるような危険な真似は避けてほしいものだ。

さて、ノーマンとの話し合いも終わりウエンディの本体が格納されている隔壁エリアの入り口へと辿り着く。パスコードなんて通用しないので、壁に備わるセキュリティパネルの基盤をメリツと剥がして配線をいじり、ハリーとオクタヴィアス博士手製のハッキング装置を取り付ける。メカの天才とソフトの天才が手を組むと碌でもないことになるといい例だ。

ガジェットを見たノーマンが「息子の将来が少し心配になってきたよ」と呟いたけどあえて聞かなかつたふりをした。親友の父の嘆きを背中で受け止める男、スパイダーマツ。ふざけている内にセキュリティのハッキングが完了して隔壁のドアが開いた。

「ようこそ、スパイダーマン」

部屋に入るや否や、ドクターゾラの声が部屋中に響き渡る。ウエンディことウルトロンの本体である演算ユニットは巨大で、部屋の中央

に鎮座しているのが見えた。

「ゾラ！ 僕らの作ったウエンディを返してもらおうか」

「それは困るな……と言いたいところだが、別に構わんよ」

あとは演算ユニットにグーバーを差し込み、中枢にあるコアを抜けば任務は完了なのだが、あっさりと認めたゾラの言葉がやけに耳障りだった。

「なんだと？」

「私が何の策もなく君たちに目的を露呈すると思うかな？」

その問いかけに応えるよう、金属の軋む音と何かが歪む音が部屋に響く。ウルトロンの演算ユニットが変形し、内側から突き破られると金属製の腕が演算ユニットから突き出された。バリバリと音を上げて演算ユニットを破壊して現れたのは、金属骨格と防御用装甲に覆われた人型のロボットだった。

その姿には見覚えがあった。スペース・ロジック社で開発されていたアーマー型のロボットだ。だが随分とモデルがバージョンアップされているようで、剥き出しだった内部骨格は装甲に覆われており、赤い眼光をギラギラさせながらうっとりとした自らの四肢を眺めて、そのロボットは音声を発した。

『もう繭は必要ない。電子の海となった私はようやく再び肉体を手に入れたのだ』

ウエンディという繭を破壊し尽くし、エネルギーを吸い尽くして現れたロボット。ゾラの電子精神と脅威的な演算ユニット、AIを搭載したそれはクツクツと笑って俺を見下ろす。

『感謝するよ、ノーマン。君が必死に時間稼ぎをしてくれたおかげで

私はこの肉体を手にすることができたのだから』

ノーマンはウエンディを完全なる自立型に改造することをスロークム将軍に強要されていたが、そんなもの元々必要なかった。

完全なる自律思考型のAIはゾラ自身になる。ノーマンをこきおろしていい気になるオズコープと役員だとか、思惑通りに進んでいると勘違いしているスロークムの思考は実に愉快だったとゾラの意識が乗り移ったロボットは話した。

『さて、わたしには力のお披露目があるのでね。ここで失礼させてもらう』

『待て！ゾラ!!』

『私はゾラではない。私がウルトロンだ』

ウェブを出して飛び上がった瞬間、凄まじい衝撃波を体に受けて吹き飛ばされる。

まさかと思つて見上げると、そこには手をかざしているウルトロンの姿があった。野郎、アイアンマンみたいな武器を持ってやがった。リアクターの出力を攻撃に転用するとは予想外だ。

俺を吹き飛ばして鼻で笑ったウルトロンは、グライダーと同じ型の飛行ユニットに乗って地下から地上に向けて飛び立ってゆく。まだ独力で飛ぶほどの機能はないようだが、武装したグライダーに乗っているだけでも十分に脅威となる。

去り際に開いているシャフトへボール型の爆弾を投げ込み、ご丁寧に地上につながるトンネルまで封鎖していった。

「とにかくここから出ない」と

ノーマンを連れて早くウルトロンを追わなければ。ノーマンいわく地上へ繋がる直通のエレベーターがあるらしいが、待ち伏せされていたらひとたまりもない。地上への無線も地下が深すぎて連絡が途

絶えている。

どうするか、と二人で考えているとTHWIP!!と糸が放たれる音と共に近くの壁に誰かが張り付いた。張り付いた? んなアホな。別のスパイダーマンがいるとでもいうのか? そんな馬鹿馬鹿しいことが一瞬脳裏によぎって壁の方へ目を向ける。

思わず唾然とした。

「手伝おうか?」

そこに“立っていた”のは白を基調にした全身タイツを身に纏った人物。俺のつけるマスクと同じようなデザインのを被り、フードしている特徴的なスーツ。ノーマンは壁に立っている相手に指差しながら聞いてきた。

「あー、ピーター? 彼……いや、彼女も知り合いか?」

ノーマンの反応に、思わず顔を覆う。するりと側転するように壁から地面に音もなく着地する彼女の姿を俺は知っていた。スパイダーマンという作品を知っている以上、彼女の存在が“その可能性”を秘めているのはわかっていたけれど……。

「おいおいマジかよ、冗談だろう?……グウエン?」

スパイダーグウエン。白きコスチュームの彼女が、なぜか俺がスパイダーマンになった世界に現れた。

第十六話

これまでのあらすじ。この世界でスパイダーマンになったと思ったらスパイダーグウェンがいました。あらすじ終わり。

「正解だけどほんとはスパイダーウーマンよ。ハロー、オズボーンさん」

現実逃避してる場合じゃねえ!! スーパーパワーを持った俺を見ても何とか冷静さを保っていたノーマンさんが今に白目剥いて気絶しそうになってるし!! ずるいぞ! 俺だって気絶したい!! いや、そんな冗談を言ってる場合じゃないんだって!!

「なななななで、君……どうして!?!」

「狼狽えるピーターって珍しいって思ったけど、割と予想外のことに見舞われると挙動不審になるのよね」

マスクを脱ぐとほんとにグウェンだった。ほげえー!?! スパイダーグウェンの世界では、彼女の父は助かるが、俺がマッドな実験の結果リザードになる運命にあるはずだったのに、なんでかこの世界にはスパイダー人間が二人もいるのだ。これは俺の死亡フラグ立った? というかウルترونことMCUのゾラ博士もいるし、もうこれわっかねえな。

「だ、だから君……なんで?!? どうして!?!」

とりあえず説明を求めると、彼女はブロンドの髪を少しだけ指先で払ってから得意気に語り始めた。



OK。なら、最初から説明してあげる。

私の名はグウェン・ステイシー。遺伝子操作された蜘蛛に噛まれてスパイダーパワーを手に入れた、スパイダーウーマン。

ただ、私は本来はこんな力は手入れていない。

だって私は……死んだのだから。愛する彼、ピーター・パーカーの目の前で。

彼には私を救えなかったという大きな心の傷を与えてしまったと思う。けど、彼に対して恨みも何も無い。彼は精一杯にやった。その結果でああなってしまったなら仕方ないと思えた。

けど、私の人生も彼の人生のように奇想天外だった。

私がこの世界に生まれ変わったとわかったのはハイスクールに入った頃。

警察官だったパパの運転するパトカーがピーターを跳ねたときだった。ピンつと何かの糸が張られたように私は前世……というより、別の世界で一生を終えたグウェン・ステイシーの記憶を思い出した。

それから、まあ記憶の混乱とか、色々とあつたけれど、なんとか取り直した私はこれから進むべき道を考えた。

ピーターと関わらずに生きていくという選択肢もあるだろうと思つた。

この世界にピーター・パーカーは存在する。けれど、彼が私が愛した彼である保証はない。たぶん、全くの別人なんだと思う。だから気にしないで、私は彼と関わらない新たな人生を歩むべきなのだろうか。

だけど、答えは決まっていた。

私はピーター・パーカーに傷を負わせない。癒えない心のトラウマなんて与えない。今度こそ、私がスパイダーマンとして、ピーター・

パーカーとしての彼を支える。

そう決意してから行動に移すのは早かった。

まず、この世界にいるピーター・パーカーの情報集めだ。彼を轢いてしまった父は気の毒ではあるが、彼との縁を繋いでくれたのだから感謝している。入院している病院を聞き、挨拶に向いたのだが彼は退院しており、残っていたのは荷物を引き取りに来ていた彼の叔父だけだった。

なんとか話をして彼の住所や学校を教えてもらい、そこからは怪しさと引け目もあったけど尾行を開始した。ピーターがオズコープのラボに出入りしていることを知って私もインターンシップでオズコープを希望。彼の学校がコロンビア大学の研究見学をすると聞いて、知り合いの研究員に無理を言って潜り込んだ。

その時、私の運命は大きく変わった。

なんと私は、ピーターを噛んだ同じ蜘蛛に偶然噛まれ、彼と同じスーパーパワーを手に入れてしまったのだ。

全く予想していなかった展開にパニックになっていたけれど、前世での記憶が大いに役立った。ピーターのスパイダーマンスーツは直したこともあるし、間近で見たりもしていたので複製するのに苦労はなかった。

糸を出すガジェットの作り方は知らなかったので心配だったが、この世界のスパイダーマンは手首から糸を自家製で出せるのでラッキーだった。

それから、私は一人スパイダーウーマンとして活動を開始して、未だに現れないスパイダーマンを待ち続けて……いや、待つてはいないか。オクタヴィアス博士にお願いしてピーターと会って。

そこからは、まあみんなもよく知ってるよね？



「そんな感じ」

グウエンの話を聞き終えて思わず頭を抱えた。どうなってるんだこの世界はよおっ!!不幸フラグのグウエンは実は転生者で別世界のグウエンで、しかもスパイダーウーマン!?ウルトロンはいるし、メガネの博士はいるし!!一体全体どうなってるわけなんだ!?

「あー、スパイダーウーマン……?」

「あ、グウエンで大丈夫です。オズボーンさん」

「あ、ああ……じゃあ、グウエン?君は前世の記憶があるのだから?」

「あー、正確には別次元の私の記憶ですね」

「アインシュタインの相対性理論の?」

「さすがオズボーンさん」

「まさか……パラレルワールドが実在するとは……」

そこの二人、俺が頭を抱えてのたうち回っている内に話を進めるんじゃないよおっ!!しかし彼女の話を聞く限り、このスパイダーグウエンの出自もかなり特殊だ。

俺は前世となる人生ではスパイダーマンファンで、彼女は混じりつけないのグウエン・ステイシーの生まれ変わり……というべきなのか?生まれ直しと言っても過言ではない。

MCUの世界とも因縁がある以上、この世界はすでにサムライミ版のスパイダーマンから離れつつある世界線となっているのだろうか?俺が何もしなかった場合……いや、俺がピーターの意識に入り込まなかったら、おそらくこの世界は映画と同じ運命を辿っていたのだろうか。

グウエンは前世に気づかず。オズボーンはグリーンゴブリンとなり、オズコープの重役や將軍は死亡し、ゾラ博士は人知れずデータの海に消えてゆく。オクタヴィアス博士はトリチウムの実験に失敗した怪物となり、ハリーは父の復讐のためにニューゴブリンとなる。

そんな世界になっていたのかもしれない。

そう考えれば、これでよかったのでは?と思う。ポジティブに考え

れば、不幸と悲しみの運命にあつた彼らの道を俺は変えた。変えてしまったのだ。叔父は救えなかつたが、彼らは間違ひなく正しい道を進んでいる。そうしたのは紛れもなく俺だ。

思い返す。大いなる力とは俺がこの世界に來た時点で授けられていたのかも知れない。だからこそ、その大いなる責任を背負い、果たさなければならぬと。

「それよりもピーター、ウルトロンを止めないと。話はその後で」

グウエンの言葉で俺はぐるぐると回っていた思考から脱した。彼女はすでにオズコープ地下施設の見取り図を用意していた。遠回りになるが、ダクトを通れば地下から地上まで上がって行ける。

「僕より君のほうが頼りになるかも」

「あら、参考にしたのは貴方よ？スパイダーマン先生」

そう言つて肩をすくめるグウエン。頼もしい限りだな、と返しながらダクトがある通路までスイングしようとした時だった。

「二人とも、待つてくれ。ピーター、私についてきてくれないか」

ノーマンがウルトロンを追おうとする俺たちに待ったをかけた。グウエンと顔を見合わせて、先に進んでゆくノーマンの後に続く。いくつかの角を曲がつてたどり着いたのは地下にあるラボの入り口だった。

「マスターコードが変わつていなければいいが……」

そう呟きながら扉横のキーパネルを操作するノーマン。それを見かねたのか、グウエンがぐつと足に力を込めると、そのまま駆け出してノーマンが開こうとしていた扉を蹴りでこじ開けた。ドガン、と凄

まじい音と共に吹き飛んだ扉と、手を払うグウエンをまじまじと見るノーマンに、グウエンは手をひらひらさせて答えた。

「時短になるでしょ？」

「……まあ、鍵いらずで便利だな」

直すことを考えなければ、と付け加えてノーマンは部屋に入る。マスク越しにウインクしたグウエンを見て、彼女がマジでスパイダーパワーを有していることを再認識した。ノーマンに続いて部屋に入る。そこには彼の集大成でもあり、彼自身の代名詞とも言える代物が鎮座していた。

「これは……」

目の前にあったのはグライダーと、グリーンゴブリンが身につけていた装甲付きのウイングスーツだった。まだ緑色に塗られていない黒と白の無骨なカラーリングであるが、その完成度は非常に高かった。

「ウエンデイの取引でこのプロジェクトは凍結となったんだが……私の一押しでな。改良を加えていたんだ」

三重構造体で軽くて強度のいい素材を使っており、武器はリストブレード。グライダーにも武装は備わっているが、あくまで今回はウルترونを止めるためだ。全ての弾倉は相手の動きを封じる電撃性のある付着弾に変わっていた。

「オクタヴィアス博士とハリーにだけいい格好はさせられないからな」

それに、と彼は付け加えパソコンを操作し始める。すると今まで鎮

座していたグライダーが独りで動き始めた。その様子に驚いているとノーマンは悪さをした子供のように微笑みながら言った。

「私が何もせずに奴らに従っていたと思うか？」

エンターキーを押すと、グライダーはふわりと浮き上がり安定した動きを発揮する。その動きはまさに、俺とハリーが初めてウエンディをグライダーに搭載した時の動きのものだった。

「オズボーンさん！まさかウエンディを!？」

「データの大半はウルトロンに持っていかれたが、指向性の補助AIの一部は奪還できた。君とハリーが作り上げたものは取り返すことはできたつもりだ。奴が本体をクラッシュする前に間に合っただったよ」

そう言つて彼はウエンディに指示を出すための小型のインカムを渡してきた。グライダーとウイングスーツを眺めて、俺は頭を下げてそれを手にとる。

スパイダースーツの上からウイングスーツを纏ったがごわつきもなく体にフィットしている。装甲で可動範囲は狭まるが、特に問題はないはずだ。

「ありがたく使わせてもらいます」

「ワアオ、ゴブリンとオクトパスの作ったスーツを着てグライダーに乗るスパイダーマンなんて……それなんてチート?」

そう茶化してくるグウエンに、俺はニヤリと笑つて言葉を返した。

「これが、この世界のスパイダーマンさ」

なノリだわ。

声はかなり少女チック……強いて言えば、CV坂本真綾さんみたいな声色です。誰だ、ウエンディをこんな声にしたのは！あ、ノーマンさんですかナイスウ!!（本音）

そんなわけでウエンディの能力を借りて今は乗っ取ったオズコープの業務エレベーターの中にいます。

「はあ、堂々と搬入用エレベーターで上に向かうとはな」

くたびれた研究着からスーツに着替えたノーマンが疲れたように言うが、その目は少し楽しげそうだった。こう言ったスパイものが好きだったんだよ、と悪戯っぽく眉を上げるノーマンに、俺は少しばかり忠告をした。

「オズボーンさん？もしこれに敵が乗ってきたら……」

《マスター、このエレベーターの権限は私にあります。万が一にも敵が乗り込んでくることは……》

その会話の最中、ポーンとエレベーターの停止階のランプが光った。回数は地上までまだ下で、俺たちが指定した階数でもない。だがエレベーターは確実に減速し、そのフロアに止まった。ウエンディが搭載されているグライダーを見ると、さっきまで元気よく点滅していたディスプレイがフツと光を消した。

「僕らのことはスパイダーマンとウーマンって呼ぶようにしてくださいね!!」

エレベーターの扉が開くと同時、俺とグウエンは飛び上がって入り口で行列を作っていたオズコープの武装警備員に向かって拳や蹴りを繰り出した。銃を構える？ダメダメ！そんな物騒なものを出しちゃダメだよ!!そう叫びながらウェブで相手の構えた銃を器用に

奪ってゆくと、丸腰になった敵の顔面にグウエンがブラジリアンキックを叩き込んでいた。

ワアオ、割とアグレッシブなのね、彼女。

「全身タイトの不審者なんて聞いてないぞ!!」

「今全身タイトって言った!? 失礼だぞ!」

バララツと放たれたマシンガンを建物内を器用にウェブで飛び回って躲してから敵の両足をウェブで巻き付けて、力の限り振り回して壁に叩きつけた。グウエンも敵を制圧したようで、残りはあと一人だ。

「オクタヴィアス博士とノーマンの息子を捕らえろという命令だけだぞ!! それを……むぐう!」

エレベーターの入り口まで辿り着こうとした男の口をウェブで塞ぎ、目の前に着地した勢いのまま男の顔面を殴り抜ける。

「はい、右ストレートでおねんね!! エレベーターは上に参りまーす!!」

リズムカルにウェブで上に向かうボタンを押すと、開いていた扉が閉まって再びエレベーターは上へと向かい始めた。

《あまりリスクはない移動になりますね》

ウエンデイのとぼけた物言いに思わずグウエンを見るが、彼女は肩をすくめて、ノーマンは気まずそうに眉を顰めるばかりだった。

「とにかく、早く上に行ってオクタヴィアス博士とハリーを助けないと!!」

おそらくきつきの集団が何倍にもなってオズコープに正面から喧嘩を打ったオクタヴィアス博士とハリーを取り囲んであるに違いない。もしかすると捕まって……最悪の事態が頭の片隅によぎったが、それを振り払って俺はエレベーターが地上階に着くのを待った。

ノーマンもグウエンと複雑な表情をしている。とにかくエレベーターが到着し次第、すぐに飛び出してハリーたちを助けないと。

「なんだ、まさかエレベーターで上がってくるとは思ってなかったぞ」

エレベーターの扉が開いた瞬間に、待っていたオクタヴィアス博士とハリーに言われた最初のセリフがそれでした。ええ、となりながら俺は二人の後ろに広がる光景を見て言葉を失った。

外から見ていた分、小綺麗だったオズコープの正面玄関とエントランスはボロボロに荒れ果てていて、受付のカウンターや近くにあるソファには吹き飛ばされた敵の警備員や、ヒドラの構成員たちが伸びて横たわっているのが見えた。

「あー、二人とも？無事？」

念のため聞くと、二人は互いに顔を合わせてからなんでもないように「見ての通りだな」と答えた。

オクタヴィアス博士の作業アームマジで強すぎて笑える。映画みたいにゴツゴツした感じではなく、収納性も考えて伸縮できるよう設計し直したんだけど、それに伴って耐久性も少し落ちてはるはずなのに全くの無傷。なぜ？と思っていたら動力に小型のアーリアクターと骨格の材質を変えたんだと。いったいどんな素材を使ってるんですかねえ？と聞くと、バツが悪そうにオクタヴィアス博士は目線を逸らした。これはあとでロージーと共に尋問しなければならぬな。

「父さん!!」

そんなやりとりをやっている後ろでは、父の無事を確認したハリーが人目も憚らずノーマンに抱きついていていた。ノーマンは少し驚いたような顔をしていたが、抱き締める息子の背に手を回して抱き返す。

「ハリー、すまなかったな……」

その言葉には多くの意味が籠っているような気がした。ハリーも父を助けるために割と危ない橋を渡ったものだ。グリーンゴブリンの爆弾を改造したり、スパイダースーツのディスプレイを改造したりとか。

「ああ、ノーマンさんも助けてめでたしめでたしでエンドクレジットに行きたかったんだけどね」

「ウルترونか？」

オクタヴィアス博士の言葉に頷くと、今度はノーマンが説明を始めた。

「奴は、おそらくタイムズスクエアに向かったんだろうな。あそこでストローム將軍はウルترونのお披露目をする予定のはずだ」

そのために自立型のAIを作れとノーマンは急かされていたらしい。しかもタイムズスクエアの会場にはスペース・ロジック社が手がけた無人のアーマー・マシンがいるらしく、その操作権や命令権を持つのはコアユニット。つまりウルترونの思うがままに動かすことができるようだ。

「で、どうする?..」

「決まってるや」

迷わず俺はハリーに答えた。タイムズスクエアに向かってウルトロンの野望を止める。あれが全世界にばら撒かれたら、インサイト計画のようにゾラ博士こと、ヒドラにとって邪魔な組織や人間を抹殺されることになるだろう。ここにいる全員にも危害は確実に及ぶ。

「絶対に上手くいかない気がする」

「それは同感だね」

軽い口調でそう言ったグウエンは、俺と一緒にスクエアに向かうよううで、ボロボロになったオズコープの入り口から歩いて行つた。俺はマスクを脱いで耳からインカムを外すと、それをハリーになげた。

「これって、ウエンデイの指令用インカムじゃ……」

「グライダーで付いてきてよ？僕は自前のエンジンがあるからさ。いくよ、グウエン！」

返答を聞かないまま俺は待っていたグウエンと共にニューヨークのビルに糸を放つて空へと駆け上がった。



しばらくインカムと去っていったピーターの後ろ姿を眺めながらハリーはため息をついた。

「……まったく、スパイダーマンはこれだ……」

「ウイングスーツを渡した意味はなかったかもな」

「あー、だが防御力は上がってるぞ？」

グライダーに乗っていくだろうと思っていたらまさかのハリーへのバトンタッチだったことにノーマンは驚きと戸惑いを隠せない様子で呟く。たしかにウイングスーツの装甲で防御力は飛躍的に向上

しているだろうが、問題はそうじゃないのだ。

ハリーは少し考えてからインカムを耳につけると地面に置かれているグライダーに両足を乗せた。

「ウエンデイ、飛行プロセスを実行」

カチンと両足が固定されるのを確認して、インカム越しから指示を放つ。ハリーはグライダーにウエンデイを乗せる前に自分で乗る訓練もしていたのだ。まだ浮いてないのでバランスは取れるが、これが浮き上がると難易度が一気に跳ね上がる。

ピーターはついてこいと言っていたが、あのスイング速度についていける自信など、どこにもありは……。

《了解しました、マスター》

「マスターはよしてく……うわああー!?!」

ハリーの返答を待つ前に、ウエンデイが補助するグライダーはふわりと浮き上がって、そのまま半壊したオズコープの入り口を出ると直角にビルを登って飛んでいった。上に乗っているハリー？マトリックスパート1で弾丸を避けるネオみたいな姿勢になっていましたが何か？

「まあ私がテストしてた時よりは綺麗に飛んでるな」

フォローになっていない言葉を入れるノーマンにオクタヴィアス博士は小さく苦笑いした。すると、今度はオズコープのガラスを突き破って一台の車が二人の前に停まった。

「なにしてるの、二人とも。早く乗って!」

運転をしていたのはロージーだった。なんでもピーターやハリー

たちからの連絡が途切れたので大急ぎで車を用意してこの場所まで走ってきたらしい。ノーマンとオクタヴィアスは急に出てきたロージーに少し固まったが、すぐに車に乗り込んでゆく。

「少し揺れるけどしつかり掴まってる」

レストアされたミニのエンジンが唸りを上げるとギヤリつとタイヤが地の上で空転する音が響き、同時に今まで体感したことのない加速度で車は再びオズコープのガラスを突き破ってその場を後にする。

「ロージーはたくましいな」

「自慢の妻だ。手は出すなよ？」

「流石に作業用アームで八つ裂きにされるのはゴメンだな」

左右へ振り回される中、必死にベルトを握り締めるノーマンと慣れ切った顔をするオクタヴィアス博士。二人もまた、ピーターたちが向かったタイムズスクエアへと向かってゆくのだった。

第十八話

「タイムズスクエアフェスティバルにお越しいただき、ありがとうございます、ありがとうございます！本日のメインイベントが始まりますので、皆さんどうぞお楽しみください！」

その日のタイムズスクエアは年に一度のフェスティバルで賑わっていた。大通りは歩行者天国となっていて、印象的なタイムズスクエアのスクランブル交差点には特設ステージが設けられており、歌手が歌声を披露する中、多くの人々が出店やフェスティバルの空気感を楽しんでいた。

「これは長官、ご足労いただきありがとうございます」

そんなフェスティバルを見下ろせるビルのバルコニーでは、フェスティバルの主催者や来賓として招待された著名人や政界の人間が立食形式のパーティーを楽しんでいる。

笑顔で挨拶をする傍ら、腹の探り合いをしている政界の人間を横目に、オズコープの役員たちを引き連れたストローム将軍は、政府の国防長官と握手を交わした。

「将軍、あなたの働きはペンタゴンまで聞き及んでおりますよ。プロジェクト・ウルترون、兵士を傷つけないでアメリカ合衆国の威厳を示す素晴らしい武器だ」

彼は将軍を押し立て、彼が主導したウルترون・プロジェクトへの出資を決定した人物でもある。握手をしたままそう言葉を交わし、そのまま肩越しに顔を近づけて小さくつぶやく。

「ハイル、ヒドラー」

それだけで彼がどう言う人間なのかは把握できるだろう。ストローム将軍が自律AIを手に入れ、それがゾラ博士によって「ウルترون」へと改造され、さまざまなプロジェクトが動き始めたのだ。全ては彼らの持つ一つの野望。世界をアメリカ政府ではなく、ヒドラが管理する完全なる秩序が保たれた世界に変えることだ。

「ありがとうございます、長官。では来賓席へ」

来賓席へと案内を任せ、ストローム将軍はその場にいるオズコープの役員たちを見渡す。なにも彼らをただここに連れてきたわけではない。将軍がバルコニーから見下ろすと、そこには数十のアーマーが佇んでいた。

「将軍、準備は滞りなく」

そう報告する役員に、よしとストローム将軍は頷いた。あのアーマーは無人だ。中はぎつしりと機械が詰まっており、受けた指令を忠実に実行する戦闘マシンである。その司令権限を持つのは、ゾラとストローム将軍で作り上げたウルترونであった。

「なんだあれ？」

ふと、フェスティバルに来ていた参加者が空から何かがちちらに向かってくるのを見た。その影は最初は小さく、鳥か何かだと思っただけが、徐々に近づくに連れて、飛んでくるものが人型で、飛行物体に乗っているのがわかってきた。

「イベントの出し物か？」

あながち間違いではない。だが、こんな予定ではなかったとストローム将軍は思っていた。たしかにウルترونが操る指揮官型の

アーマーがここにたどり着く予定であったが、近づいてきたソレの姿はストローム將軍が見た指揮官用のものとは明らかに異なるフォルムをしていたのだ。

グライダーに乗ったアーマーは著名人がいるビルのバルコニー付近まで飛んで、そこで器用にホバリングして停止した。

《ストローム將軍、君には世話になったよ》

その声にはどこか聞き覚えがあつた。電子的なノイズが混ざっているものの、ねっとりとした纏わりつくような声色と口調は間違いなかった。

「まさか、ゾラ博士なのか……?」

《いかにも。私はついに肉体を手に入れたのだ》

その発言にストロームは驚きはしたが、他には何も思わなかった。ゾラ博士はヒドラの同志であり、共にウルترون・プロジェクトを進めた友でもある。データでしかなかった彼の知識や理論を利用したところはあるが、彼が肉体を手に入れたと言うなら申し分ない。

指揮官型のアーマーとはいえ、最終決定を下すのはマザーユニットであるウルترون本体だ。そんな本体が自ら手足を動かしグライダーに乗って指揮をとれるなら、マザーユニットなどという脆弱な司令体系を排除することができると考えていたのだ。

「では丁度がよかった！我々もいま、ウルترونを大臣や関係者にプレゼンをしよう……」

《いや、私がここに来たのはもう君は必要ないと伝えるためだ。それと忘れ物を取りにね》

は？と、ストローム將軍は間拔けた声を上げた。何を言っているんだ？これから我々は共にアメリカという国家の軍を乗っ取り、世界か

らテロリストやヒドラに不要な存在を抹殺するはずだ。それを「私
が必要ない」だって？

「な、何を言ってる……」

動揺する將軍を他所に、オズコープの役員たちは外が騒がしくなっ
ていることに気づいた。バルコニーから下を見下ろすと、さっきまで
賑わっていたフェスティバルの様相は地獄と化していた。鎮座して
いたはずのオズコープ製のアーマーたちが動き出していたのだ。内
蔵されたミサイルやガトリングガンを撃ち放ち、キャンピングカーや
警備をしていたパトカーが次々と燃え上がっているのが見える。

明らかに様子がおかしい。ウルトロンは真っ赤な眼光を光らせた
まま、呆然としているストローム將軍の首を掴み上げた。バルコニー
にいる関係者たちが悲鳴を上げ始める。

《私は新たな可能性を持った存在となった。肉体でわずか百年程度
も生きられない君達など、もはやヒドラに必要ない》

アメリカ政府を懐柔する必要はない。ウルトロンはここからはじ
めるつもりだった。このニューヨークから。因縁と始まりの地でも
ある場所から。ヒドラが願った世界を作り出すインサイト計画を始
めるのだ。

《これで、本物になる。頭を失っても別の場所から生えてくる。本当
のヒドラにな》

ウルトロンが操るアーマーたちが逃げ惑う市民たちに狂気の矛先
を向ける。ヒドラの世界には必要ない者をこの世界から排除するた
めに。

だが、それは張り付いた糸によって阻まれた。

T H W I P !!

独特な吐出音と共に放たれる糸が摩天楼に掛かる。ビルの間を飛ぶ影に、怯えていた人々は空を見上げた。

風を切る音と、スイングをする影が人々の頭上を飛び抜けると、ウルトロンの背後に位置するフェスティバル用のバルーンの上に着地した。

《ああ、来たかね？スパイダーマン》

ストローム将軍をまるで興味を無くしたおもちゃを捨てるように離れたウルトロンは、バルーンの上に佇む相手を見た。

顔はマスクで覆われ、伸縮素材で作り上げられたスーツは、ノーマンによってもたらされた黒に白のラインが入ったウイングスーツに覆われている。ゾラが予見した姿とは異なりはするが、その視線の先には間違いなく、彼がいた。

「ああ、来たぞ。もう諦めて大人しくするんだ、ウルトロン！」

身を屈め、まるで獲物を前にする蜘蛛のように身構えるスパイダーマンに、ウルトロンはほくそ笑んで問いかけた。

《そんな必要など、私にはないのだよ。それに君一人で何ができる？》

辺りにはウルトロンが操る数十のアーマーがいて、その全てが武装している。これほどの戦力差をたった一人でどうにかできるものか。そう見下すウルトロンに、マスクの下でニヤリと笑みを浮かべて答えた。

「……一人じゃないわ」

再び響く糸が放たれる音。風切り音と共に、ウルトロンの背後にあるビルの壁に、白と黒を基調にしたスーツを身に纏うスパイダーグウェンが張り付く。

市民を襲おうとしていたアーマーに突如ミサイルが直撃し、小さな爆発と共にそのアーマーは粉々に吹き飛んだ。ウルトロンが目を凝らすと、フェスティバルの上空を一機のグライダーが旋回しているのが見えた。

すると、ウルトロンの体が急に吹き飛ばされた。乗っていたグライダーから落下し、特設ステージの舞台に墜落したウルトロンが見上げると、バルコニーには4本のアームを背に待つオクタヴィアス博士がにこやかに佇んでいた。

「やあ、ゾラ博士。いや、ウルトロンかな？機械の体で何ができるか、私が試してやろう」

ステージの上で、ウルトロンは四人に取り囲まれる。

親愛なる隣人、スパイダーマン。彼を支えると誓ったスパイダーウーマン。彼の親友であり、優秀なメカニックでもあるハリーと彼の補助をするAI「ウエンデイ」。そして頭脳と作業アームを駆使して戦うドクター・オクトパス。

彼らはヒーローなのかもしれない。あるいはヴィランになる者かもしれない。だが、ウルトロンには関係ない。取り囲む全員が、ウルトロンの……そしてヒドラの脅威なのだから。

《小癩な奴らめ。やはり、どうやっても貴様らのような存在は私をおびやかすか!!》

「いくぞ、みんな!!」

ウルトロンが差し向ける武装したアーマーたち。それに真っ向から向かう四人。ミサイルを躲し、アーマーを引き裂き、爆発と轟音が響く。

ニューヨークの多くの市民たちが見守る中、ウルترونと四人の英雄たちの死闘が始まったのだった。

第十九話

タイムズスクエアガーデンはあつという間に戦場と化した件について。サムライミ版でもグリーンゴブリンとの初ファイトがここではあつたがああの規模を優に超える戦いがこの場では発生していた。

というか、ウルترونが制御下に置くアーマールの攻撃がヤバい。こっちは肉體戦術だが向こうはバリバリの実弾兵器である。誰だ、イベントに出す用のアーマールに実弾兵器を詰め込んだの！これだから銃社会のアメリカは困る！

目の前にいる三体のアーマールが放ったロケット弾を近くにあるマンホールで叩き落としてからスイングの勢いそのまま叩きつけると火花を上げて三体のうちの一体が吹き飛んだ。

「ざまあないぜ！って、え、オクタヴィアス博士？」

「手頃な武器が落ちていてな。有効活用しようかと」

俺がそう言うのと次いで現れたのはパトカーを持ち上げたオクタヴィアス博士。え、博士そのパトカーをどうするつもりですか。

と思つたら扉やトランクの部品を作業用アームで千切つては投げ、千切つては投げ。最終的にボロボロになったパトカーを持ち上げて縦からまるで鉄槌を叩きつけるようにアーマールにぶつけていた。

「ハツハツハツ！これはなかなか爽快だな」

「あらやだ、バイオレンス」

スツキリした顔でペシャンコになったアーマールを見るオクタヴィアス博士に隣に着地したグウェンが口元を上品に押さえながらそう言った。博士つて振り切ると奇行に走り出すから……。

実験で行き詰まった時に不採用の設計図の束を作業用アームで「ふううん！」って言いながら引きちぎったり、気分転換にラボの通路

でスケボーに寝そべりながら滑ったりとかしてるからね。天才故の産みの苦しみボディランゲージである。

普段は紳士的なオクタヴィアス博士しか知らないグウエンは「ヒエ」というリアクションをしつつも、残り一体のアーマーを相手取っていた。まず足にウェブを張り付かせて思いっきり転倒させるとそのままフルスイングで他のアーマーに向かってドミノ倒しのようにつつけて吹き飛ばした。

「女の子だからって甘く見てもらっちゃ困るわね」

「君も大概バイオレンスだね、おっとっ！」

澄まし顔で言うグウエンに呆れていると足元に銃弾が降り注いだ。オクタヴィアス博士は近くに落ちてたパトカーの扉で防ぎ、俺とグウエンはウェブで飛び上がって銃撃を避ける。目を向けると胸部に内蔵されたワイヤーでビルの壁に張り付いているアーマーがいた。すぐに追撃しようとウェブスイングをした時、グライダーに乗ったハリーが横を通り過ぎた。

「ほら、お返しだー！」

グライダーに備わる高振動ブレードを取り出したハリーはビルに縫い合わせてあるワイヤーを華麗な剣捌きで切り落とした上に装甲を溶かす溶解剤が入ったボールを落下するアーマーにぶつけてトドメを刺していた。

ニューゴブリンの時の戦闘センスから察するに、ハリーは中々のやり手である。しかも服装はゴブリンのガジェットが備わるベルトを腰に巻き付けているだけで、防具は最低限のサポーターだけだ。ウエインディの補助があるとはいえ、ウイングスーツも身につけていないのにハリーはグライダーを完璧に乗りこなしている。

再び残骸をアームで掴んで投げつけるオクタヴィアス博士に、ウェブを巧みに操ってアーマーを叩き潰すグウエン、そしてグライダーで

体当たりやブレードでアーマーを切り裂くハリー。なにこれ、俺のチームメイト強いわ。

「これは負けてられないな！」

そんな中、俺は空中に止まるウルترونへと殴りかかった。ゾラの精神プロセスがインストールされたウルترونの動きは他のアーマーと違ってより人間的だった。ガツンと鋼鉄でできた頭部を殴りつけると、赤い眼光をギラギラと光らせるウルترونが睨みつけてくる。

《どこまでも私の邪魔をする忌々しい虫ケラめ！》

「酷いな！全身メタルな爬虫類には言われたくないね!!」

腕から小型のロケットをぶっ放してくるウルترونの攻撃を避ける。けどロケットが周りのビルとかに当たると危ないからウェブでキャッチしてそのままリリース！轟音と火薬特有の爆炎に包まれるウルترونだが、何事もなかったように煙を振り払って反撃してきた。やっぱり生半可な攻撃じゃダメージは入らないらしい。

なら、特大ダメージを与えてやれば解決だ。

「オクタヴィアス博士！」

「老体には堪えるリクエストだな！」

あらかじめ地上で話をしていたオクタヴィアス博士は倒れた街頭の柱をアームを使って俺めがけて投げつけてくれた。それをウェブでキャッチした俺は、反対の腕でウルترونにウェブを貼り付ける。俺の体重と柱の自重、さらに重力加速度を利用して、ピンと張り詰めたウェブ越しに一気に柱をウルترونめがけて投げつける。

さまざまなエネルギーが蓄積された柱はそのままウルترونの胴体を捉えて、堅牢な装甲に一部が突き刺さる。

《小癩な真似を！》

火花を上げて苦しみもがくウルترونは突き刺さった柱を引き抜き投げつけてきた。真つ直ぐ飛んできた柱を紙一重で躲しつつ、側面に蹴りを入れて軌道を変える。落下した柱はグウエンに迫っていた。アーマーを真上から貫いた。

「ウエンディー！あのアーマーの制御はどうなってるんだ?!」

《すべてウルترونから送られてくるデータをもとに運用されています。外部からアクセスを試みましたがブロックされているようです》

何度かウエンディー自身がアクセスを試みたらしいが、オズボーン氏から得ていた事前情報通りウルترونのシステムは最新のウイルス対策が施されている。それにゾラ自身が作ったシールドもあるので容易に肉体の制御権や、システムのハッキングは行えない。つまるどころ。

《ウルترونを破壊すれば駆除は可能かと》

肉体言語での解決が最善ということだ。

「なら、ここから逃す前に仕留めなければならぬな！」

そう軽快に言うオクタヴィアス博士は肉弾戦を挑んできたアーマーと力比べをしている。アーマーが両手を使って博士の作業用アームを捻り潰そうとしていたが、残念ながらそれは悪手じやろうて。

「そんな貧弱なアームで私と戦おうと言うのかね？いささか力不足だ」

オクタヴィアス博士の宣言通り、逆にアーマーの腕が悲鳴を上げてひしゃげた。博士の作業用アームを舐めてはいけない。あれはトリチウムを扱うために開発したものだ、その膨大なエネルギーを受けなくても対抗できるほどのパワーモジュールが備わっている。しかも一つや二つではなく作業用アームに備わる250もの関節部全てに内蔵されているのだ。

あくまで化学的な実験の時しか用いられない代物ではあるが単純な握力は5000N。つまり510キログラム相当のエネルギーがああ細いアームには備わっているのだ。柔な装甲程度なら簡単にペシヤンコにできる……実験用とは言え殺意が高すぎる。

そのままアーマーの腕を引っこ抜いた博士は「ほら。スパイダーマン、パスだ」と言っ行って行動不能になったアーマーを投げてきた。

「ありがとう、オクトパス博士！それをウルトロンの顔にシュウウウウト!!」

思いっきりウエブで振り抜いたアーマーはウルトロンに直撃。火花を散らして五体が吹き飛んでいった。

「わああ、超★エキサイティングね」

次いでウエブスイングをするグウェンがトウシューズでドロップキックをかまして、ハリーが電撃性を持つガジェットを投げつける。目まぐるしく追撃をしてくる俺たちにウルトロンはノイズが走る機械音で咆哮を上げた。あれだけのダメージを負っても敵はまだ健在だった。

《いい加減に目障りだ、捻り殺してくれ!!》

「そう簡単にはさせないぞ、ウルトロン！」

とにかく物理でダメージを与えていくしかない。全力で応戦して

くるウルترون相手に、オクタヴィアス博士から送られてくる質量弾を叩きつけながらニューヨークのど真ん中で俺たちは戦いを繰り広げてゆくのだった。



「ええい、警備兵は何をしてるんだ！ さっさとウルترونもあの四人の化け物も殺せ！」

ウルترون率いるアーマー軍団とスパイダーマンの戦いをバルコニーから見ていたスローカム將軍は携帯電話越しに金切り声を上げていた。電話相手は下で戦うヒドラの構成員だが、彼らもウルترونから敵として扱われている。武装したアーマーとの戦闘でスローカム將軍の命令を聞くどころではなかった。

プロジェクトの集大成であるはずのウルترونがまさかゾラ博士の精神を取り込んで反旗を翻すなど、將軍にとつては予想外であった。彼はヒドラの人間でもあり、ゾラ博士が立案したインサイト計画の主犯格でもある。計画でヒドラの邪魔者となる存在を消し去り、やがて政府内の最大武装派閥として世界征服を目論んでいた彼にとつて、この事態は最悪であった。

このまま全てが露呈すれば自身の身の保証もどこにもないのだ。保身に走ったスローカム將軍はウルترونや戦うスパイダーマン、そして目撃者を含めた全員を射殺しろと檄を飛ばしていた。

「それが貴方の正体ですか、スローカム將軍」

そんなスローカム將軍が声の方に視線を向けると、彼は目を見張った。オズコープの重役たちも息を呑んでいるのがはっきりとわかる。現れたのはオズコープの地下に軟禁していたはずのノーマン・オズボーンだったのだ。

「オズボーン!?なぜ貴様が……」

「逆にウルトロンに利用されていたことにも気づかない愚かな貴方やオズコープの重役たちを笑いに来たのですよ」

そう言っただけで近くに一人かけ用ソファに腰を下ろしたノーマン。だが、スローカムは彼の登場には驚いたものの余裕の笑みは絶やさなかった。彼にとってノーマンは何の障害にもならない。さらに言うならノーマンは絶好の隠れ蓑だった。

「ノーマン、貴様は最早終わりだ。ウルトロンの暴走とピーター・パークの叔父を殺した貴様は何もかも失う！だが、我々は失わない！ヒドラは頭を切り落とされてもまた別の場所から新たな頭が生えるのだ！」

今回の件はオズコープとスローカム將軍……強いて言えば軍部と軍事複合企業の癒着から起こった側面がある。軍部にとってはオズコープの重役たちなど利益のおこぼれをもらおうと集まった相手ではない。オズコープが取り壊しになってもスペース・ロジック社や代わりの企業はいくらでもある。

だが、ノーマンは崩れなかった。ソファに座ったまま羽虫の音を払うように手を振った彼は感情的に声を荒げるスローカム將軍に促す。

「状況を理解していないようですな、將軍。どうです、テレビでもご覧になったら」

そう言っただけでノーマンは傍にあつたりリモコンを手に取りテレビの電源を入れた。テラスを設けた豪華なゲストルームに設けられた特大のテレビモニターには、今まさに外で繰り広げられているウルトロンとスパイダーマンたちの戦いの映像が映し出されていた。

「デイリー・ビューグルが独占放送をしています！ご覧ください！あれがオズコープと軍が結託して作り出した殺人マシーン、ウルトロンです！」

女性アナウンサーの言葉にさつきまで余裕たつぷりだったスロークラム將軍の顔から色が消えた。ウェブでスイングするスパイダーマンとそれを追うライダーに乗るウルトロン。その映像から画面が切り替わると今回のプロジェクトに関わった軍上層部の面々の顔写真と、オズコープの重役たちの取引現場などが映された静止画像が次々とテレビを通して白日の元に晒されていく。

「この計画を主導したのは軍部のストローム將軍であり、政府も独断でこのような危険な兵器を製造していた將軍と、彼と手を組んでいたオズコープの上層部に対して逮捕状を出しています！」

「な、なんだ……これは！」

狼狽えるスロークラム將軍に、ノーマンはまだ手のついていないウィスキーのグラスを手にして満面の笑みを浮かべて答えた。

「私が何もせずにここにノコノコと現れると思っていたのか？あの地下施設に監禁されていたときも、黙って従っていたと？」

そう。ノーマンは回収したウエンディや逆にハッキングしたオズコープのデータベースから情報を抜き取り、その全てデイリービューグルに送っていたのだ。ノーマン自身、あの悪徳編集長とは仲はずこぶる悪かったが……彼のことだ。美味いように料理をしてからメディアに出してくれることだろう。

「それで？すまない、もう一度聞かせてくれ。頭を切り落とされても……なんだったかな？」

耳を澄ますようなジェスチャーをするノーマンに顔を青ざめさせていたスローカム將軍は噴き上がる怒りの感情のまま懐にしまった拳銃に手をかけて叫んだ。

「き、貴様ああ!!……ギヤアアツ!」

將軍が拳銃を取り出すことはなかった。彼の胸に突き刺さった電極から高電圧が流れ、激情の渦の中スローカム將軍は意識を刈り取られたのだった。床に倒れ痙攣するスローカム將軍にテザー銃を打ち込んだのは、ノーマンの後ろにいたオクタヴィアス博士の妻、ロージーである。

そのまま彼女は横たわるスローカム將軍に近づき、懐から取り出した近距離用スタンガンをバチバチと迸らせる。

「ウチの夫と、ピーターたちを侮辱した報いよ」

そのまま意識を刈り取られたスローカム將軍にダメ押しの一撃。足がびくびくと痙攣してスタンガンの餌食になる將軍は完全にオーバーキルであるが、キレたロージーを制する度肝は策略家の側面を見せたノーマンにはなかったものでそつと目を逸らした。

視界の端では自分を裏切り、スローカム將軍と結託していたオズコープの重役たちが部屋から逃げ出していく様子が見えたが、もはやダメだろう。今回の件に加えて脱税や贈賄の証拠をメディア各社に垂れ流している。彼らは社会的に死ぬことになるはずだ。

「あとはピーターたちに任せるしかないな」

「ウルトロンと戦っている、あの四人の人影は一体なんなのでしょうか!」

デイリー・ビューグルが独占放送するニュースを眺めながらノーマンはウイスキーのグラスを傾けた。彼は確信していた。彼らがウル

トロンに確実に勝利すると言うことを。

第二十話

ウルトロンは焦っていた。データ上ではスパイダーマンことピーター・パーカーは孤独な存在だと認識していたはずなのに。いったいどうなっている。凄まじい力のアームに殴りつけられたせいで思考プロセスがうまく作動しない。本来ならば同時に500以上の並列処理ができるはずのCPUが戦闘の負荷で50にも満たない処理しか叶わない。

加えて電撃性の粘着爆薬を受け、ウェブで勢いをつけた蹴りやパンチを身に受けるウルトロンは、その持てるスキルが徐々に奪われつつあったのだ。

「いい加減に止まれ、ウルトロン！」

スイングで加速したスパイダーマンのダブルキックを受けてグライダーから吹き飛び、煉瓦造りのビルの外壁にめり込んだウルトロン。こちらを取り囲んで降伏勧告をするスパイダーマンチームにウルトロンは咆哮を上げて抵抗した。

《止められるものか！私は完成された存在なのだ！故に、ウルトロンなのだ！！》

肩に備わった小型ミサイルも今ので弾切れだ。そのほとんどが二人のスパイダーマンによって形成された蜘蛛の巣に絡め取られてしまい、ダメージを与える前に無力化されてしまう。ウルトロンの最大の誤算はこの世界に二人のスパイダーマン能力者がいたことだった。ピーター・パーカーが一人であれば何とでもできたのを、オクタヴィアスやオズボーン、さらにはもう一人の異質なスパイダーマンを連れて現れたことで計画はもの見事に崩壊している。

「もう無駄だ、ウルトロン。タイムズスクエアガーデンにあったアーマーは全て破壊した。お前の手駒はもう存在しない」

グライダーに乗るハリーの宣言通り、この場を集められていた無人アーマーの全てが破壊されていた。先ほどの最後の一体も小型ミサイルを絡め取った蜘蛛の巣の直撃を受けて吹き飛んでいる。手駒を奪われ、その身も火花を散らし、見るからに消耗しきっているウルトロンに抵抗する手段など残されていないはずだ。

だが、ウルトロンは赤い眼光を鋭くさせる。彼は……敗北を認めることはなかった。

《誰がここにだけに戦力を集約させたと言った?》

ふと前に差し出した腕が凄まじい速さで打ち出された。小型のスターを装備したウルトロンの腕が質量弾として発射されたのだ。射線上にいたのはグウエンだった。彼女はスパイダーセンスで致命的な箇所への直撃は避けたが鋼鉄の腕は彼女の脇腹を叩いてしまった。鈍い音と共にグウエンは悲痛な声をあげて吹き飛ばされる。

「グウエン!?!」

《頭を切り落とされても、また別のところから生える。それがヒドラだ》

全員が吹き飛ばされた仲間の心配をしている。それがウルトロンにとつてのチャンスだった。全員の意識が外れた瞬間、機械の足を踏ん張らせてウルトロンは飛び上がった。待機していたグライダーに着地すると呆然と見上げる敵に目もくれず、ウルトロンは空高くへと上昇し始めた。

「ピーターー! まずいぞー!」

すぐに危機に気づいたのはハリーだった。彼はウルトロンの飛んで行った先を予測し、すぐにウエンディにサーチをさせた。そこには、大気層の上に何かが浮かんでいるレーダーのデータが映し出されていた。

《ウルトロンはこのまま静止衛星上の通信モジュールにアクセスするつもりです》

「何がどうまずいんだ？」

《つまり、通信モジュールにウルトロンが接続されたらアメリカのスペース・ロジック社のアーマーにアクセスすることができます。そうなれば、現在あるアーマー全てがウルトロンの支配下に……》

オクタヴィアス博士の言葉に答えたウエンディの答え。ウルトロンが言っていた。ここだけに戦力を集約させたわけじゃない、と。高性能メカトロニクスの集大成であるウルトロンが静止衛星軌道に上がってしまったら、そこから命令を送り、アメリカ全土に配備される予定のアーマーを手中に収めることになる。

それをして、ウルトロンが何を成すかなど想像するのは容易かった。

「奴は宇宙に逃げて、インサイト計画を実行するつもりなんだ」

宇宙という手の届かない場所から、ヒドラⅡウルトロンの邪魔になる可能性を持つ人々を一方的に虐殺する。それがインサイト計画だ。そのために奴はスペース・ロジック社をオズコープに不正買収させ、アーマーを作り上げ、全土に配備できるよう裏で手を回していたのだ。

「そいつはかなりヤバイ話だな」

ハリーが顔を青ざめさせながらそう言う。すると、腹部を負傷した

グウエンが痛みで顔を歪ませながらも体を起こした。

「ピーター、行って！」

「グウエン！けど……」

「彼女は私が運ぼう。ピーター、ハリー、君たちはウルトロンを！」

作業用アームで優しく負傷したグウエンを抱き上げるオクタヴィアス博士。ピーターは頷くとハリーが乗るグライダーへと飛び乗った。

「ハリー！行けるか？」

「任せろ！ウエンデイ、最大出力で飛ばせ！」

《了解しました》とウエンデイが答えると凄まじい速さでグライダーは上へ上へと上昇してゆく。ニューヨークの摩天楼がどんどん小さくなり、雲を抜け、視界のてっぺんにダークブルーの空が見え始めた。空気が薄くなるのがわかる。ハリーの表情も苦痛に歪んでゆく。それでもグライダーは上へ上へと昇った。

そしてついに捉えた。

「ウルトロンだ！用意はいいな！」

前方を飛ぶウルトロンはまだこちらに気づいていない。ただ、相手は無機物でこちらは人だ。到達高度には限界がある。呼吸をするのも肺が締め付けられ、凍るように空気が冷たい。ピーターは深く息を吸って身構えた。ノーマンが改造した新型のパルスエンジンは機体を更に上へと押し上げてゆく。

《飛行高度限界まであと50》

「ハリー！帰ったらみんなでピザを食べに行くよ！」

「ああ、行ってこい！」

ハリーの声と同時に、グライダーをぐるりと反転させる。その反動を利用してピーターは更に上へと飛んだ。飛び上がった勢いが死なない内にウェブを上を飛ぶウルトロンのグライダーへと放つ。

(届け届け届けっ!!)

気流で乱されるウェブはふらつきながらも上へと伸びてゆき、そして落ちる軌道を描きながらもギリギリのところまでウルトロンのグライダーにたどり着いた。腕を引いて腕力で更に加速したピーターはそのままウルトロンのグライダーへと飛び乗った。

驚いた顔をするウルトロンの顔面に痛烈な一撃を叩き込む。殴られた衝撃で頭部のいくつかのパーツが吹き飛んだ。

《まだ私の邪魔をするか、スパイダーマン!》

「ああ、そうだ。僕は親愛なる隣人、スパイダーマンだ!」

宇宙へ向かうグライダーの上でウルトロンへピーターが最後の死闘を挑む。

鉄の塊の拳が腹部にめり込んで顔を歪めながらも、屈んだままウルトロンの足関節のシャフトを無理やり引き抜く。オイルと火花を散らして片足が機能不全に陥ったウルトロンだが、その手はピーターの首をがっしりと掴んでいた。ギリギリと機械音を響かせながら締め上げてゆくウルトロンに、ピーターは抵抗するが肺の空気が限界を迎えていた。

視界が暗く歪んでゆく。

《この高度では貴様も満足には戦えまい!》

膝が折れる。勝ちを確信したウルトロンは首を絞めたままピーターの体をグライダーへと押し当てた。片腕に備わる折れたリスト

ブレードを展開して、トドメを刺そうとした瞬間だった。

「ああ、だから一緒に落ちてもらう」

ウイングスーツに備わるリストブレードで、ピーターは自分とウルトロンが乗るグライダーの装甲を切り裂いた。引き裂かれた箇所はパルスエンジンの動力部。そしてピーターの手を見たウルトロンは驚愕した。

その手にあつたのは小型の爆弾だった。黄金の配色をした爆弾はハリーが離脱直前に渡した切り札だ。中央にあるボタン式の起動装置に指をかけるピーターの首をウルトロンは壮絶な力で締め上げた。

《馬鹿な！グライダーを破壊すれば貴様も命はないぞ！》

「ああ、知ってるさ」

《よせええええ！》

視界がブラックアウトする寸前にピーターは中心部のボタンを押し、爆弾を切り裂いたグライダーの装甲内に突っ込む。

爆轟が大空の中で響き渡った。グライダーが木っ端微塵に吹き飛び意識を失いかけているピーターと、飛行能力を持たないウルトロンが投げ出された。

風切り音が響き渡る中、ピーターは雲の海に落ちてゆく。

意識を失う間際。

ふと、誰かが自分のことを呼ぶ声が聞こえたような気がした。

第二十一話

「ハアッ！ すぐえ怖い夢を見た。めちやくちや高いところから落つちる夢」

ガバツと起き上がったと思わず声を上げた。

ふう、なんて夢だ。長い夢を見ていたような気がする。

内容ははつきりと覚えていて、自分がスパイダーマンとなり、ウルトロンと名乗るマシンと戦うわ、実弾飛び交うタイムズスクエアで大立ち回りを演じるわ、挙げ句の果てに宇宙に行こうとしたウルトロンを止めるためにグライダーをぶっ壊して一緒に高度8000メートル近くから落下するとか……。

夢にしても設定盛りすぎだろふざけんな。あと、なんだかずいぶんと昔のようなことに思えるんだけど……気のせいかな？

「いや、それ夢じゃなくて現実だったわけなんだが」

寝そべっていたソファの上でウンウン唸っているとキッチンからコーヒーを注いだマグを二つ持ったハリーがやってくる。

その顔は「何言ってるんだコイツ」みたいな顔で、マグを渡すときに「何言ってるんだ、ピーター」と言われました。俺の親友、顔にも口にも出したよ！

「ありがとう、ハリー。ほんとギリギリではあったよ。マジで。もう二度としない」

あの後、ウルトロンと俺が乗るグライダーはハリーから託された小型爆弾で吹き飛ばされた。

飛行能力を持たず、鉄の塊でもあるウルトロンは墜落していき、爆発でウルトロンとは別方向にぶっ飛んだ俺は、意識を失っていた。

それを助けてくれたのが限界高度に昇ってきてくれたハリーだった。グライダーを補助するウエンデイの協力のもと、落下した俺を受け止めてくれて……俺が目覚めたのはぐったりしたハリーと共にセントラルパークの芝生の上で横になっている時で、すぐ近くにはハリーの乗っていたグライダーが地面に突き刺さっていた。

受け取ったままでは完璧だったけれど、限界高度を飛行していたグライダーが限界を迎えてハリーも墜落。地上ギリギリでエンジンは復活したが、俺を受け止めていることや疲労も重なり、姿勢を回復させることができずセントラルパークの芝生エリアに不時着。グライダーは芝生に突き刺さり、二人揃って投げ出されたことで俺は意識を取り戻し、逆にハリーはそれで気を失った。

「……二度もあんなことあったら本気で絶交するからな？」

ヒエ、怖い。今まで聴いたことない低い声でハリーはそう言った。なんだかゴブリンになった時くらいの凄みがないですかね？

あ、セントラルパーク墜落後は、オクタヴィアス博士とオズボーンさんが助けてくれました。グウエンは肋骨にヒビが入っていたけどピンピンしてたな。さすがパイダーウーマンだぜ!!そういうと「あれだけの高度で戦った上で爆弾で爆破した衝撃に襲われてもすぐに起き上がるピーターの方がおかしい」と言われてしまった。解せぬ。

「ウエンデイ、ウルトロンの反応は？」

《上空15000メートルからの墜落後、反応は一切確認されていません》

「墜落してペシヤンコになったのかしら？」

我が家の特製デスクトップに収まるウエンデイからの報告に、リビングテーブルでブルックリンの高校から出された課題をこなすグウエンがそう声を上げた。

ちなみにここはオクタヴィアス夫妻が建てた家である。タイムズスクエアでのウルトロン的一件……ニューヨークを恐怖のどん底へと陥れた「ウルトロン・オートマトン事件」が収束してからというもの、オズコープには警察や政府調査委員会が殺到。捜査の結果、オズボーンさんが拉致監禁されていたことや、上層部の賄賂、軍部のとある派閥が徹底的に槍玉に挙げられ、オズコープは実質営業停止中。近いうちに資産を売却して倒産が告知されることになっている。

まああれだけの事件を起こしたわけだ。奇跡的に死亡者は出なかつたけれど、怪我人は出たわけだし。

「奴は元々データの海に生きていた存在だ。まだどこかで息を潜めているかもしれない。しかし……オズコープは残念だったな」

グウエンの向かい側で論文をまとめているオクタヴィアス博士がハリーを気遣うようにそう言った。オズコープはハリーやオズボーンさんにとっては生活の一部だ。俺やグウエン、オクタヴィアス博士とは感じ方が根本的に異なっている。だが、ハリーはそこまでショックを受けている様子はなかった。

「まあ仕方ないですよ。あんなことをしでかしたわけですし……それに父さんが色々動いてはくれたみたいだけど」

「どう？大企業の御曹司から一般人になった感想は」

俺がハリーにそう言うと、ハリーは「俺たちが一般人というのは烏澁がましい気がするな」と口にしてから改めて言った。

「言っただろ？父さんが動いてるって」



ハリーの言った通り、オズボーンさんは早々に動いていた。という

か早すぎた。だってオズコープがデイリー・ビューグルや、他のメディアに吊し上げられて総叩きに遭ってる中、新会社立ち上げて新たなビルにオフィス構えてるなんて想像できないじゃん？

「いやあ、オズボーンさんマジでオズボーンさんだったわ」

ニューヨークの一等地にあるオフィスビルの3フロアを押さえた新会社であるが、ここですら仮のオフィスらしく、現在新たなオフィスビルの建設計画が始まっているらしい。マジやばくね？それ聞いた時、ハリー以外全員背景に宇宙を背負って猫になってたもん。

「オズコープにあった利権関係は基本的に父さんの名で登録されていたからね。いつ裏切るかわからない上層部の人間を信用してなかったことが、ここにきて上手く働いたわけさ」

「ノーマンの人間不信が役立ったわけだな」

「オクタヴィアス博士、言い方……」

「おっと失礼」

ハリーの言った通り、オズコープでの特許のほとんどはオズボーンさんが取得しているし、ストローム博士や他の技術者の研究もバックにはオズボーンさんがついていたことから軍事関係の技術を除く全てをオズボーンさんが掌握。金になるが作り続けなければ儲けられない兵器産業は切り捨て、これまでの特許費用と資産を使い、総叩きにあつて死んだ顔をするオズコープを尻目に新会社を立ち上げたのだった。それに加えて、俺とハリーがオクタヴィアス博士を迎えるために作った子会社も大いに役立っている。

「……で、オズボーンさんはなんて？」

「これからはアークリアクターを前面に押し出したエコロジー企業を目指すってさ」

ハリーから聞いた限りでは、以前のオズコープのような軍需複合企業からは脱却するみたい。まあ軍産から手を引く＝利益は下がるけど、過去の遺恨や負債抱えて再出発はダメだろって父さんは言ってたから順当でしょと、ハリーはあつけらんと言っていた。

オズボーンさんと一緒に超兵士の薬品研究をしていたストローム博士をはじめ、オズコープにいた研究員もそのまま移籍してくれると言っている。これからの時代はやっぱりエコだな、エコ。

「エコロジー企業か。アークリアクターは素材が高価だから量産にはあんまり向かないし……どうする？とりあえず電気変換効率300%の太陽光発電システムでも作る？」

「ピーター、扱いに困る発明品は当面自粛して欲しいんだが……」

これらからの研究テーマをオフィスで提案すると、少し疲れた顔をしたオズボーンさんが部屋に入ってきた。どうやら新規取引先との交渉は終わったらしく、無事に受注も貰えたようだった。

「オズボーンさん、お疲れ様です！」

「アークリアクターのおかげで案件には事欠かないからな。起業時の説明会や確認会は相変わらず疲れるしいくつになっても緊張するものだ……さて、聞きたいのだがピーター、ハリー、オットー。この三人の中で役員に志願する者はいるのかな？」

「はいはい、ピーター・パーカーは技術顧問がいいです」

「右に同じく」

「責任持たないで好きなものを作る立場を作ろうとしてるよこの二人」

うるさいよ、ハリー。君だって企画部と設計部の技術顧問狙いでしようが。あ、役員？責任とか色々あってめんどくさいのでパス。オクタヴィアス博士もトリチウムの研究は終わったとはいえ、新たに義手や材質関係の研究始めてるから書類仕事とか興味なさそう。たま

にオズボーンさんに付き合っつてゴルフには行つてみるみたい。

なんでそんなこと知ってるか？こないだ研究に行き詰まった博士が不採用の書類の束をアイアンでぶつ飛ばしてたからかな？

「あと、僕らが部下とか育てて第二、第三のピーター・パーカーか、オクタヴィアス博士を生み出すのと、僕らに好き勝手に開発させるの、どっちがいい？」

「選びたくない二択だなあ……!!」

頭を抱えるオズボーンさんと想像して心底嫌そうな顔をするハリー。それをみて晴れて新会社に入社したグウエンがケラケラと笑っていた。

「で？ノーマン。企業名はもう決めたのかい？」

そうオズボーンさんに問いかけるオクタヴィアス博士。え??まだ企業名決定してなかったんですか?てつきりオズコープ・リターンズとか、オズコープ・ライジングとか、オズコープ・ダークナイトとかそんな名前がつくのかと思つてた。そう考えてると何故かハリーに頭を叩かれた。こいつ……思考を読んでやる!?(顔に出てるだけ)しかし、オズボーンさんは俺たちを見て柔らかな笑みを浮かべてこう言った。

「それについては……私は君たちに任せようと思う」

オズボーンさんの人脈や実績や研究、特許や資金と大部分がオズボーンさんのおかげだが、俺とハリーが立ち上げた子会社や、アークリアクターのおかげもある。それに私が名前を考えると、再びオズコープのようなネーミングになる。それに遺恨は残したくないからな、とオズボーンは付け加えるように言った。

「心機一転つてところかな」

「また日本の諺かい？ピーター」

「こういうのは雰囲気的大事だからさ」

そんなもんかというハリー。何か候補は？と聞くオズボーンさんに、ハイつと元気よくグウエンが手を上げる。

「はいはいはい！私はスペーリアカンパニーがいいと思います！」

「ちよつと上目な会社という意味か」

控えめでいいでしょ、というグウエン。すると横にいたオクタヴィアス博士がどこか神妙な顔をしていた。

「どうしたの？アナタ」

「いや、なんだか嫌な予感が……私が死んで復活して名乗る名前みたくないな……」

なにそれこわい。オクタヴィアス博士の言葉に顔を顰めるロージー。まあネーミング的にもあんまりピンとこないから却下ということ。

「えー、じゃあハリーは何がいいの？」

「俺か？そうだな……M・J……」

はいだめですうー！最愛の彼女の名前をつけるとか正気?!後になつて後悔することになるんだからな!?!ただでさえM・Jとは今後どう転がるかわかったもんじゃないんだし!?!

「な、いいだろ!?!別に!」

「よくない!別れた後に死にたくなつても知らないわよ!?!」

グウエン、それはちよつと言ひ方……ハリーもほら!落ち込まない

!!

「ゴホン！じゃあオクタヴィアス博士は？」

「私か？じゃあそうだな……シニスターソリユーションとかはどうだ？SSで略せるぞ？」

そもそもシニスターの意味が不吉とか邪悪じゃねえか。却下です！却下!!なんだか変な電波を受信してるオクタヴィアス博士にロージーも、「アナタ大丈夫？どこか悪くなってる？具体的に言うとか脊髄に埋め込まれた神経パルスを制御するチップが壊れたとか？」とか聞いていた。

うん、えらく具体的な例だな。

「はい！もうやめやめ！博士の案も却下！」

「じゃあどうするんだ？」

ハリーの声に全員が静かになった。新会社の名前が全員出てこない中……ふと、俺の中にあつた思いが溢れた。

「……パーカー・エレクトロニクス」

ぼそつと呟いた言葉。思わずハツと顔を上げるとハリーやグウェン、オクタヴィアス夫妻、そしてオズボーンさんも俺の顔を見つめていた。それは「え？自分の名前をつけるの？」という引いたような顔ではなく……何かを察しているような顔だった。

「あ、いや……その……」

「ピーター？ここにきて言わないは無しだぞ」

的確にハリーに退路を断たれてしまった。ぐぬぬ。俺は一度息を吐いてから、改めて溢してしまった言葉の意味を整理し、みんなに話

した。

「パーカーはベン・パーカーから取ったんだ。死んじゃったベンおじさんは昔、電気工事士だったし……パーカーが前面に出るからいい気しないかもしれないし……みんなが良ければ、だけど」

「いいんじゃないかな？」

即答したのはハリーだった。オズボーンさんまで頷いていて、オク・タヴィアス夫妻も。グウエンはサムズアップをして、「うん。他の案で出たものよりもずっといいよ、ピーター」と言ってくれた。

「じゃあ決まりだな」

「パーカー・エレクトロニクスか。早速デザイナーに会社ロゴを依頼しないとな」

「父さん、ロゴは俺がデザインしてもいいかな？」

「ハリー？」

「ベンおじさんには、俺も世話になったからね」

「ああ、もちろんだとも」

これから忙しくなるぞ、と全員が新たな企業……パーカー・エレクトロニクスの準備に向けて動き始めた。それ以上深く触れないにして、ここにいる全員が、不運にも亡くなってしまったベンおじさんのことを思ってくれている。それがたまたまなく嬉しくて、俺は動き始めた全員に頭を下げた。

「みんな、ありがとう」

ハリーは恥ずかしそうにはにかんで俺の肩を叩いてくれる。オク・タヴィアス夫妻やオズボーンさんも同じ、グウエンは背中をさすってくれた。やめろよ、泣いちゃうだろ。

よし！じゃあ新たな出発に向けて頑張るとしますか！！

全員の「おー！」という掛け声と共に始まったパーカー・エレクト

ロニクス……通称、P・E社は、のちに世界を席卷するエネルギー企業へと成長していくと同時に。

世界の平和を守る象徴となることを。

この時の創設メンバーの誰もが知る由もなかった。

忌々しい虫ケラどもめ

まあいい。これでこの世界の足がかりができた

私は負けることはない。この世にインフィニティ・ストーンがある限り……。

最終話

「パーカー・エレクトロニクスとはまた大層な名前をつけたものだと思っただが、叔父のベン・パーカーの死を悼んでつけたというなら話は別だな！見出しはこうだ！若き天才！最愛の叔父の死を乗り越えて立つ！パーカー・エレクトロニクス、オズコープへ反撃！」

「編集長、オズコープは来週には倒産記者会見を行う予定です！」

「まだ倒産してないから問題ない！倒産したら完全勝利の見出しも出せるから二度美味しいからな！新聞の売り上げも二倍だ！」

うわ出た、生のJ・K・シモンズだ！じゃなかった、J・J・ジエイムソンだ！新たに建設されたパーカー・エレクトロニクス社の自社ビルは、ミッドタウン・イーストの5thアベニューの近くある。地理的にいうとセントラル・パークや、ロックフェラー・センターが上階からすぐちかくに眺められる立地だね!!オズボーンさん、よくこんな土地を押さえられたな……借入費用はいくらくらいで……え？買い切った？権力が失墜した富豪の持ってた土地を買って、ビルをぶっ潰して建てた？あつ、そうですか。

で、今日はビルの竣工記念と、P・E社本格始動の記念式典があり、記者会見も予定されている。ハリーやグウエン、オクタヴィアス夫妻もフォーマルな格好をしている。で、その記者会見にきたデイリー・ビューグルを眺めている……というわけではない。

「編集長、奥様からカーペットの色はどれがいいかの連絡が来てるんですが」

「安い色で決まってるだろ！」

「あー、ピーター？これはちよつと悪手だったんじゃない？」

P・E本社ビルの25階。そのワンフロアは「デイリー・ビューグル、P・E支社」と名を打っているのだ。つまり、このフロア全てが

デイリー・ビューグル専用のものとなっている。コーヒーメイカーや昼食エリア、その全てがデイリー・ビューグル色に染め上げられているんだぜ。

デイリー・ビューグルの本社もミッドタウンにあるのだが、向こうのビルは建築年数も結構経っていることもあって、印刷機などの生産設備を残して編集部はP・E支社に移していたりする。

なので、あのクツソ騒がしいJ・J・ジェイムソンが常にこのビルの25階にいらつたということだ。ファンである俺からしたら一日中眺められるが、ハリーやオクタヴィア博士は怪訝な表情を浮かべていた。

なので、改めて説明をしよう。なぜスパイダーマンのネガティブキャンペーンと書いてデイリー・ビューグルと読むような新聞社を自社ビルの中に招いているのか？

「うちの会社もデイリー・ビューグル主催のネガティブキャンペーン被害者の会になるのはそう遠くない未来でしょ？ だつたら身内で困つておいたほうがいいさ」

「まさかJ・J・ジェイムソンを広報部長に据えるとは……」

オクタヴィア博士が遠い目をしながら呟く。そう！ なんと俺がJ・J・ジェイムソンを我が社の広報部長へとスカウトしたのだ！ といつてもデイリー・ビューグルと兼任で、どちらかというど顧問的な意味合いの方が強いけどね！

デイリー・ビューグルはタブロイド紙だけど影響力はニューヨーク・タイムズにも負けてないからな。情報発信をするなら根元から招いた方が色々楽しじゃん？ コラそこ、癒着とか言わない！

「しかし、よくジェイムソンが引き受けたな？ どんなマジックを使つたんだ？」

「あー……マジックというか、偶然というか」

ちなみにJ・J・ジェイムソンと俺は個人的な親交があったりする。え？どこでそんなイベントがあったか？偶然通りかかったところで強盗事件が起こっていて、綺麗なマダムを強盗から助けたのだが、そのマダムがJ・J・ジェイムソンの奥さんだったわけだ。

お礼にと家での食事に招待されて、断るのもアレだったので行ってみるとなんとそこにJ・J・ジェイムソンが!!飲んでたコーヒーを俺にぶっかけるように吹き出して「パーカー!?!」と驚かれた。

それからは編集長ではなくJ・J・ジェイムソンとして色々と交流をしたりしなかったり……具体的にいうと、奥さんの金の無駄遣いへの悩みだったり、優秀すぎる息子に父としての威厳を示せているかという悩みだったり……あの、俺まだ19歳なんですけど……あ、そう見えないですかそうですか。

と、そんなわけで今回の話もJ・J・ジェイムソンにすると二つ返事で承諾。オフィスの引越しをなぜか手伝われたけど無事に我が社へ招き入れることに成功したのだった。

その話を聞いたグウエンは「ピーターってマダム好き?」ってボソツと呟いていた。やめてくれない!?!もしそれJ・J・ジェイムソンに聞かれたら俺は火星の裏側までぶっ飛ばされるか、デイリー・ビューグルの全ての力を使われて社会的に殺されるから!!

「パーカー!?!そろそろ記者会見の時間だぞ!」
「わかってますよ」

広報部長として出席するJ・J・ジェイムソンに連れられて記者会見場へと向かう。

「なあグウエン……ジェイムソンとうまくやってけるの、ピーターくらいじゃない?」

そんな姿を見送ったあと、ハリーとグウエン、オクタヴィア夫妻はコソコソと話始めた。

「それ言ってるかも。オクタヴィアス博士は？」

「あー、パスだな。たぶんノーマンも」

「すでに被害者の会のメンバーだもんねえ」

ちなみにノーマンも被害者の会のメンバーの一人です。



『では、新会社に関する説明は以上となります。記者の方で質問などはありますでしょうか？』

10:00から始まったP・E社の説明記者会見は問題なく進んでいた。基本的には代表取締役就任したノーマン・オズボーンが喋っていて、技術顧問とした俺とオクタヴィアス博士、企画部のメンバーとしてハリー。特に役職を持たなくてもとりあえず席が用意されたグウエンも壇上に上がっている。

P・E社はアークリアクターを前面に出したエコロジー企業だ。ほかにもコクピットモジュール技術や、オクタヴィアス博士の義手技術、ロージの素材開発などなど、話題には事欠かない。

そんな企業説明を終えて各記者達(50%はデイリー・ビューグル)の質疑に答えていると、ある女性記者が手を挙げた。オズボーンさんが彼女を指名すると、凜とした佇まいで彼女は立ち上がる。

「USAトウデイのマーガレット・デリーです。先日のウルトロン・オートマトン事件についてですが、ウルトロンと戦ったフォースメンで、そのメンバーの一人が貴方ではないかと噂されてるのですが？」
『なかなかファンタジーな事案を追っておられるようですが、私は当時はオズコープに拉致監禁されていた身です。貴女の質問のようなスーパーパワーを持つていれば拉致や監禁といった目にはあつてなかつたと思います』

次の質問を、といつてはぐらかすオズボーンさん。内心バクバクである。ウルトロン・オートマトンで、ウルトロンのロボット軍団と戦った俺たち四人は、巷ではフォースメンと呼ばれていて（ファンタスティック・フォーとかじゃなくて良かった……）、そのメンバーが我が社にいるという憶測が飛び交っているのだ。

まあオズコープの大スキヤンダル事件だったし、監禁されていたオズボーンさんがさっさと立ち上げた新会社でもある。なにか疑われなくても仕方ない。

「では、続いてパーカー・エレクトロニクス社の技術顧問であり、アークリアクターの開発者の一人でもあるピーター・パーカー氏にお話をお伺いします」

司会進行役のデイリー・ビューグルのペギーに促されて席を立つ俺。俺が話す内容は主にアークリアクターをどう有効活用して行くかという話や、リアクター稼働で出てしまう廃棄物、酸化イオンをどう再生して有効活用するかなど、オズボーンさんでは答えられない内容がメインだ。席に戻るオズボーンさんからは「ピーター、原稿通りに」と、準備された原稿を渡される。進行についてはこの通りに読むだけ。余計なことは言わない。うむ、簡単なお仕事だ。

『えー、お集まりの皆さん。本日は、パーカー・エレクトロニクス社の説明記者会見に参加していただきありがとうございます。弊社の技術顧問としてこれからは多くの環境問題や課題に……』

「パーカーさん、貴方は蜘蛛男なのですか？」

この記者心臓強いな!? というかフォースメンとまとめて呼ばれるけど、それぞれ愛称があるの？ 蜘蛛男って安直すぎない？ これだからニューヨーカーは……masked riderに出てくる怪人じゃないんだしもう少し捻りとかないの？ そんなことを思っている

と広報部長の席に座るJ・J・ジエイムソンが女性記者に向かって吠える。

「よさないか！君！次変な質問をしたらつまみ出すぞ！」

それでいよいよ分が悪いと悟ったのか、その女性記者は押し黙る。オズボーンさんから「続けて」とアイコンタクトが送られてきて、俺は原稿に視線を落とした。

『えー、あー……………』

どうしたもんかと顔を上げる。

そこで俺は目を疑った。会場の最後尾にある席。招待したメイおばさんが座っている席の真後ろに…………ベンおじさんが立っていた。おじさんは優しく微笑んでいて、壇上に立っている俺を見つめている。

『忘れるな、ピーター』

どこからか、そんな声が聞こえた。目を瞬かせて同じ場所を見た。そこにはメイおばさんしかいない。おじさんの姿はもうなかった。けれど…………。

『大いなる力には、大いなる責任が伴います』

僕は原稿を下げて、まっすぐと記者の人たちを見据える。ピーター・パーカーはずっと真実を隠して戦っていた。どんなときも、どんな世界でも。

君はなぜ、戦い続けるのか？

愛をも捨てて、友も捨てて、すべてを捨てて。

命をかけて、戦い続ける。

けれど、それが多くの人を傷つけた。

正体を隠すという選択を選んだことで、多くのものを取りこぼして

きた。

スパイダーマンは、ピーター・パーカーという個人を覆い隠して責任を背負うヒーロー。

それ自体が、大いなる力で。

大いなる責任だ。

だから……。

『僕がスパイダーマンだ』

その発言で、記者が総立ちになった。

ハリーは呆れ顔で、グウエンはやっっちゃったと言う顔で、オクタヴィアス夫妻は「やっぱり」という顔で、オズボーンさんはどこか困ったような顔をしていた。

これから大変なことになる。

でも、俺は明かそう。

その全てを。

今度こそ、なにも失わないために。

エンドロール

時間は深夜になろうとしていた頃。

ウルترون・オートマトン事件を発端とした「フォースメン」の登場。そして俺が「スパイダーマン」であることを公表した「パーカーショック」のおかげでどえらい目に遭った。オズボーンさんや、オクタヴィアス博士から軽く怒られて、ハリーからはすごく低い声で「正座」って言われて「……っス」と有無を言わさず説教を食らった。（誰かがセーブポイントとか言ってる気がするが気のせいだろう）

グウエンからは茶化されながらも「今度はデートに付き合ってね」とか言われるし。いいんか？ 異世界のピーター氏と恋仲やったんやろ？ と聞くと、「昔は昔、今は今よ」と言い切りやがったですよ。まあ世の中どうなるかわかったもんじゃないし……なによりゾラこと、ウルترونが「インフィニティ・ストーン」の存在を示唆していたのだ。この世界に激ヤバストーンがあるのかは不明だが……あつたとしたらタイムストーンとかいうとんでもストーンがある。

もしかするとグウエンが失ったピーターを取り戻せるチャンスもあるのかもしれない。だから、デートに誘われても俺はグウエンに本気にはならないようにしようと思う。原作のMJとかの女性関係見る限り、トビー・マグワイアスパイダーマンは女難の相があるのは間違いないからね！

さて、「パーカーショック」でJ・J・ジエイムソンから独占取材を受けて「若き天才！ 蜘蛛男となる！」とかいう記事を書かれて頭を抱えたり。

ちなみにハリーが「スパイダーマンのほうか語呂は良くないか？」と言うと編集長も「それだ！」って言って一面を差し替えてた。俺？俺はスパイダーマンのコスチュームきてカメラマンの前でポーズを取ってた。

止めるよ親友（ガチギレ）

あとは記者団からもいろいろな質問攻めにあったり、企業方針の中にスパイダーマンの運用方針が盛り込まれたり、無闇やたらとスーパーパワーを使うなど釘を刺されたり、研究室に缶詰にされたから腹いせに腕時計型の超小型通信デバイスを開発したらバカ売れしてオズボーンさんとハリーに「加減しろ」と怒られたり、研究に行き詰まったオクタヴィアス博士と自作したアメリカンチョップパーで大陸横断して怒られたりと、怒涛の日々を過ごしていた。

そして今日は、子会社時代にハリーと一緒にめぼしいベンチャー企業と面接していた頃に知り合ったアルドリッチ・キリアンと会っていた。彼が提唱するエクストリミス理論について色々と話し合った結果、人体への影響などについてデータを集め、今後はパーカー・エレクトロニクス社がバックについて研究を進める話で落ち着いた。

「あー全くもって疲れた！A. I. Mの資本金出資の件でこうも時間が取られるとは……」

ていうか、彼……アイアンマン3の宿敵だったような。障害は確かにあったが、その頭脳は天才のそれだ。危険な要素はまだまだあるが、エクストリミスは人体科学の新たな扉を開く可能性に満ちた研究でもある。兵器転用は社内規定で禁止事項としているので、清い研究と付き合いをしていきたいものだ。

深夜まで食い込んだ打ち合わせを終えた俺がオフィスに戻る。入り口は開いていたのでおそらく研究に行き詰まって唸り声を上げてるオクタヴィアス博士か、酒を飲むハリーがいるかと思っただが……オフィスは真つ暗で誰もいなかった。

「ハリー、オクタヴィアス博士……まだ残ってる？」

両手に抱えたA. I. Mの研究資料をとりあえず脇に置いて部屋の電源をつけるが……照明がうんともすんとも言わない。おかしい。明らかに異様な気配。スパイダーセンスも反応を示している。警戒

しながら自分のデスクがある部屋へと足を進めると……。

「夜分遅くに申し訳ない。突然の来訪をどうか許してくれ」

ニューヨークの夜景が見えるガラスの前。俺に背中を向けているデスクチェアには一人の男が座っていた。

「君がスパイダーマンであると……スーパーパワーを世に知らしめたことで、状況は変わりつつある」

男は静かに立ち上がると、ゆったりとした足取りで入り口に立っている俺の元へとやってくる。なんだか……知っているシチュエーションだぞ、これ。

「貴方は……誰ですか？」

あえて聞く。すると街明かりの光が歩いてきた男の顔を照らした。

「ニック・フューリーだ。アベンジャーズ計画について話がしたい」

t o b e c o n t i n u e d

Vol. II 蜘蛛男とアメリカのケツ プロローグ

「辛いんだ……僕はもう……戦いたくない」

ゆったりとした1人がけのソファに腰掛けるステイブ・ロジャース。

彼の雫のように溢れる本音を、俺は静かに聞いていた。部屋の内装は年代物のクラシックで囲まれていて、ラジオから流れてくるのは第二次大戦直前に行われてきたメジャーリーグの実況中継だ。

この部屋だけが、あの時代に取り残されたようだった。フツドレストに組んだ足を乗せてくつろぐ反面、ロジャースの顔はどこか寂しげだった。

「気持ちわかるよ、ロジャース。僕も同じだ」

「君は望んでその力を手にしたのかい？」

「偶然ではあったけど……まあ、望んでもいたね」

コロンビア大学で蜘蛛に噛まれるというのは偶然ではあったけど、俺にとつては必然だった。望んで得た力だし、なによりそれを望んだのも俺だ。あそこで蜘蛛に噛まれなかったらどうなっていたかだつて？ウルトロンがインサイト計画を実行して世界がヒドラの統治に震えていただろうね。まあそのヒドラも軍上層部が情報統制して組織ひっくり返す勢いで人事異動(オブラートな言い方)をしたから、世界は今も平穏なわけだけだ。

ロジャースは事のあらましを聞いても、静かに頷くだけだった。彼がかつて「キャプテン」であったと言っても、この病院にいる看護師やドクターは信じないかもしれない。

「そうか……その力を手にして、そうやっていられるんだ。君は立派な人間なんだな」

「ロジャースは、力を手にしたくなかったのか？」

「……望んではいたよ。誰かのためになれると信じていたし、祖国を守りたいと言う気持ちもあった。それに嘘はない。ただ……」

そこまで言って彼は口をつぐむ。ロジャースのベッドサイドを見ると当時の写真がずらりと並んでいた。まだ「ステイブ・ロジャース」として生きていた時代の写真。その中にはキャプテンとして生きていた彼の写真はなかった。

「自分を守ることができなかった……」

超人的なパワーを手にして、悪であるヒドラを倒す力を手にして、戦って、戦って、戦い尽くして、最後は祖国を守るために氷河に散って眠りについた男のたどり着いた結果がそれだった。

「笑える話さ。人類を超越した力を持つてるくせに、友も救えない。酒にも酔えない。レディとの約束も守れない。そして……こんな時間になるまで眠りこけてるのだから」

ロジャースはそう言って葡萄ジュースが入ったグラスを持ち上げる。今の時代のグラスは高品質すぎて割れてしまうと、彼が使うのはステンレス製の強固なグラスだった。一口葡萄ジュースを呷る。酒に酔えないのだから、ジュースも酒も変わらない。けれど、今のロジャースが望んでいることは間違いなく現実逃避だった。

「昨日まで単純明快な悪があって戦っていたのに、それが今じゃ曖昧だ。何が正義で何が悪か……グレーな世界でこの力は危険すぎる……」

「ロジャース」

「ピーター。君ならわかるだろう？力を授けられた君なら……」

人ならざる者になってしまったが故の苦勞。理解者は全員、とうの昔に死んでしまっている。彼の愛した相手は4人の孫に囲まれていて、幸せな余生を過ごしたという。彼女の胸にどんな想いがあるのかはわからないが、その事実を知ったロジャースに、約束を違えた彼女に会いに行く勇氣は湧かなかった。

空になったステンレス製のグラスを眺める。試合の中継が終わりを迎えた。

「今日はありがとう。また来てくれると嬉しい。君はこの世界での唯一の理解者だからね」

「ああ、また来るよ。ロジャース」

そう言つて俺は、バインダーを閉じて席を立つ。今日のカウンセリングは終わりだ。ロジャースと握手を交わすのだった。



「どうだった？キャプテンは」

「無理、彼はキャプテンじゃない。力に戸惑った少年のような人さ」

プレスビティリアン病院を後にした俺を待っていたのは真つ黒なコート姿……ではなく、スーツ姿のニック・フューリーだった。ワールドがないこの世界でニックの格好はあまりにも目立ち過ぎる。そもそも「この世界の人間じゃない」フューリーには関係のない話かもしれないが、世の中は体裁というものが必要なのだ。

「カウンセラーの意見はわかった。だが彼はキャプテンだ。そうならしてもらわなければ困る」

「あのさ、眼帯の黒幕さん。世界におけるアメリカのケツを叩き上げてキャプテンにしたい気持ちはよくわかる。けど無理だ。そう簡単な話じゃない」

冷淡に言うフューリーに俺はそう返す。キャプテンもあの「キャプテン・アメリカ」ではない。確かに彼はステイブ・ロジャースで、人類最初の人工超人で、そして第二次大戦を戦い抜いた拳句、氷河で半世紀近く眠っていたのだ。

だが明確に、彼はキャプテンではない。キャプテンで居続けるための何かを見失い、傷つき、倒れている。病院の一室に引きこもってここはまだ第二次大戦の只中だと言い聞かせて現実から目を背けている。カウンセラーとして接している俺が彼と現在を繋ぐドアだ。

だが、俺はドアでしかない。扉を開くのはステイブ・ロジャース自身で、その役目は俺には無い。当然、フューリーにもだ。

「ここには明確な悪はいない。いるかもしれないよ？路地裏でカツアゲしてるヤンキーの兄ちゃんとか。けどキャプテンがぶん殴るほどじゃない。そんな真似したら死んじゃうからね」

そう言つて俺は目についたカツアゲをする男を手首からウェブを出して拘束する。カツアゲにあつていた男性からは感謝されるが、俺は軽く手を上げて気にするなと答えた。

「僕もスパイダーマンだ。だけど力は正しい時に使う。蟻を潰すために核弾頭を持ち出すバカはいないよ」

街の治安を良くするためとは言つても、この力はあまりに危険すぎる。オクタヴィアス博士やオズボーンさん、ハリーも言つていた。大いなる力と大いなる責任。それ以前に大いなる力は災いになると。

「じゃあ君はナイフを持った悪党を指を啜えて見ておけと言うか？」

「目に目を歯に歯を。その次は？そうやって世界は少しずつおかしくなっていくんだ。バランスを間違えた結果、どれだけの血が流れた」

彼は知っている。俺が、別のアースからやってきてピーターに憑依した存在であること」を。フューリーは小さく息を吐いて、俺の肩を叩いた。

「……だが、蟻じゃない敵もすぐそばまで来ているぞ」

「そう言い残して喧騒へと消えてゆく。
空を見上げる。」

少し雨が降りそうな天気だった。

第一話

時は戻って数ヶ月前。

パーカーシヨックによる情報錯乱も落ち着きを取り戻し始め、デイリービューグルはいつも通りに営業を再開。各新聞社やメディアも執拗にパーカー・エレクトロニクス社の報道を追うことをやめていた。え？なぜそんな簡単にやめたかつて？

それは俺が研究に行き詰まりすぎて錯乱しかけたオクタヴィアス博士をたぶらかし……ごほん、説得して、小型化したアークリアクターの開発と腕時計型のデバイスを開発し、そのデモンストレーションをやったからである。

もちろん、発表してもいいよね？ってオズボーンさんにも確認は取ったし、外観はいつも通りハリー・オズボーンの力作デザイン。研究者のノリと勢いは恐ろしいもので、デバイスが出来上がった時は「勝ったな!!ガハハハ!!」とオフィスでみんな巻き込んだ打ち上げをして、そのままデモンストレーションの会場と記者会見場をオズボーンさんが押さえて、翌日二日酔いで痛む頭を抱えながらやらかしたことも頭を抱えてしまったのだった。

パーティ前に1人冷静だったグウエンが「嫌な予感がする」って言っていたけどその予想は見事的中することになる。

そもそもパーカー・エレクトロニクス社はエコロジー企業である。電子端末メーカーじゃ無いし、オズボーンさんの起業方針では当面アークリアクターを活用した南極発電所を建設し、海底パイプで全世界へのエネルギー供給網を広げていくと言う企業戦略だった。

肝心のアークリアクターはすでに実用段階一歩手前で毎分2.5 GJの発電量を達成。サイズは少しアップしてしまうが、廃棄物はリサイクル可能な代物なので従来のシステムよりもクリーンなエネルギー供給が可能となっている。

発電時の熱エネルギーもないので土地が有り余っている南極の一角に研究所を設けてついでに大規模発電施設も作ってしまおうと言

うプロジェクトがようやく始まり出したタイミングで……俺がデバ
イスを発表してしまったのだ。

だってしょうがないじゃん。アークリアクターの目標までの目
処付けは終わってるから、あとはストローム博士とかにぶん投げて改
良型のロールアウトお願いしてるし、オクタヴィアス博士もハリーも
改良型の開発とかやる気おきねえって好き勝手開発し始めるし。
じゃあ俺も開発しちゃうおっかな★って手を出したら、この有様であ
る。資金提供を申し出る書類の山を見て頭を抱えるオズボーンさん
の姿はどこか珍しかった。ほんとすいません、強く生きて。

で、俺発案、オクタヴィアス博士&ハリープレゼンツで開発した腕
時計デバイスはまさに画期的で、光学モニター搭載。タッチパネルで
の操作や時計だけではなくメールや通話、健康管理やマップ機能など
など……スパイダーマンスーツで開発したあらゆるガジェットを詰
め込んだ夢のツールになっている。时期的にサムライミ版スパイ
ダーマン1の終盤である。うん、完全にオーパーツですね!!

それを一般市場に流したらどうなるか? まあ、とりあえずパー
カー・エレクトロニクス社の製造ラインは死んだよね。

各国から受注が殺到。テストロットもすぐに底をつき、次回ロット
の製造も予約でいっぱい。国営機関への販売で留めたけど予約は3
年先まで埋まっっていて、それを聞いた時は変な笑いが出たわ。バー
ジョンアップとかしたらどうなんだ? って聞くと、ハリーは「加減し
る馬鹿」と頭をひっ叩いてきた。酷い。

そんなわけではらくは迂闊に何も作るなど厳命されたので、暇を
持て余すことになった俺とオクタヴィアス博士とハリー。

ハリーはMJと卒業旅行でヨーロッパに行っちゃったし、マブダチ
になったフラッシュはアメフトのプロリーグに合格してクソ忙しく
てあんまり会えてない。ちなみにプロリーグ合格記念パーティーに招
待されて行ったんだけど、パーカー・ショック直後だったのでえらい
目に遭った。フラッシュ、「スパイダーマンとマブダチなんだぜー」っ
て肩組んで写真撮りまくってたなあ。まあ事実だからいいんだけど。

自粛期間、何しようかと思ってたけどオクタヴィアス博士が暇だし

バイクでも作るかって言い出したので「じゃあアークリアクターで動くエンジンからだな」ってなつて、エンジンからフレーム、バッテリー関係も全部改良しまくつてとんでもねえバイクが出来上がった。

性能？オズボーンさんにプレゼンしたら「絶対公表するな、いいな？絶対だぞ」って釘を刺されるレベルです。

まあ無補給でアメリカ東海岸から西海岸までを四往復できるカタログスペックだから仕方ないね!!（四往復も動力よりもフレームや消耗品が死ぬから）

それで、出来上がったバイクの試乗でオクタヴィアス博士と2人でアメリカ横断旅行を決行。ロージューとグウエンも誘ったけど、オズボーンさんの補佐で死んでるから無理と断られちゃったぜ。

2人でぶらりロサンゼルスまでの道のりを向かつてる最中、オクタヴィアス博士がハイウェイで出来ている人だかりを発見。何事かと思に行ったらクレーターがあった。屈強なトラックの運ちゃんたちや、ライダーたちがクレーターの真ん中にある「ハンマー」を持ち上げようと四苦八苦している。げええ!!それって、あれやん!雷の神様のハンマーやないかい!!

事情を聞くと、先日、スタン・リー似のおっちゃんのトラックの荷台をぶち抜いてハンマーが落ちてきたみたいだ。で、大渋滞の中、トラックの運ちゃんたちがクレーターの真ん中にあるハンマーを発見。持ち上げようと奮闘していたようだ。

それって選ばれし者しか持ち上げられんハンマーなんだよ……、俺は異世界転生トビー・マグワイアピーター・スパイダーマンなのでたぶん持ち上げられません。というか世界観どうなってるの?ここつてサムライミ版スパイダーマンじゃないの?まあもう全部ぶっ壊れてると思っけどき!!

と、そんなことを思っていたらオクタヴィアス博士が軽々とハンマーを持ち上げてました。はあ!!?なんで博士持ち上げられんの!?

ソーのハンマーを持ち上げたことで運ちゃんやライダーたちが大はしやぎ。みんなで写真撮つて、オクタヴィアス博士はとりあえずハンマーを元の場所に戻しました。

ええ……なんで持ち上げられたの。あれか？トリチウムの研究が
終わってアークリアクターもできたから野心がなくなったんか？い
や、義手開発で毎回発狂してるから野心はあるだろうけど……博士は
ぜひ持ち帰って研究したいとか言ってたけど、荷物になるし絶対や
だつて俺が拒否したので事なきを得ました。

とりあえずこの世界のどこかに雷神様がいるのが確定した事実だ
けでお腹いっぱいなんやで……。

そんなデンジャラスアメリカ横断旅行を終えて、普段の生活に戻ろ
うとしていた頃。

事件は起こった……。

第二話

どうしてこうなった。

オクタヴィアス博士との弾丸★アメリカ横断旅行から帰国して、デイリービューグルに2人で見たこともないアメリカンチョップパーを乗り回すところを「若き天才とドクターオクトパス、アメリカを走破する!」という見出しですつぱ抜かれて、「そのバイク何!？」と流行り始めたSNSやネットニュース上位を独占する事態に陥って2人揃ってオズボーン親子に怒られると言ういつものパターンから一週間後。

ハイウェイのど真ん中に雷神様のハンマーがドカンとあつたので、この世界にファンキーな雷神様がいるとは予想していたが……。

「うう……父上え……なぜですかあ……」

なんで裏路地のゴミ捨て場に雷神様が寝っ転がってるんですかね!?!先日、ローカル紙が謎のミステリーサークルがニューヨークに!?!という記事を目にして「いやあ?まさかあ?」とは思ってたけど、まさかまさかだよ!?!この世界ほんとにどうなってんの。げえっ、まじでクリス・ヘムズワースのマイティ・ソーやないかい。セルヴィグ博士とジエーン・フォスターさんマジで仕事して?1人裏路地に持ってきたゴミ袋を両手に下げて天を仰ぐのは、我らがトビー・マグワイアピーターズパイダーマン転生者ですよ。

ほんとどうするよこれ。放置してても絶対に厄介なことになるよなあ、これえ。なんたつて雷神様だもの。今の見た目は完全に流浪者のそれだけど。マジでふざけんなフ○ツクツ



「というわけで拾ってきました」

「もう定員オーバーです。捨ててきなさい」

浮浪者は出荷よー。そんなあ（・・ω・・）

と、そんなやり取りをするのは困った時に助けてくれると思っ
てる友人のアルドリッチ・キリアン君です!!とりあえず肩に背負った流
浪者ことソーをソファーに寝かせる。「ああ!そのカバー買い換え
たばかりなのに!」とアルドリッチ……ええい、めんどいからアルで
いいや。そうアルが喚くが、このカバー買ったの俺なんですけど?若
干潔癖のきらいがあるアルの抗議を無視して、俺はこれからどうす
かをアルに相談する。

「と言うわけでここで面倒見てくれない?」

「お前は一体何を言ってるんだ?」

だってしようがないじゃーん。ウチのオフィスは今厳戒態勢(主に
俺やオクタヴィアス博士がろくでもない……しかし利益にはなる発
明をしないように)で、そんなところにズタボロのソーを持って行っ
ても「また厄介ごとを持つてきたのか!夕刊の一面にするぞパーカー
!」ってJ・J・ジエイムソンにブチギレられるのがオチだし。

ちなみにアルこと、アルドリッチ・キリアン……アイアンマン3で
トニーの宿敵となる相手となぜこんなに仲良くなっているかと言
うと、トニーの代わりに俺がアルのエクストリミス理論の話を聞いて、
その出資を決めたからである。

アイアンマン3では、トニーが約束をすっぽかしてアルを寒空の下
で放置したのがきっかけで恨まれるんだけど、俺はそうはしなかつ
た。と言うか、ほっといたら厄ネタ間違いなしなエクストリミス理論
をどうして放置できるか?

アルとの出会いは、俺がハリーとオクタヴィアス博士とでアークリ
アクターを作ってから、オズボーンさんから若くてエネルギーのある
新鋭研究者をヘッドハントしろという指示を受けたのがきっかけで、
アルは募集をかけた面接にきた研究者の1人だったのだ。同席して
いたハリーはあんまりリアクションしてなかったけど、俺がアルと出
会った時のリアクションは驚愕そのものだった。というか、この時代

から君エクストリミスの研究してたの？マジか？時代的にはトニーが若くてブイブイ言わせてた時期だから、あまり間違ってもいないと言えなくもない……。

と、そんなわけで俺はアルをヘッドハント……というか、アルが希望したA・I・Mの出資を申し出たのだ。もちろん、金を出すだけではなく技術的な協力も惜しげもなく行つた。エクストリミスは画期的なバイオテクノロジーだけど、いかんせん危険がやばすぎる。失つた四肢を取り戻せるけど、適合しなかつたら人間爆弾になるとか欠陥もいろいろだ。

俺はアルの研究理論を聞き、安全なエクストリミスの開発に乗り出したと言うわけだ。まあ安全マージン取ってるから研究自体は遅々として進みが悪いけど、そこで急かして人間爆弾ツが爆誕したら元も子もないので、出資は潤沢に研究をしてもらってる。

面接しにきた時のアルはそれはもう酷い姿だったが、パーカー・エレクトロニクスとの共同研究になってからはかなり身持ちも小綺麗になつている。まだエクストリミスが完成してないから杖生活だけど、顔立ちはガイ・ピアースなので小綺麗にするだけでイケメンになつてるよ!!

「あのな、ピーター。いくら君の頼みとは言え……浮浪者をここに置くのはどうかと思うぞ。A・I・Mは慈善事業団体じゃない」「いやまあそんなんだけど……」

「それになんでこんな浮浪者を……ピーター、君の優しさは私も評価しているが、これは少々やりすぎだぞ」

うむむ、そう言われるとグウの根も出ない。しかしここで、「この人はアズガルドの王子で雷神ソーなんですよ!! 訳あって今は神の力を無くしてるけど放っておくと厄介なネタしかならないから匿つてくれない?」って正直に言えば、今度こそアルにぶん殴られる。いやぶん殴られるくらいならマシか? 最悪これまで築いた関係もぶつ飛びかねん。

やはりソーは俺の手でどうにかするしか……。

そう考えていると、のそりとソファに横たわっていた人物が起き上

がった。

「……………」

ひえ、クリス・ヘムズワースが俺とアルを見てる。かつこよ……じゃねえわ。2人揃って浮浪者風貌のソーを見てみると、「ぐうぐう」と部屋に大きな音が鳴り響いた。

「あー……とりあえず母さんが作ったミートローフがあるけど、食べるかね？」

おっかなびつくりで言うアルに、浮浪者風のソーは静かに頷いた。ちなみに余裕ができたのか、今作のアルドリッチ・キリアンは割とマザコンである。



それから、アルのお母さんが用意してくれたであろうミートローフを平らげた上に、予備で置いていたシリアルとココナッツミルクを完食、まだ足りないようだったので懇意にしている中華料理の出前を頼んで、300ドル分くらいの料理をペロリと平らげたソーは、備つきの手拭いで顔を拭いてから俺とアルに「うまかった」と感謝の意を示した。

おかわりを要求する時にグラスを叩き割ったときはどうなるかと思っただけど、俺がアルを宥めてことなきを得たからよかった。ちなみにおかわりをしたいならそう言ってくれと言ったら素直に従ってくれたので、ソーは根は真面目な奴なのは変わらないらしい。

さてお腹も膨れて落ち着いたのか、ソーは自分の身の上話をし始めた。自分はアズカルド、オーデインの息子、ソーである

く中略く

巨人族に喧嘩を売ったことを父に咎められ、その罰に力を奪われて、ハンマーと共にこの地球に送られたと。俺とアル？ 壮大に話すソーの話を聞きながらポップコーンを食ってたよ？

それで、最初はニュー・メキシコ州に送られて天文学者のセルヴィグ博士やジェーンと出会ったらしいが、ハンマーのことを知り、1人アメリカを横断。ハイウェイにあったハンマーを持ち上げようとしたが、力が奪われた今では持ち上げることができず、失意の中、意気勇んでジェーンたちの元を去ったことからおめおめと帰るわけにもいかず、そのままニューヨークまでたどり着いたところで力尽きたと。

おま、なんでここまで来るんだよ!? (率直な意見)

ちゃんと序盤でセルヴィグ博士とジェーンに会えてるならそのまま戻ればよかったのに……あつ、そう言えばこの世界にシールドがないもんな、ハンマーも監視対象になってなかったから捕縛されるようなこともなかったから、そのまま荒野を彷徨ってたら哀れに思ったトラックの運ちゃんに西海岸側まで送ってもらったと。逆方向や運ちゃん……!!

「……あー、そのー、それで?アズカルド人の君はこれからどうするつもりだい?」

ちゃんと相手の設定(と思ってること)に合わせてくれる我が友アルくん。そう優しく諭すというアルに、ソーは「わからない」と小さく呟く。

「死にそうになりながら……まあ、俺は簡単に死なないが……荒野を彷徨い、あの鉄の箱を運転する男に助けられ、そしてこのニューヨークにやってきた。1人で死にそうになりながら……まあ、俺は簡単に死なないが……色々考えた。なぜ父上は俺の力を奪い、この星に送ったのだろうか……」

人間……と言っつていいだろうか?兎にも角にも、生き物というのは死に直面すると色々と考えてしまうらしい。それはアズカルド人も例外ではないようで……偉大なる雷神ソーはニューヨークの街を彷徨いながら自分自身に向き合っていたようだ。

自分はなぜ力を失ったのか。なぜハンマーを持ち上げられなくなったのか。なぜ、この星に送り込まれたのか。

考えれば考えるほど、父の考えがわからなくなっていくソー。それ

からほどなくして彼はゴミ捨て場に倒れ、それを俺が発見したという。なんという運命の巡り合わせ。トビー・マグワイアピーターの運命を変えたらアベンジャーズの世界になるなんて誰が予測できたか。いや、まだトニーとアメリカのケツがない。ソーがいるだけだ。まだワンアウト。まだ慌てる時間ではない。

するとソーは立ち上がり、「お前たちには命を救われた。ジエーンやセルヴィグに次ぐ地球の友だ」と感謝される。そう言っ出て行くとするソーに、アルは問いかけた。

「これからどうするのかね？」

「わからない……だが、ここにはお前たちには迷惑をかけてしまう」

「ソー。君の話が本当ならば、君は父君の投げた試練を越えなければならぬのではないか？」

そう言ったアルにソーは目を見開く。アルも……言い方は失礼だが振り切った方の天才だ。障害のこともあるので、相手が自分をどう思ってるかを見極める力を持っている。……まあ、トニーの時は憧れの相手に会えたことや、アルに余裕がなかったのもあるだろうが……それでも、アルにはソーが嘘を言っているようには見えなかったらしい。その割にはポップコーンたべて楽しんで聞いてたけどさ!!

「君の傲慢さが父の怒りを買ったのなら、その傲慢さこそが君の力を取り戻すきっかけになるんじゃないのかね？」

「俺の……傲慢さ……」

「親からの試練なんてものは、案外足元に答えがあるものだよ。私の経験則だがね」

そう言っアルは少し待っていたままと自室に入ると、使い古しの服をいくつかソーに渡す。

「その見た目ではどこに行っても爪弾きものにされる。せめて見た目

は整えたほうがいい」

「ありがとう、地球の友よ」

「アルドリッチだ。親しい奴はアルと呼ぶ。隣のこいつのようにな」

そう言つてアルが俺のことを杖でついた。割と痛いからやめて？

そんな様子を見てソーが小さく笑い、口を開いた瞬間。

ニューヨークに地響きが鳴り響いた。

第三話

アスガルドの戦闘ロボット、デストロイヤー！

デストロイヤーではない。デストロイヤーアーツ!! 発音が肝心である。あとここはニュー・メキシコ州ではなくニューヨークです。

どうもこんにちは。

ピーター・パーカーがニューヨークのパークアベニューよりお送りします。

アスガルドの王子たるソーとの会話中に起こった轟音は、アルのA・I・Mラボのすぐ近くが音源だった。思わず外に飛び出すとあらやだ、ツープロック先辺りに全身メタルのデストロイヤーアーツ!! がいるではないですか。

ほんとにこの世界どうなってるの? なんでデストロイヤーがおるねん。

ソーがここにいるから、嫌な予感は一たけど……主に笑いの神ことイタズラ神、ロキについて警戒してたんだが、まさかデストロイヤーがここにくるとは予想しとらんでしたわ。はっはっはっ、参ったね。

ちなみに映画版では復活したソーにぶっ壊されたデストロイヤーだが、原作ではめっちゃくちや凶悪な相手である。

はるか昔、セレスティアルズと呼ばれる宇宙生命体が地球の人類に對して遺伝子実験を行い、この実験が、超人的な能力を持った人間が次々と現れるようになるきっかけを作ったとされている。

セレスティアルズは千年後に再び地球を訪れることを決定し、もしその時に人間の進化が十分でなければ、惑星ごと滅ぼすという恐ろしい計画を立てていた。

そのことを知ったアスガルドの神々は、地球の破滅を阻止するための対抗手段としてデストロイヤーを製作。デストロイヤーは神々の頂点に君臨するオーデインが製作し、アスガルド原産の未知の金属

「アンチメタル」からできたボディはオーデインの魔力が注がれさらに強化された。

というのが原作の設定。驚くことなかれ、映画ではソーが粉碎したデストロイヤーだが、そのボディはアスガルド原産の未知の金属「アンチメタル」でできている。

アンチメタルは、アダマンチウム、ヴィブラニウム、ソーのハンマーの原料でもある神秘的な金属ウルよりも高い硬度を誇っているとされているという激ヤバ金属なのだ。

えーっと、設定によると、この「アンチメタル」という金属は、滅びた異星の神々の死骸が数えきれないほどのビッグバンやビッグクランチを耐え抜き、その過程で金属化したものである。うん、普通にやべえわ。

世界樹ユグドラシルの根の最深部から発掘されたこの金属を、周囲の宇宙ごと歪ませながら加工して作り上げられたのがデストロイヤーのボディなのだ！

さらに内部骨格には神秘的な金属ウルが惜しげもなく使われており、デストロイヤーを破壊するのは事実上不可能とされている……映画でデストロイヤーをぶっ壊したソーの力は一体……。

しかも火力がやばいのなんの……まず指がビーム砲、高熱や電磁プラズマなどの莫大なエネルギーを放出することができる。その威力は都市を丸ごと吹き飛ばすほど。

また周囲の磁場を操ることができ、敵を引き寄せるトラクター・ビームを搭載しているほか、最もやばいのは、顔面にあたる部分に搭載されている元素崩壊ビームだ。頭部のバイザーを解放して放たれる元素崩壊ビームは、その名の通り命中した物質の元素を崩壊させて甚大なダメージを与える。

このビームを受けた物質は、神秘的な金属ウルであつても耐えることができない。また、足の裏に刻まれた重力制御のルーン文字のおかげで、空中を移動することもできる……と。

はーん、さてはこの世界の神であるサム・ライミ監督が異世界転生者であるトビー・マグワイア・ピーター・パーカース・パイダーマンを

殺しきてるな？ 今日の前で暴れてるデストロイヤーが原作基準の性能だった場合、先日タイムズスクエアで戦ったウルトロンの愉快的なスクラップくんたちがおもちゃに見えてくるぞう。

とか、現実逃避の思考をぐるぐる巡らせていると、俺を追って出てきたソーとアルも大暴れしているデストロイヤーを見て驚愕の表情をしていた。

「ピーター。君にも見えてるか？ 私の幻覚だと信じたいのだが……」
「あれはアスガルドの最強の兵器、デストロイヤーだ。なぜここにいる!!」

ソーが地球に追放されてる段階で、話的には映画路線だと思うけど……あのデストロイヤーが激ヤバロイヤーの場合、地球存亡の危機になるのは間違いない。

ソーはどうかしようと思いを巡らせているようだが、力が封じられている今はどうすることもできない。

今の彼にはスーパーパーパワーはない。
けれど、ここには……俺がいる。

ドンつと音が響き、目の前にあった車が爆発と共に跳ね上がった。俺はスーツも何も着ないまま、飛び上がり、手首からウェブを放つ。浮き上がった車の慣性をウェブで殺して、そのまま車のボンネットに着地して一緒に地面へと降りた。今の一連の流れを見て、正体を知るアルは「少しは加減をしろ」と呆れ、ソーはあんぐりと口を開けて着地した俺を見ていた。

「ソー、アル。とにかく住民を安全な場所に誘導して。僕はアイツのケツを蹴り上げてどうにかするよ」

2人にそう頼んで、俺はウェブをビルに放って一気に飛び上がる。相手はデストロイヤー。映画だろうが原作だろうがアスガルドの最強の兵器だ。心許ないが、どうにかしないとパークアベニューが更地

になってしまふ。逃げ惑う人とは逆方向に飛び、全身メタルのデストロイヤーへと距離を詰める。

ふと、視界に一台の車が入ってきた。あれ？おかしいな。よく見る社名がバンの側面に書かれているぞ？

「こちら、ニューヨーク、パークアベニューよりデイリービューグルがお届けします！ご覧ください！全身メタルのロボットが街で暴れています！視聴者よりの情報で我々が独占生中継を……」

げえっデイリービューグル!!しかもP・E支社でよく顔を見るアナウンサーとカメラクルーやないかい!こないだJ・J・ジエイムソンにバイクの件でとっちめられたときにコーヒーを渡してくれたのでよく覚えてるよ!!目と鼻の先で暴れるデストロイヤーをモノともせずに生中継をする無謀とも考えなしとも取れる行為には脱帽ものだけど、危険がやばいよそれは!!

言ってる間にデストロイヤーがテレビ中継をする2人にロックオン。顔のバイザーが開いて激ヤバビームを放とうとしてる。うわああああ待て待て待て!!

悲鳴を上げる間もなく光が飛び出した瞬間、俺は2人の前に飛び出して近くにあった車を「どっこいしょお!!」という掛け声と共に持ち上げて簡易シールドにし……アチアチアチチチチチ!!焼ける焼ける焼ける!!

あまりの熱線に手が火傷してしまい、咄嗟に車を蹴っ飛ばしてビームを放つデストロイヤーに叩きつける。ついでにあたりでぶっ壊された車とかもウェブで振り上げて怯んだデストロイヤーに叩きつけまくった。

「パ、パーカーさん!!」

「今はどっちかな?ピーター!?スパイダーマン!?めんどくさいからパーカーマンでいいよ!とりあえず逃げるよ2人とも!!」

「えっ、ちよっ……」

返事は聞いてない!!とりあえず2人をまとめて引っ搦んでウェブで離脱する。火傷で手が痛いけど気合いと根性とガッツで耐えるしかない。2人を搦んだまま近場のビルの屋上に到着。そこに下ろして、俺はすぐに手すりへと身を乗り出した。

「ここならまだ安全だと思うけど、身を乗り出したらさっきの激ヤバビームが飛んでくるから中継はほどほどにね、2人とも!」

《パーカー!!今そこにいるのか!!特ダネだ!!なんとしても映像を押さえろよ!!》

うわ出たJ・J・ジェイムソンだ。編集長のがなり声にカメラクルーはすぐに立ち上がって下で暴れ回るデストロイヤーにフォーカスを合わせた。

「パーカーさん!!」

アナウンサーの子が俺を呼び止める。手すりに身を乗り出して振り返ると、アナウンサーは心配そうに俺を見つめていた。

「ありがとう、スパイダーマン。お礼は言いたいから……必ず生きて戻ってきて」

そう言って死にかけてた恐怖を押し殺して微笑む彼女に、俺は上着を預けてこう返した。

「まかせて。僕は……スパイダーマンだから」

その言葉と共にビルから飛び降りる。それを察知したのか、デストロイヤーがバイザーをあげてこちらに狙いを定めてきていた。うわやべ。ウェブで身を翻して飛んできたビームを避ける。ズボンの裾

が焦げた。くそが、これグウェンとのデートで買ったやつだぞ!!

ビームを避けて横へと回り込みながら手首から固めたウェブを放って注意を引きつける。あんなビーム撃ちながら暴れられたら堪ったもんじゃない!!

「ウエンディ!!ウエンディ!!聞こえる!?!」

《いつでも聞こえてますよ、マスター》

腕時計型のデバイスから呼びかけるとマイスーパーPCにいるA I、ウエンディが軽やかな声で応じてくれた。ごめんな、普段カーナビ代わりに使ったりして!

《データ解析をしましたが、あれはウルترونシリーズではありませんね》

うん!知ってる!その言葉はポーピーと頭スレスレを通ったデストロイヤーのビームを避けるために飲み込んだ。髪の毛焦げたぞこれ!!

《外部よりのアクセスは不可。そもそも地球の技術ではない言語プログラムでの遠隔操作が予想されます》

「ほっ!?!いつのまにウエンディそこまで分かるようになってるの!?!」

《ウルترونこと、アーニム・ゾラのデータより参照しました》

やだ、うちの子優秀。とりあえずビームを避けてはそこら辺にある瓦礫をウェブでぶん投げたり、勢いつけて蹴り飛ばしてるけど、まっつったく効果が無い!!強すぎる、デストロイヤー。ウルترونでも俺の蹴りで少しは怯んだぞ!?!(ガチギレ)

「ウエンディ!ビューグルの車って特車!?!」

《特車です。No.025となります》

「ナイスウー！けど着替えてる暇与えてくれないよな、これえ!!」

デストロイヤー相手にスパイダースーツに着替える暇はありません。こんなことならロージーが駄々こねてでも研究したがつてたナノテクの研究、もつと真面目に取り組むべきだった!!

さて、ウエンデイとの会話に出た特車だが、デイリービューグルの取材車両には特車が数台存在する。これはP・E社が出資した取材車両であり、中には放送機器とは別に「スパイダーマンスーツ」が格納されているのだ。ちなみにN.O. 35まで存在していて、その番号ごとにスパイダーマンスーツも特性が異なっている。どちらかというと、ハリーとオズボーンさんが作ったウイングスーツ……スパイデイ・アーマーの特徴が違うわけなのだが。

とりあえずデストロイヤーから振り下ろされた拳をタッチダウンライズというアクロバット技で回避。バク転で距離をとったらバイザーが上がってビームが放たれる。ウェブで上空へ舞い上がって事なきを得るが、あんな猛攻の前にスーツへ化粧直しをする余裕なんてないですよ!!

どうしたもんかと悩んでいると、雄叫びと共に1人の巨漢が戦斧を振り上げてデストロイヤーの横っ面をぶん殴った。

「地球にも、勇敢な戦士がいたものだな」

後ろから聞こえる声に振り返ると、そこには浅野忠信……じゃない、ウォーリアーズ・スリーの一員であるホーガンが!!そして隣には、鮮烈なるファンドラル、その後ろにはレディ・シフがいた。ウォ、ウォーリアーズ・スリーだ!ということはさっき戦斧振り上げて突っ込んだのは、大いなるヴォルスタッグってことか。

「地球の戦士よ。よくぞ戦った。我らも加勢しよう!」

ファンドラルが、一振りの長剣を鮮やかに振るってそう言う。する

と、遠くから悲鳴が聞こえた。ドガン！という轟音と共にさつき果敢にデストロイヤーに突っ込んだヴォルスタッグが廃車の上に突っ込み、それを更にスクラップにした。

「効いてないぞー」

凹んだ車の上に横たわりながらそう言うヴォルスタッグ。レディ・シフや、ホーガンが肩をすくめ、武器を構えた。向こう側から無傷のデストロイヤーが悠然とこちらに向かって歩いてくる。

「あー、その、たぶん君たち……ソーの仲間？」

「いかにも。我らはウォーリアーズ・スリー。ロキの企みを止め、ソーをアスガルドに連れ戻すために馳せ参じた」

ホーガンの言葉におおよそ納得する。たぶん雷神様、民間人の避難の手伝いをしてるはずです。とりあえず飛んできたビームを飛び上がって避けてから、俺はビームを盾で受け止めるシフや、ウォーリアーズ・スリーに作戦を伝える。

「初対面でごめんんだけど、あの金属ダルマの相手を1分頼むよ！」

「はっ！この俺がぶっ飛ばしてやる！」

復活したヴォルスタッグが車の屋根から立ち上がって再び戦斧を振り上げてデストロイヤーに突撃していく。他の仲間も武器を構えてデストロイヤーへと果敢に挑んでいった。ひとまず注意は逸れたな。俺は素早く車の上を移動して奇跡的に爆発も横転もしてないデイリービューグルの特車へと乗り込んだ。

《ピーター！聞こえるか!?!》

「やあハリー。ごめん、ちよつと渋滞に捕まってさ」

特車のパソコンにコマンドを打ち込む。すぐさま放送機器の一角が反転してスパイダースーツとアーマーが姿をあらわにした。腕時計型デバイスから聞こえるハリーの声にそう返しながら、スーツに袖を通していく。

《パークアベニューの情報はウエンディから取得済みだ。グウエンは父に同行してネバダだし…。とりあえずウイングスーツを着て、俺もそっちに向かう!》

「早めに頼むよ、ハリー。今回の敵はウルトロンより激ヤバだから」
《マジか? ピーター、次はどんな厄介ごとを呼び込んだんだ? 何があっても俺は驚かないぞ》

「じゃあ本当のことを。オーデインの持つグングニルがロキによって悪用されて、アスガルドの最強のロボットのデストロイヤーがソーを始末するため地球に送られてきたんだ」

《ごめん、ちよつと何言ってるかわかんないんだけど》

とりあえずデストロイヤーをどうにかしないとニューヨークが何度めか分からない更地の危機になってしまう。スーツを着て、オズボーンさん肝入りのウイングスーツNo. 025を身につける。

ハリーのウイングスーツもオズボーンさんが作った代物であるが、この人No. 025は俺のスパイダーマン能力を前提に新たに設計されたアーマーだ。ウルトロン・オートマトンで使用したアーマーからさらに軽量化。ロージの素材研究のデータや、多層構造体のボディアーマーは身動きが早いスパイダーマンの能力の邪魔にならない。

腕部には分子カッターが搭載されていて、なにより強いのが背中のみならずスペースに詰め込まれた小型ミサイルだ。うん、なんかだんだんアイアンマンみたいな様相になってきたぞ。

とりあえずアーマーを身につけて俺はすぐにビュウグルの車を後にする。嫌な予感……スパイダーセンスが働いて飛び出してみると、ビームがデイリービューグルの車を溶けたバターのようにしてし

まった。あの車、出資うちで結構な値段するんだけど!!しかも放送機材がパアになったので、これ以上、中継ができないと言う……これはまたジエイムソンがぶちぎれるぞ。

ピーター・パーカーからスパイダーマンとなり、空へと飛び上がった俺は、A・I・Mのラボからほど近い場所に着地して……。

そこで、半身をビームで焼かれたアルと。

傷だらけになったアルを介抱するソー、そして彼に寄り添うジエーンを見てしまった。